〔稿本表紙〕

明治二年
一月

忠義公史料 一

〔稿本にて補正〕

一二九　島津忠義藩政急速所置ノ為帰国ス

明治二年己巳忠義公年三拾久光公年五拾参

一月大

一日、藩庁ニテハ、忠義公御東幸中、京地警衛ニテ在京ノ処、藩政急速所置ノ為メ、帰国出願ノ許可アリテ、去月二十日京都出発、廿四日大坂出帆、今暁無事帰着セラレタル旨ヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

一御東幸付、

太守様御儀　御留守中京地御警衛筋之儀、被遊御承知、御着輦迄は　御在京之筈候得共、御国之儀、当春以来数多之出兵をも被仰付、此旨凱陣被仰付候条、深　思召之訳被為在、無御拠御国元御暇之儀、御願立相成候処、不日

還幸付ては、帰国之儀殊ニ難被及　御沙汰処、国政急速所置方ニ付、無拠願之趣被　聞食届、御暇下賜候、然処東北漸平定ニ及候得共、殲滅ニも不至、殊更綱紀御維持之前途、深御依頼被為遊候儀ニ付、国元政治行届候上は、早々上京、　皇室を可奉輔翼旨被仰渡、益御機嫌能、旧臘廿日京師

御発駕、同廿四日大坂　御出帆、今暁前之濱江　御着艦、御行形ニて

御着城、猶御安康被遊御座、奉恐悦候、依之

御一門方嶋津左衛門一列并諸大身分、其外月次御礼罷出候面々、諸士諸座付士、明後三日於席々謁御家老、御祝儀可被申上候、其外略ス、〔島津忠義〕備後

巳正月朔日

外ニ五人略ス、

一三〇　東京神田橋御門内旧庄内酒井忠篤上リ屋敷ヲ家作共忠義ニ下賜セラル

五日、東京神田橋御門内旧庄内酒井左衛門上リ屋敷ヲ、家作共忠義公ニ下賜セラル、ソノ関係文書左ノ如シ、

一三〇ノ一　一御書附一通

但

神田橋御門内元酒井左衛門上リ屋敷、家作共下賜之儀、

官掌

山瀬次郎〔種次郎カ〕

右は今五日弁事御役所より御呼出ニ付、私被差出候処、於伝達所右〔種カ〕次郎を以被相渡候付、御国許江可申上旨申述置候、

右之通今日相勤候間、御別紙相添此段申出候、以上、

〔巳カ〕辰正月五日　御留守居附役

隈元敬一郎

内田仲之助殿

右之通相勤申出候、就てハ御承知被遊候上、御礼御飛札を以、被仰上方御相当之哉ニも奉存候得共、於京都御聞繕之上、被仰上候方ニも可有御座と奉存候、左候て爰元江も其段被仰渡候ハヽ、弁事衆迄私共前より形行申上置候様可仕候、御書附相添此段申上候、以上、

東京在勤

内田仲之助

巳正月五日

〔島津久籌〕主殿様

御名

神田橋御門内元酒井左衛門上リ屋敷、家作とも下賜候旨

御沙汰候事、

一三〇ノ一　神田橋御門内旧庄内屋敷、今般家作共御拝領被遊候ニ付ては、則御屋敷外廻端々江棒杭相立置候様可仕候、当分北越表より引上之隊々、御入置相成候間、過日申上置候通之事情ニ付、自然御引揚相成候儀共ニ候ハヽ、早速引移り取締、且万端取始末等、追々都合いたし、大破之場所は夫々大工等江見分為致、惣絵図面・御屋敷坪数等、巨細御届可申上越候、尤御殿廻御長屋等、此節兵隊入込ニ付、見分等も仕候処、相応ニ相損居候場所も不少、いつれ追々委細以絵図面可申上越候得ど

も、差懸之形行大頭迄、此段御届申上越候、以上、

巳正月六日　　内田仲之助

主殿様

追て、先達申上置候隅田川筋東岸仙臺旧下屋敷之儀は、為何御沙汰も無御座、幸大久保一蔵上京之事ニ付、同人江御聞取被下候様仕度候、

一兵隊入込ニ付ては、早速差引且隊長等江此段申渡、不取荒様取締有之様達置申候、此段も旁為御含申上置候、以上、

一三〇ノ三
二月廿二日相達

一東京神田橋御門内元酒井左衛門上リ屋敷、家作とも拝領被仰付候旨、於東京承知仕、難有仕合奉存候、就は於国元承知之上、御礼向之儀何様相心得可然哉、此段奉伺候、以上、

正月十四日　　御名内

弁事　　有川十右衛門

御役所

右江御張紙

以詰合重臣御礼可申上候事、

右は御方より主殿殿へ被申上越趣有之、伺書被差出候処、御張紙之通被相達候付、御仮建ニおゐて御重役名代新納嘉藤二相勤候、此段為御心得申越候、以上、

京都

巳二月廿四日　　有川十右衛門

新納嘉藤二

東京

内田仲之助殿

一三一　藩船三邦丸朝廷御用ヲ命セラレタルニ付テ願書

八日、藩船三邦丸ニ朝廷御用ヲ命セラレタレトモ、目下藩用ノ準備整ヒ、且ツ既ニ修覆ノ期ニ達シヌレハ、修覆後用命アランコトヲ願出セリ、其ノ文書左ノ如シ、

一弊藩手船三邦丸、今般

朝廷御用被仰付候御模様之哉ニ奉伺候、然処是迄永々北越表御用相勤候訳ヲ以、相損候ケ所御修復等も被仰付被下候上之儀ニて、故障等申上候ては幾重ニも恐入奉存候得共、右は国元江無拠至急之荷物差下候積ニて、

大体積入仕廻相成居、手負人等も平癒之分追々為乗込候筋ニて、船中人数之儀も一往は差下、暫時休息為致候手筈御座候処、右通御用被仰付候ては、旁差支候次第御座候間、何卒此節之義は　御免被仰被下度奉願候、左様御座候ハヽ、急速出帆為致、夫々用向相弁、猶御用も被為在候ハヽ、速ニ御当府江乗戻し候様仕度奉存候、此段無余儀奉願候、以上、

御官名内

正月八日　　内田仲之助

右軍務官御用掛市川鐘次郎江差出、

一三二　五代友厚ニ伊地知貞馨ノ上京迄軍艦買上御用掛兼勤ヲ命ス

コノ日、藩士外国官判事五代友厚ニ、伊地知貞馨壮之丞ノ上京迄、軍艦買上御用掛兼勤ヲ命セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

御沙汰書

五代五位

伊地知壮之丞ヘ、軍艦御買上御用掛被　仰付置候処、暫時御暇願出、願之通被　仰付候間、同人再上京迄之処、当官ヲ以右御用掛当分兼勤被　仰付候事、

一三三　旧幕府ヨリ農商民ニ与ヘタル称氏・佩刀等ノ特典ヲ廃止ス

十日、旧幕府ヨリ農商民ニ、称氏・佩刀及ヒ給禄・免役等ノ特典ヲ与ヘタルモノハ、一切之ヲ廃止スヘキヲ達セラル、其ノ文左ノ如シ、

御布告書

府藩県管轄之地百姓・町人共、旧幕府ヨリ苗字帯刀差免、或ハ扶持遣シ、諸役免除等申付候儀、一切廃止被仰出候事、

〔朱〕一　正月〔九日〕　　行政官

今日非蔵人口御呼出ニテ、五辻弾正大弼殿ヨリ被相渡候旨、津軽様衆ヨリ廻章到来イタシ候付、差上申候事、

正月十日　　有川十右衛門」

一三四　上地ヲ命セラレタル諸藩ノ屋敷地ニ付テ

新拝領又ハ未拝領ヲ上申スヘキヲ達ス

十四日、東京ニ於テ先般諸藩屋敷地上地ヲ命セラレシガ、其ノ後新拝領ノモノ又ハ未拝領ノモノ、委細来ル二十日限リ上申スヘキヲ達セラレ、二十日上申ス、ソノ文書左ノ如シ、

一三四ノ一 諸藩東京屋敷地、先般上地被仰付候処、其後新ニ拝領被仰付、又ハ未拝領不致向共、別紙雛形之通委細書付、来ル二十日限可申出事、

一　雛形

何屋鋪
郭内又郭外
何処
何箇所

但一屋敷別坪数何程ト書付、

右之内何処何屋敷、従前之通拝領被仰付、又ハ返上之侭ニテ、未替地拝領不仕候事、

何処
何屋敷

右役屋敷ニ付、先般上地御用屋敷ニ被仰付、又ハ誰某江賜候事、

何処
何屋鋪

右今度被召上、御用屋敷ニ被仰付、又ハ同断、

何処
何屋敷

右今度拝領被仰付候事、

右之通ニ御座候事、

月日　藩名

右式之通、今日弁事御役所より御呼出之由ニて、官掌増田勇を以御渡之由、弘前藩より廻状到来ニ付、則肥前藩へ通達、触下江も相達候事、此節三邦丸便より京都江申越候事、

一三四ノ二

神田橋御門内
元庄内屋敷
坪数壱万三百八拾七坪

右今度拝領被
仰付候事、

芝居屋敷
同七万三千九百弐坪
高輪下屋敷
同四万七千九百七拾四坪
幸橋御門内屋敷
同八千六百拾坪

右返上之侭ニて、当分詰人数御長屋拝借仕罷在候事、

田町下屋敷
同九千四百拾壱坪

右返上之侭ニて、当分詰人数前同断罷在候、尤同前之義は船(待カ)等ニ付、拝領不仕候ては、旁差支候次第も有之候付、追て願書差上候心得御座候事、

右之通ニ御座候事、

御官名内
内田仲之助

正月廿日
弁事
御役所

一三五　島津廣兼等ニ去春以来畿内及東北諸道出征者ノ戦功調査ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテハ、家老島津伊勢ニ、去春以来畿内及東北諸道出征者ノ戦功調査ヲ命シ、更ニ十九日ニ至リ、伊地知正治・島津式部・成田正右衛門・坂本廉四郎・右松十郎太ニモ、同様調査掛ヲ命シ、尚二十一日ニ至リ、島津小平太・川南東右衛門ニモ同様ニ命ス、ソノ文書左ノ如シ、

一三五ノ一

嶋津伊勢

右ハ去春以来、畿内表ヨリ東北諸道ニ相掛、為賊征出軍之兵隊屢遂勇戦、終ニ掃撃成功、各隊及帰陣候付、面々勉励尽力之次第、深浅厚薄モ可有之、且死傷之始末尚精細取調、急速言上可有之旨被仰付候、

正月十四日

島津備後

一三五ノ二　戦功調査達書

伊地知正治
島津式部
成田正右衛門

坂本廉四郎
右松十郎太

右ハ去春以来、畿内表ヨリ東北諸道為賊征出軍之兵隊屢遂勇戦、終ニ掃撃挙成功、各隊及帰陣候付、右面々勉励尽力之次第、且死傷之始終取調掛被仰付候、尤各隊之隊長・監軍等ヨリモ勲労其外之次第、取シラヘ申出候様、先達テ申渡置候付、夫々引合無遺漏取調、早々申出候様被仰付候、此旨申渡、可承向ヘモ可申渡候、

正月　伊勢

「巳(朱)正月十九日

御本文之通、銘々又ハ名代ヘ申渡、大隊長ヘモ申渡候、

取次
上村直兵衛」

島津小平太
川南東右衛門

一三五ノ三

右ハ去春以来、畿内表ヨリ東北諸道為賊征出軍之兵隊屢遂勇戦、終ニ掃撃挙成功、各隊及帰陣候付、右面々勉励尽力之次第、且死傷之始終取調掛被仰付候、尤各隊之隊長・監軍ヨリモ、勲労其外之形行取シラヘ申出候様、先達テ申渡置候付、夫々引合無遺漏同掛申談取調、早々申出候様被仰付候、此旨申渡、可承向ヘモ可申渡候、

正月　伊勢

「巳(朱)正月廿一日

御本文之通銘々ヘ申渡、大隊長ヘモ申渡候、

取次
上村直兵衛」

一三六　大小侯伯及中下大夫・上士ニ三月十日ヲ限リ東京参着ヲ命ス

十五日、当春再度御東幸ノ上、天下ノ大小侯伯及中下大夫・上士ヲ召シ、輿論公議ヲ以テ、国是ノ大基礎ヲ建サセラルベキニ付、三月十日迄ニ、東京ニ参着スベキヲ達セラル、尋テ十九日ニ至リ、四月中旬迄ニ参着スベキノ再達アリタリ、其ノ文書左ノ如シ、

一印

来春再
東幸ニ付、天下之大小侯伯及中下大夫・上士ニ至迄ヲ
被為

召、輿論公議ヲ以、国是ノ大基礎ヲ可被為建
思食ニ付、大小侯伯及中下大夫・上士ニ至ル迄、悉三
月十日ヲ限リ東京ヘ参着可致、尤道路之遠近モ有之儀
ニ付、各其心得可有之旨、
御沙汰候事、
但昨春来兵馬倥偬、国事多端ニ付テハ、上下之疲弊
不一方、深ク大儀ニ被
思食候得共、右会議被為在候ハ、実ニ天下之大事
件ニ付、右
御趣意ヲ奉戴シ、成丈軽装無用之冗費無之様、厚被
仰出候事、
巳正月

御書付一通、於東京御達相成候付、於京都モ御達相成
候哉、相伺候処、於京都モ御達相成候段、致承知候得
共、為念差越候旨、内田仲之助ヨリ申越候付、差上候
事、

巳正月十五日　　新納嘉藤二

二印

御再幸ニ付、於東京諸侯中大夫、三月十日ヲ限リ、参
着可致旨御布告之処、御都合モ被為在候ニ付、此度別
紙之通更ニ被
仰出候事、
巳正月〔十八日〕　　行政官

〔別紙〕
当春再東京ヘ
行幸ニ付、天下之大小侯伯及中下大夫・上士ニ至ル迄
被為
召、輿論公議ヲ以、国是之大基礎可被為建
思食ニ付、大小侯伯及中下大夫・上士ニ至ル迄、悉四
月中旬ヲ限リ、東京ヘ参着可致、尤道路之遠近モ有之
儀ニ付、各其心得可有之旨、
御沙汰候事、
但昨春来兵馬倥偬、国事多端ニ付テハ、上下之疲弊
不一方、深ク大儀ニ被
思食候得共、右会議被為在候ハ、実ニ天下ノ大事
件ニ付、右
御趣意ヲ奉戴シ、成丈軽装無用之冗費無之儀、厚
被
仰出候事、
巳正月〔十八日〕

非蔵人口ニオヒテ、千種少将殿ヲ以被相渡候旨、津軽様衆ヨリ廻状到来イタシ候事、

正月十九日　　有川十右衛門

一三七　船艦購入ノ節ハ諸開港場府県ノ指揮ヲ受クヘキヲ達ス

コノ日、従来諸藩ノ外国ヨリ購入セシ船艦ハ、往々高価粗悪ノモノアリシニヨリ、尓後ハ指揮ヲ受ケテ購入スヘキヲ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

正月十五日仰渡シ

一従来諸藩外国人直相対ニテ、船艦買入候所、間々大金ヲ費シ、廃退粗悪之品買取候向モ有之、畢竟疲弊之一端ニ付、以来船艦買入候節ハ、諸開港場府県ヘ申出候ハヽ、其筋ヨリ吟味ヲ遂ケ、指図可致候間、此旨可相心得事、

正月〔十日〕　　行政官

右之通昨日、西城より御呼出之由ニて、官掌山瀬種次郎を以、御渡相成候旨、弘前藩より廻状到来ニ付、肥前藩江通達、触下江も相達候事、

此節三邦丸便より京都江申越候事、

一三八　沖直次郎ニ徴兵大隊司令ヲ命ス

十七日、本藩士沖一平直次郎徴兵大隊司令ヲ、同石神良策ハ、医学所・病院・種痘館・黴毒院・薬園五局ノ取締助役ヲ命セラル、其ノ辞令左ノ如シ〔石神良策ノ辞令記載なし〕

辞令

沖　直次郎

徴士大隊司令被申付候事、

正月　　軍務官

右之通、正月十七日被仰付候旨、御届申出候ニ付、三邦丸便ヨリ京都江申遣候事、

一三九　西郷・吉井・伊地知ヘ早々上京ノ旨達ス

十八日、曩時西郷隆盛・吉井友實・伊地知正治ノ三氏ハ、願ニ依リ帰国中ナリシカ、此ノ日御用ニ付、早々上京スヘキヲ達セラル、其ノ文左ノ如シ、

西郷吉之助

吉井幸助
伊地知正治

先般依願帰国被　仰付置候処、御用有之ニ付、早々上京可致旨　御沙汰候事、

一四〇　北越ヨリ東京ヘ引揚ケタル薩藩兵ヲ半分帰国休兵セシムコトヲ達ス

十九日、今般北越ヨリ東京ヘ引キ揚ケタル本藩兵ハ、昨年来長月日ノ出陣ニ付、半分ハ帰国休兵セシメ、半分ハ後日指令スベキ旨ヲ達セラル、其ノ文左ノ如シ、但後日ノ指令ヲ逸ス、

一四〇ノ一　達書

薩州藩

其藩兵隊、昨年来出兵長陣ニ相成候条、今般従北越東京ヘ引揚候兵隊之内、半分帰国休兵可致候、残兵ハ追テ何分
御沙汰可有之候事、

正月　軍務官

今日軍務官ヨリ御用有之、御留守居附役隈元敬一郎罷出候処、本文之通御書付御渡相成候付、兵隊半方ハ、近々出（ママ）為致候様可仕候、此段申上候、以上、

巳正月十九日　内田仲之助

一四〇ノ二　藩吏通牒書

去年被差出置候徴兵、去夏越後表ヘ出軍、難戦等ニヲヨヒ候旁ノ申立ヲ以、御暇御願立相成候処、百日御暇被成下候付、年内被差下候、就テハ当分三小隊並大砲隊爰許ヘ相詰居候付、右之内二小隊之儀、徴兵ヘ被差出度、左候ハヽ罷下候徴兵ノ儀ハ、夫形御暇被下置候方可然吟味ニヲヨヒ、御上京中伺済相成居付、別紙之通軍務局ヘ差出候処、願之趣尤ニ候条、被免候付、代之兵隊急々可差出旨、御張紙ヲ以被　仰渡候付、頴娃一小隊、鹿屋・小根占合一小隊、去十二日被差出候、此段申越候条、

太守様

中将様被達

貴聞、陸軍所ヘ被相達、致御暇候隊中ヘモ被申渡候儀共、何分モ可被取計候、以上、

巳正月廿日　島津主（久籌）殿

島津備後〔忠義〕殿
島津圖書〔久治〕殿
桂右衛門〔久武〕殿
島津伊勢〔広兼〕殿
川上龍衛〔久鮮〕殿
町田内膳〔久憲〕殿
島津良馬〔久義〕殿
島津隼人〔久芳〕殿

〔朱〕「本文達

貴聞、大隊長へ相達、致御暇居候隊中へモ申渡置候事」

一四〇ノ三　別紙願書

弊藩差出置候徴兵、去夏越後表へ被差出候処、難戦及度々、戦死・手負不少、其余人数連日雨露ニ被晒苦戦之積労ニ悩ミ、追々所労之者モ数多有之、将又親族戦死等ニテ、情実無余儀訳柄ノ者モ有之候付、難黙止、御暇奉願度含之処、百日御暇被成下難有奉存候、就テハ遠国之事ニテ、御暇日数モ往来ニ費ヘ、手負所労之者勿論、存分保養モ相調不申、旁之事情御採用被下、別段之御取訳ヲ以、御暇被下切被　仰付度奉願候、左候テ右代之兵隊、当分詰合之内二小隊差出申度奉存候間、御免被　仰付被下度、此段奉願候、以上、

御名内

正月十二日　新納嘉藤二

軍務官

御役所

軍務官ヨリ御呼出ニ付、御留守居付役寄時任清左衛門罷出候処、判事試補東太郎平ヲ以被相渡候、左候テ両三日中徴兵被差出候節ハ、公用人付添右名書持参可致旨、同人ヨリ申聞候事、

巳正月十五日　新納嘉藤二

〔朱〕「御張紙

願之趣尤ニ候条被免候ニ付、代之兵隊急ニ差出候事」

一四〇ノ四　旅費請求書

一金千五百七拾弐両三朱

兵隊・夫卒合人員五百五拾九人

隊長ヨリ戦兵迄四百弐拾人

夫卒百三拾九人

壱朱銀弐万五千百五拾切
但壱日壱人ニ付、三朱ツ、
右東海道日数拾五日分兵食料
一同三百七拾八両
兵隊四百弐拾人
但継人足百弐拾六人、壱人ニ付三両宛、
右同断、東京ヨリ京師迄兵士百人ニ付、人足三拾人被下分、
右ハ越後村上表ヨリ引揚候兵隊、今般半方帰国休兵被仰付候付、明廿三日御当府出立仕候間、東海道旅籠料並人足賃、御法之通御下渡被下度、此段奉願候、以上、
御官名内
正月廿二日　田中清之進

一四一　公議所開会期日并公議人ノ人数・資格等ノ再達

コノ日、先月二十日行政官ヨリ達セラレタル公議所開会期日、并ニ公議人ノ人数・資格等ノ事ニ付、達漏ノ恐レアル為ニ、議事調局ヨリ再達アリタリ、ソノ達書左ノ如シ、

一公議所開議之期日、来巳年二月十五日と被仰出候事、
一公議人人員之儀は是迄大藩三人、中藩二人、小藩一人ト被
仰出候得共、先一同一人ツヽ差出候様被
仰出候事、
一公議人之儀ハ、是迄其藩論ニ可代人才差出候様被
仰出候得共、右は執政参政之内より一名撰挙いたし、
差出候様被
仰出候事、
一是迄主人在職之藩々、公議人差出ニ不及様被　仰渡置候得共、已来主人在職之有無ニ不係、各藩総て可差出候様、被　仰出候事、
十二月〔十日〕　行政官
右写書之通、旧冬相達候得共、万一達漏ニ相成候ては不容易儀ニ付、為念及再達候事、
一同東京江到着次第、議事調局江無遅滞可届出候事、
但詰合之議員・幹事江も同様可申出候事、
正月　議事調局
右之通今十九日被仰渡候旨、弘前藩より廻状到来、触

下江も相達、此節三邦丸より京都江申越候事、

新納嘉藤二
毛利宰相中将内
坪井宗兵衛
上津四郎左衛門

「本文、九門出入別て六ケ敷故、右之通御願相成候事」(朱)

右指令書

御官名

九門内御警衛願之趣、神妙之事ニ候、然ル処即今、海内漸平定、諸道関門ヲモ廃止被仰出候折柄、却て人心疑懼ヲ抱候儀も可有之ニ付、平日出張巡邏等ニ不及候得共、不遠御東幸ニ相成、御留主別て至重之事ニ候得ハ、急と人数備置、非常之節は早々繰出、厳重御警衛可致旨、御沙汰候事、

二月　行政官

一四二　薩・長・土三藩九門警衛ノ願書及ヒ指令書

二十日、薩・長・土三藩ノ重臣連署上書シテ、九門ノ巡邏警衛ヲナサンコトヲ請フ、二月十日ニ至リ、不日東行ニ付、兵ヲ其ノ邸ニ集メ、不虞ニ備フベキヲ達セラレ、尋デ本藩ニハ中宮御所ヲ警衛セシメラル、ソノ願書及ヒ指令書左ノ如シ、

三藩九門警衛願書

一方今天下漸平定之勢と相成候処、騒乱之余人心恟々、自然不慮之変差起候も難計、弥以厳整御警衛有之度は此時と、日夜抱憂仕候、尤軍務官ニおゐて、御疎は有之候得共、何卒三藩へ九門内警衛被仰付候様奉願候、左候ハヽ、兼て斥候番所差建人数差出置、日夜巡邏為仕度候間、此段宜御沙汰可被下候様奉願候、已上、

山内少将内
山川久大夫

正月廿日　御名内

一四三　大阪府判事税所篤満ヲ河内県知事ト為ス

二十二日、大阪府判事税所篤満(長蔵、薩摩藩士)ヲ以テ、河内県知

事ト為ス〔本文記載なし〕

一四四　島津忠義山口・佐賀・土佐ノ藩主ト連署シテ版籍奉還センコトヲ請フ

二十三日、忠義公山口・佐賀・土佐ノ各藩主ト連署シテ、封土・人民ヲ奉還センコトヲ請フ、翌日優詔アリテ、東京再幸ノ日公議ヲ以テ決裁スベケレドモ、版籍ハ一応取調ヘ差出スヘキヲ指令セラル、ソノ願書及ヒ指令書左ノ如シ、

長・薩・肥・土四藩上表

臣某等頓首再拜、謹テ案ズルニ、　朝廷一日モ失フ可ラザル者ハ大体ナリ、一日モ仮ス可ラザル者ハ大権ナリ、天祖肇テ国ヲ開キ、基ヲ建玉ヒシヨリ、　皇統一系万世無窮、普天率土其有ニ非ザルハナク、其臣ニ非ザルハナシ、是大体トス、且与ヘ且奪ヒ、爵禄以テ下ヲ維持シ、尺土モ私ニ有スルコト能ハズ、一民モ私ニ攘ムコト能ハズ、是大権トス、在昔　朝廷海内ヲ統馭スル、一ニコレニヨリ、聖躬之ヲ親ラス、故ニ名実並立テ、天下無事ナリ、中葉以降綱維一タビ弛ヒ、権ヲ弄シ、柄ヲ争フ者、踵ヲ　朝廷ニ接シ、其民ヲ私シ、其土ヲ攘ムモノ天下ニ半シ、遂ニ搏噬攘奪ノ勢成リ、　朝廷守ル所ノ体ナク、秉ル所ノ権ナクシテ、是ヲ制馭スルコト能ハス、姦雄迭ニ乗シ、弱ノ肉ハ強ノ食トナリ、其大ナル者ハ十数州ヲ并セ、其小ナル者猶士ヲ養フ数千、所謂幕府ナル者ノ如キハ、土地人民擅ニ其私スル所ニ頒チ、以テ其勢権ヲ扶植ス、是ニ於テ乎、　朝廷徒ニ虚器ヲ擁シ、其視息ヲ窺テ喜戚ヲナスニ至ル、横流之極、滔天回ラザルモノ、茲ニ六百有余年、然レ共其間往々　天子ノ名爵ヲ仮テ、其土地人民ヲ私スルノ跡ヲ蔽フ、是固ヨリ君臣ノ大義、上下ノ名分万古不抜ノモノ有ニ由ナリ、方今　大政新ニ復シ、万機之ヲ親ラス、実ニ千歳ノ一機、其名アツテ其実ナカル可ラズ、其実ヲ挙ルハ大義ヲ明ニシ、名分ヲ正スヨリ先ナルハナシ、嚮ニ徳川氏ノ起ル、古家旧族天下ニ半ス、依テ家ヲ興スモノ亦多シ、而シテ其土地人民、コレヲ　朝廷ニ受ルト否トヲ問ハス、因襲ノ久シキヲ以テ今日ニ至ル、世或ハ謂ラク、是祖先鋒鏑ノ経始スル所ト、吁何ゾ、兵ヲ擁シテ官庫ニ入リ、其貨ヲ奪ヒ、是死ヲ犯シテ獲所ノモノト云ニ異ナランヤ、庫ニ入ルモノハ人

其賊タルヲ知ル、土地人民ヲ擄奪スルニ至ツテハ、天下コレヲ怪シマズ、甚哉、名義ノ紊壊スルコト、今也丕新ノ治ヲ求ム、宜シク大体ノ在ル所、大権ノ繫ル所毫モ仮ベカラズ、抑臣等居ル所ハ、即チ　天子ノ土、臣等牧スル所ハ即チ　天子ノ民ナリ、安ンゾ私ニ有スベケンヤ、今謹テ其版籍ヲ収メテ之ヲ上ル、願クハ朝廷其宜ニ処シ、其与フ可キハ之ヲ与ヘ、其奪フ可キハコレヲ奪ヒ、凡列藩ノ封土更ニ宜シク　詔命ヲ下シ、コレヲ改メ定ムベシ、而シテ制度典型軍旅ノ政ヨリ、戎服器械ノ制ニ至ルマデ、悉ク　朝廷ヨリ出テ、天下ノ事、大小トナク皆一ニ帰セシムベシ、然后ニ名実相得、始テ海外各国ト並立ベシ、是　朝廷今日ノ急務ニシテ、又臣子ノ責ナリ、故ニ臣某等不肖謭劣ヲ顧ミズ、敢テ鄙衷ヲ献ズ、　天日ノ明幸ニ照臨ヲ賜ヘ、臣某等誠恐誠惶頓首再拝、以表、

毛利宰相中将
嶋津少将
鍋島少将
山内少将

正月〔二十三日〕

右指令書〔正月二十四日〕

毛利宰相中将
島津少将
鍋島少将
山内少将

今度其藩々上書之趣、土地人民版籍奉還可致之旨、全忠誠之志深　叡感被　思食候、尚東京　御再幸之上、会議ヲ経、公論ヲ被為竭、何分之　御沙汰可被為在候得共、版籍之儀ハ一応取調可差出之旨、被　仰出候事、

一四五　各藩蒸気船・帆船等東京・横濱出入港ノトキハ、鑑札ヲ受クヘキコトヲ達ス

コノ日、各藩蒸気船・帆船等入港又ハ出港ノ時、東京ニテハ軍務官、横濱ニテハ裁判所ニ届出デ、必ス鑑札ヲ受ケテ航海スベキヲ達セラル、其ノ達文左ノ如シ、

達書

一　薩州藩
外拾八藩

藩々蒸気・帆前船共入港揚碇之節ハ、即刻東京ハ当官、

横濱は裁判所江届出、鑑札ヲ取航海可致、尤無届無鑑之船は、屹度取糺シ御所置可有之候事、

正月　　軍務官

一四六　海外渡航者ノ印鑑改定ニ付キ、在外者ノ氏名・年齢等ヲ二月中ニ差出サス

コノ日、従来外国渡航者ニ下附シタル印鑑、今般改造ニ付、目下海外ヘ渡航中ノ者ハ、士農工商ニ拘ハラズ、ソノ氏名・年齢等巨細取調ヘ、二月中ニ東京外国官ヘ差出スヘキ昨日発布ノ廻達ニ接ス、ソノ達書左ノ如シ、

一四六ノ一　達書

是迄外国航海之者へ御渡相成候印鑑、今般御改造相成候ニ付、当時海外諸国へ罷越居候者之姓名・年令等、士農工商ニ不拘巨細取調、来ル二月中、東京外国官へ可申出旨、

御沙汰候事、

正月（二十二日）　　行政官

右之通西城ヨリ昨日御呼出、金谷敬二郎ヲ以、御渡相成候旨、弘前藩より廻状到来ニ付、尾州藩江順達、触下江も相達候事、

右弐通（前項軍務官ヨリ本藩外十八藩へノ蒸気船・帆前船、入港又ハ出港ノ際届出デ、鑑札ヲ受クベキ旨ノ達書トモ）、正月廿三日大・小荷駄方崎元仲之丞出立便より差越候事、

一四六ノ二　外国航路之者江御渡之印鑑御改造ニ付、海外諸国へ罷越居候者、姓名、年齢等取調、当月中外国官へ可申出旨被仰渡候付、何分早々被仰渡候様、可申上旨御問合之趣致承知、則申上候処、爰許ニて取調出来兼候付、御国許往通之上、何分可被仰渡候間、其内形行を以御届被申上置候様可申越旨、議政所より致承知候間、此旨御返答旁申越候、以上、

京都　　有川十右衛門
　　新納嘉藤二

二月十四日

東京

内田仲之助殿

一四六ノ三　外国航海之者江御渡之御印鑑、今般御改造相成候付、

当時海外諸国江罷越居候者之姓名等取調、当月中可申上旨被仰渡趣承知仕、爰元ニてハ相分り不申候付、京都表江申越候処同所ニても取調出来兼、国許江申越候間、京都表より申越候、就ては何れ報知次第御届可申上候間、被聞召置被下度、此段申上候、以上、

御名内

二月廿七日　　内田仲之助

右巳二月廿七日、御留守居附役隈元敬一郎、外国官江持参、御用掛北代忠吉江面会之上差出置候事、

一四七　赤塚真成ニ短刀料百両下賜並ニ中井弘徴士外国官判事ニ任セラル

二十四日、藩船春日丸船将赤塚真成源六、昨年来勉励ノ功ニヨリ、短刀料百両ヲ下賜セラレ、藩士外国掛中井弘蔵ハ徴士・外国官判事ニ任セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

一四七ノ一

赤塚源六

昨年来屢東西航海勉励、神妙之事ニ候、依之短刀料百両下賜候事、

正月　　行政官

右正月廿六日、隈元敬一郎附添罷出候処、権弁事小野洞之助より相渡候旨御届申出候事、

一四七ノ二

島津少将

其方家来中井弘蔵儀、徴士・外国官判事被仰付候間、出仕可申付事、

一四八　藩庁、番頭及ヒ同嫡子ノ百官又ハ関東百官ヲ名ニ用フルヲ禁スルコト等ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、番頭及ヒ同嫡子ノ百官又ハ関東百官ヲ名ニ用フルヲ禁スルコト、並ニ血統ヲ重ンスル為メ、他家ヘ養子タリシ者ノ実家復帰ヲ許可スベキコト、及ヒ大奥年寄ニテ年功アル者ノ養子、又ハ婦人家号ハ、以来廃スヘキコトヲ達セリ、ソノ文左ノ如シ、

一番頭并同嫡子は、百官又ハ関東百官之内を名ニ付候ても不苦候旨、寛永年鑑被仰渡置候得共、已来御番頭体重職之面々は勿論、其以下迚も関東百官は名ニ不用様被仰付候条、当分名付居候面々は名替可被願出候、

一家統相続之儀は、第一血筋連続為重立儀ニて、孝道之

大本ニ候処、天明之度他家養子ニ遣し候者、実家為相続立帰候儀、御免被成間敷旨御規定、以来二男以下他家養子遣置候得は、其後嫡子致病死、外ニ相続之男子無之、血筋断絶之期ニ至り候ても、実家帰り不相成、乍不本意他家より養子いたし候者多数有之、剰其家二三弟等家内ニ現在罷在候者共、右は養家養子等ニ差遣、別段他家より養子相求候弊不少、甚以人倫之紊無申迄、対先祖不孝ニも相当事候条以来直子無之は養子取組之砌、自然相続当然之二三弟等其家ニ無之節は、成丈嫡庶又は慥成血筋之内より養子いたし候様被仰付候、左候て他家養子参り居候者も、部屋栖之者は勿論、家督たり共無拠形行次第ニは、実家為相続立帰候も御免可被仰付候間、一同厚可心得候、

一大奥御年寄数十年首尾好相勤候者江は、御取訳を以、跡御立被下養子被仰付、間ニは婦人之名前を以新規家号被仰付、家之始祖罷成候儀も有之、名義不当ニ付、以来被廃、女子之跡御取建之節は、其者養子ニは不被仰付、其家を何某家許と可被仰付候、尤婦人之名前を以家号ニは屹と不被仰付候、

右之通被仰付候条、向々江不洩様可致通達候、

巳

正月廿四日　　備後

一四九　領内ノ種子油不足ニヨリ尓来菜種子ノ輸出ヲ禁ス

二十六日、藩庁ニテハ領内ノ種子油使用不足ヲ告グルニヨリ、尓来菜種子ノ輸出ヲ禁スル旨ヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

一種子油別て無多事諸人難渋之段相聞得候付、以来菜種子他国江積出候儀、屹と被差留候条、此旨向々江致通達、諸郷・私領へも申渡、取締向行届候様、掛之向江も可申渡候、

巳正月廿六日　　龍衛

一五〇　瑞典・那耳回国及ヒ是班牙国ト条約締結ノ旨ヲ達ス

二十七日、瑞典・那耳回国及ヒ、是班牙国ト今般条約ヲ締結セシ旨ヲ達セラル、其ノ文左ノ如シ、

正月廿七日仰渡、京都江は廿九日出立、池田次郎兵衛便より申上越候事、

一瑞典及那耳回国

右二国ニて一王之政令

是班牙国

右之国々と今般条約御取結ニ相成候間、為心得此段相達候事、

正月　　行政官

一五一　金札、諸上納ニハ正金百両ニ付百二十両ノ相場ヲ以テ上納スヘキヲ達ス

コノ日、金札ハ諸上納ニハ、正金百両ニ付百二十両ノ相場ニテ納メ、民間ニテハ日々ノ相場ニテ取引スヘキヲ、時ニハ受授セザル者モアルヤニ付、カヽル心得違ナキ様、府藩県ニテ達スベキ旨ヲ令セラル、ソノ書左ノ如シ、

本書前同断

一金札之儀ハ、租税其外諸上納、正金百両ニ付、百二拾両之立相場ヲ以て、上納被仰付、下方於ては日々立相場ヲ以て取引可致処、間々右諸買物払代等ニ不受取者も有之哉ニ相聞、以て外之事ニ候、右様心得違之者ハ、屹度可及沙汰候条、兼て其旨府藩県ニ於て、遍く可触達者也、

正月〔二十四日〕　　行政官

一五二　勅使柳原前光、副使大久保利通ヲ遣シ、久光ノ勤王ノ功ヲ慰シテ、上京ヲ促ス

三十日、右少弁柳原前光ヲ勅使トシ、大久保利通ヲ之ニ副属セシメテ、鹿児島ニ差遣シ、久光公積年勤王ノ功ヲ慰セラレ、且ツ之ヲ召シテ大政ヲ翼賛セシメラル、勅使ハ二月二日宸翰ヲ拝受シ、三條公ヨリ書柬ノ寄託ヲモ受ケ、同八日京都ヲ発シ、利通モ亦岩倉公ヨリノ書柬ヲ携ヘ、十一日水引一小隊ヲ護衛トシテ、大坂ヨリ乗船シ、十三日鹿児島ニ着ス、久光公病ヲ力メテ之ヲ海岸ニ迎ヘ、翌日宸翰ヲ拝受セラル、其ノ関係文書左ノ如シ、

一五二ノ一　　島津中将

一積年勤王之勲労不少、殊ニ去ル丁卯大政復古戊辰変動之節ヨリ、終始励精尽力、遂ニ今日

之偉績ヲ奏スルニ至ル、素ヨリ官武諸臣之力ニ依ルト雖モ、抑亦薩・長二藩之功ヲ抜群トス、依之今般其功労ヲ被慰度

思召ニ付、為

勅使侍臣柳原右少弁被差下候間、此段相達候事、

正月　　行政官

本文ニ付、二月八日京都御出立御下向被遊候由、申来候事、

右非蔵人口へ重臣御呼出、東園宰相中将様を以、御渡相成候旨申来、

一長州様江は萬里小路様被差下候事、

一被召付候人数左之通、

主殿殿・新納嘉藤二・東郷源左衛門大坂まて、福崎助七・木藤角大夫・國分平覺・田中清之丞・水引一小隊御国元まて、

一大久保一蔵も御国元迄、

朝廷より付添被仰付候事、

一勅使被為蒙　仰候御廉を以、御肴一折、

中将様より御留守居御使者を以、被進候事、

一彼御方よりも御使者到来、御依頼有之候事、

一御出立ニ付

御酒　一樽　　御肴　一折

被進候事、

一去ル八日御当地御発足、同十一日巳ノ刻夷より蒸気船御借入之上、川尻御発艦、

一御発艦之旨、御留守居御使者を以、柳原卿御家内へ被仰進候事、

右為心得申越候旨、京都より巳二月十四日申来候事、

一五二ノ二　明治二年二月二日於

御前渡賜

宸翰　　侍臣右少弁前光

天下ノ大義ヲ明ニシ、

朝廷ノ体裁ヲ正シ、争乱ヲ挽シテ之ヲ正ニ反スハ、此レ汝先臣贈中納言ノ遺志ヲ承ケ、国論ヲ定メ、長藩ト与ニ積年藎忠ノ所致ニ之レヨル、自今而后社稷長計モ亦、正ニ汝両藩股肱トシテ勉ムベキニアリ、凡国体ヲ正シ強暴ニ備ヘ、公義ヲ立テ民安ヲ虞リ、独立不羈ノ基ヲ成ス等ノ事件、殊ニ汝等ニ問テ以テ施サントス、

其レ速ニ上京、朕一人ヲ助ケテ、以テ永ク衆庶ト与ニ
天禄ヲ保タシメンコトヲ謀レ、宜ク此意ヲ奉体セヨ、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一五二ノ三

三條輔相書柬

實美謹テ島津中将座下ニ白ス、今月一日
主上臣實美ニ宣シテ曰玉フ、
朝家七百年来ノ頽廃一旦緒ニ就ク、此
天神天祖在天ノ霊ニ頼ルト雖、偏ニ汝先臣贈中納言ノ
遺志ヲ紹キ、長藩ト積年誠忠ノ貫ク所ニアリ、朕深ク
之ヲ嘉ス、然ルニ国基未タ定ラス、外患難測、此レ深
ク
先朝ノ憂念スル所、況ヤ万機草創ノ際、汝等宜ク薩長
ト相協ヒ、匡救輔翼以テ長策ヲ決定シ、
朕ヲシテ罪ヲ
先皇ニ得セシムル勿レ、
朕自書ヲ以テ長門宰相中将・嶋津中将等ニ下ス、敢テ
両臣ニ私スルニ非ス、永ク天下ニ休戚ヲ倶ニセンコト
ヲ欲スルナリ、汝等厚ク
朕カ意ヲ致セ、臣等浅劣ト雖モ、忝クモ
天意ヲ奉体シ、足下両藩ト同心協力、永ク前途ノ規模
ヲ定メ
聖旨ノ所在ヲ達ンコトヲ是望ム、依テ両侯速ニ上京、
益国家ノ為ニ忠益ヲ尽サレンコトヲ欲ス、則
皇国ノ大慶臣等ノ幸甚ナリ、

明治二年二月

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一五二ノ四

中将様御筆写

我等事、
照國公御遺志ヲ継述シ、
朝廷之御為尽微力度積年之存慮ニは候得共、素より不
肖諛劣、是迄寸功モ無之候処、不図も今般
勅使御下向、　御別紙之通
宸翰致拝戴、何共恐懼至極奉存候、右は全ク
皇運之洪福ニ依リ、今日復古之
御大業被為遂候儀ニて、決て分外之
御褒勅ニ可奉預訳ニ無之候得共、畢竟一同為
皇国東北ニ奔走、抛身命勇戦決闘、終ニ平定之功ヲ奏
シ候処より、藩名を不辱ニ至リ、別て深ク令感銘候、
然処前途之事益

御大事ニ付ては、上下同心、闔藩之衆力ヲ以奉報
天恩候外無他念候条、猶又我等之微意致貫徹、其分ニ
応し、抽忠誠候様頼存候事、

明治二巳
二月

一五二ノ五
今般　勅使御下向、不容易蒙
特命候儀、誠ニ未聞之
御待遇ニテ、深ク奉恐入、心身措処ヲ不知奉存候、然
処一昨年来罹病起居不任心底、自身拝承モ不相調容体
ニ候得共、此上全快ヲ期シ居乍、御猶予奉願候テハ、
臣子之名分ニ違ヒ、本志ニ不安候間、一死以テ
闕下ニ拝趨シ、
天恩之忝ヲ奉謝、積年之微衷ヲ奉表度、上京御受
勅使江拝答申上候条、此旨一同為心得相達候事、

明治二巳二月

一五二ノ六
岩倉具視大久保利通ニ託シテ久光公ニ贈ル書
春寒之候、先以
聖上益御機嫌能被為渉、奉恐悦候、老台弥御清栄、御
久痾漸々御復常之由、為朝野幸甚此事候、小生東京滞
府中風と病患ニ罹り、所詮分理平生ニ不立戻、困苦罷
在候、乍併元より未タ膏肓ニ入候儀ニハ無之、日々勤
仕、不及なから此際尽駑力候底意、此段御降慮是祈候、
抑東北平定万御都合好ク、一旦還幸被為在候、就ては
今日之盛事、貴藩并長州等積年誠忠之所徹、天下之公
論敢て弁するを不待也、今度
宸断ヲ以
勅使被差立候儀、深キ叡慮も被為在候御事、臣等ニ於
ても奉感泣候、御闔藩之面目不過之、御満足之程令遠
察候、右ニ付大久保市蔵被差添、帰国被仰附候間、都
て口頭ニ相託し申候条、御承知可給候、実ニ前途守成
之基礎、速ニ不被為立候てハ、内憂外患不可測、夜白
杞憂罷在候次第、今日は何卒御病痾被扶、早々御上京
之事、偏ニ奉渇望候、巨細紙上ニ尽スヲ得す、万大久
保ヨリ御伝聞希望候、
右為御音信草略拝呈如此候也、

二月七日　　具視

嶋津中将殿

二伸、賢息御滞京中ハ、格別御懇情ニ預り、忝存候、

乍憚能々御伝声可給候、将亦毎々御国産佳品御恵投忝候、此品粗薄なから、聊鄙意を表し候迄進呈候、御笑留可給候也、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一五二ノ七

大久保利通岩倉具視ニ贈ル書

謹上仕候、閣下益御機嫌克被為遊御座、奉恐悦候、然は勅使にも海上誠ニ御都合克、去ル十三日十一字比、鹿児島へ御着港、直様御入城ニて、同十五日大隅守へ詔旨御達命、無御滞被為済候、尤大隅守義就所労、修理大夫名代にて奉謹承、同十六日

勅命拝答御請奉申上候、今日御開帆御復命之御都合相成、大慶奉存候、

一大隅守儀、所労中自身　勅命拝承仕候事も不相調容体ニて、上京仕候ても、参　内等相調候事ニも無御座候得共、何分ニも不容易重命、殊未聞之御待遇ニ奉預、且驚且恐、心身措処を知らす、只々流涕仕之外無御座、此上尋常を以御猶予奉願候ては、臣子之分に於て不相済、且情義ニ於て不能安と之素志を以上京仕、輔相公閣下ニ拝趨、重大之恩命を奉万謝と之決心ニ御座候、来二十六日ニハ弥上京発艦之治定仕候ニ付、上京之上右不敬多罪之次第、宜敷御執成、御容赦之程奉至願候、寸分労を奉辞之心底、固より無御座候得共、現場起居進退不任心容体ニて、兼て内話奉達御聴候通ニ御座候間、分て奉願置候、

一今般　勅使就御下向は、御急卒之御着港ニて、殊ニ僻遠無骨之田舎者共ニて、万端行届兼、疎暴不遜之事而已ニて、実ニ堂々たる天使之御威霊ヲ奉汚候次第ト、両旧主ニ於て恐縮罷在候仕合ニ御座候、是又御垂憐被成下、可然御執成被下置候様奉拝願候、

一小官事、　勅使御差添被仰付候間、随従帰京仕筈ニ候得共、兼て奉願置候次第も有之候ニ付、此度之処御猶予奉願、外ニ重立候者奉差添候、尤大隅守上京之節迄も発途之都合ニ参り兼、甚恐縮之至奉存候得共、不得已情実も有之、吉井幸輔同時帰京之処ニ示談仕候、委曲ハ同人より言上可仕候間、暫時御猶予被仰附候様奉願候、

右言上仕度、如此御座候、恐惶頓首、

二月廿二日　　大久保一蔵

岩倉公閣下

〔稿本表紙〕

明治二年
二月

忠義公史料 二

〔稿本にて補正〕

一五三 小松清廉邑地ヲ返上シ、家格ヲ平士ニ列セラレンコトヲ願出ツ

四日、小松清廉邑地ヲ返上シ、並ニ家格ヲ平士ニ列セラレンコトヲ藩庁ニ願出デタリ、其ノ文左ノ如シ、

一五三ノ一 臣清廉謹白、今般藩地御返上之義、

朝廷江御献言之趣、誠以至公極大之御正論と、乍恐奉敬服候義御座候、抑臣等食邑之儀、祖先代聊之勲旧ニ依り、国家之御深沢を蒙り、累世難有領知仕来候得共、全ク藩封と大小之区別有之而已ニて、王土之版図たる事顕然ニ候処、大局面変革之今日ニ至り、其侭私領仕候ては、名分不当は勿論、臣子之情義難黙止義と奉存候、依之臣清廉所領之邑地、此節不残返上仕度奉存候、左候得は、藩邑上下各々分願を遂、第一御献言之御趣意、民地予奪（与カ）之権

朝廷ニ帰し、政柄一途ニ出、

皇威海外ニ耀き候御基本可罷成義と奉存候間、臣之所願御許容被成下度、伏て奉懇希候、臣清廉誠惶謹言、

二月四日　小松玄蕃頭

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一五三ノ二 臣清廉謹テ按スルニ、世官世爵ハ古人所非議、衰代之弊制ニ候処、本邦相家専権以来、縉紳官爵ヲ世襲シ、降ツテ武門ノ治ニ迨テ其地ヲ私有シ、其人ヲ私属シ、因襲ノ弊各藩世臣家格ヲ建、仕途之進退ヲ為ルニ至リ候ハ、国体不振之基、識者所慨歎御座候、然ルニ王政復古之初、第一摂籙（リカ）之世家ヲ被廃、庶人之微賤ト雖モ、其才識ニ依ミ、参与之重職ニモ陞叙之制度被召置候ハ、畢竟旧弊ヲ除キ、人才登用之思食ト奉恐察候、斯ル上ハ於藩々門閥ト唱ヘ、自己ノ家格ヲ主張シ、賢

路ヲ防候テハ、時世不相当之事、奉対
朝廷恐入儀ト奉存候、臣清廉辱譜第藩臣之重班被召加、一所持之名称被下置候ヘ共、別啓言上仕候通、邑地返上仕候ハ、自然家格ヲモ差上、退テ平士ニ列シ候様被仰付度、奉懇願候、上ハ復古之
朝憲ヲ奉シ、下ハ不肖僭越ノ罪ヲ免レ度、臣之情願実以不過之奉存候、誠惶頓首再啓、

巳二月四日　　小松玄蕃頭

一五四　京都ニアル諸藩邸地ノ荒蕪セシモノノ処置ヲ達ス

五日、京都ナル諸藩邸地ノ荒蕪セルモノハ、桑・茶等ヲ植ウルカ、或ハ売却・上地等ノ処置ヲナスベキ旨ヲ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

御布告

京都ニ有之候諸藩之邸宅地所、近来往々荒蕪ニ相成候場所不少趣、右ハ全ク地力ヲ廃棄シ候儀ニ付、不用之向ハ桑・茶等植付、地力ヲ尽候様可致、不及其儀分ハ売払候欤、又ハ上地致候欤、孰レモ取極、早々京都府ヘ可申出事、
但拝借地之分ハ返上可致事、

一五五　諸藩公議輿論ヲ採用シ、下情上達ヲ計ル為議事ノ制度ヲ確立スヘキヲ達ス

コノ日、各藩ニモ公議輿論ヲ採用シ、下情上達ヲ計ル為ニ、議事ノ制ヲ立ツヘキ旨ヲ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

大ニ議事之制ヲ可被立ニ付、藩々ニ於テモ其制ヲ立ヘキ旨、兼テ御布令有之候処、今般於東京開議被　仰出候ニ付、　御趣意奉体認、藩々ニ於テモ博ク公議ヲ輿シ、輿論ヲ採リ、下情上達候様　御沙汰候事、
但各藩議事体裁之儀ハ、御取調之上可被　仰出筈ニ候得共、各藩従来之制度モ不同、所領之大小モ懸絶致シ、地方之習俗利弊ニヨリ、章程モ一定難致ニ付、於　朝廷兼テ御内定ニ相成居候公議所法則案之大意ニ基キ、変通ヲ加ヘ、上下之間建言之儀不洩上達候様可致候、尤各藩議事体裁取定候ハヽ、其旨可伺出、且又右ニ付難決事件等ハ、同様可伺

出候事、

巳二月七日　　内田仲之助

主殿様

追て、本文之通被　仰出候付ては、
御承知之上、御礼之義、先達て元庄内屋敷御拝領之
節之通被仰上、其段御当府江も被仰渡度奉存候、此
段も申上候、以上、

右佐土原より今日飛脚差立候旨承得候付、相頼差遣候
事、

一幸橋内御屋敷、今日佐土原江御拝領相成候段、御役所
御留守居付役萩原五兵衛申出候付、其段前同断申遣候
事、

一深川元伊達亀三郎屋敷、肥前藩江御預ケ被仰付置候処、
今般弊藩江拝領被仰付候付、昨八日右同藩江引合之上、
相受取申候、此段御届申上候、以上、

巳二月十日　　御官名内　　内田仲之助

弁事

御役所

右之通、今十日御留守居付役隈元敬一郎持参、弁事御
役所へ差出候事、

一五六　東京深川元伊達宗基上ケ屋敷家作共、島津忠義ニ下賜ス

七日、東京深川元伊達亀三郎仙台上ケ屋敷家作共、忠義公ニ下賜セラレ、八日引渡相済ミタリ、ソノ関係文書左ノ如シ、

一五六ノ一　下賜書

島津少将

深川元伊達亀三郎上ケ屋敷家作共、下賜候事、

二月　　行政官

一五六ノ二　御書附一通

但深川元仙臺屋敷御拝領被　仰出候儀、

右は今日弁事役所より御呼出ニて、御留守居付役勤田
中清之進罷出候処、久松監物様より御渡被成候付奉畏
候、

御国元江可申上越旨、申述置候、

御書付相添、此段申上候、以上、

一五七 谷村昌武富士艦船将ヲ免セラレ、徴士ヲ以武蔵艦船将ヲ命セラル

コノ日、谷村昌武(小吉)富士艦船将ヲ免セラレ、徴士ヲ以テ武蔵丸(艦カ)船将ヲ命セラル、二月十七日ニ至リ、伊東祐亨(四郎)左衛門以下数名、本艦乗組士官ヲ命セラレタリ、其ノ辞令左ノ如シ、

一五七ノ一　谷村小吉

富士艦船将被免候事、

二月　軍務官

徴士ヲ以武蔵丸可為船将旨、

御沙汰候事、

谷村小吉

二月　軍務官

右之通二月七日、久我大納言様ヨリ被仰付候旨、御届申出候付、京都江二月十八日、病院人数碇山真十郎出立便ヨリ申遣シ候事、

一五七ノ二　伊東四郎(祐亨)左衛門

其方事、御雇ヲ以武蔵艦江乗込、第一等士官申付候事、

二月　軍務官

右巳二月十七日、久我大納言様ヨリ御渡被成候旨、御(届)為申出候事、

第一等格　松村孫十郎
第二等　上野彦七
第二等格　中村岩太郎
第二等格　肝付伊右衛門
右同　佐藤善之助
右同　崎元彦七
第三等格　溝口太兵衛

右前文同断、銘々御書付ヲ以テ被仰渡候事、

二月廿一日、町便ヨリ京都江申遣候事、

一五八 酒田表出張ノ堀為影御用ニ付、出張ヲ免セラル

十日、曩時会計官権判事ニテ軍監ヲ兼ネ、出羽国酒田ヘ

出張シタル堀直太郎、御用ニ付免セラレタリ、其ノ辞令左ノ如シ、

堀　直太郎（為影）

酒田表出張被
仰付置候処、御用有之ニ付被免候事、

二月

右二月十日、大原少将（重実）様ヨリ御渡相成候間、御届申出候事、

二月十八日、病院人数碇山真十郎出立便ヨリ、京都江申遣候事、

一五九　朝廷大山綱良・村田経芳・黒田清隆ヲ東京ニ召ス

十二日、朝廷藩士大山綱良・村田経芳・黒田清隆ヲ東京ニ召サル、軍功調査ニ付、之ヲ検覈セシメンガ為メナリ、其ノ辞令左ノ如シ、

辞令

島津少将

其方家来大山格之助・村田勇右衛門・黒田了介儀、御用有之、至急東京へ可罷出様被　仰付候間、此旨可相達候事、

一六〇　田町邸従前ノ通リ下賜セラル

十三日、先般諸藩藩邸ト共ニ上地シタル旧田町邸、従前ノ通リ下賜セラレタリ、其ノ書類左ノ如シ、一六〇ノ一

御官名

田町邸従前之通、下賜候事、

二月

行政官

右二月十三日、弁事御役所ヨリ御呼出ニテ、弁事久松監物ヲ以被相渡候事、二月十八日病院人数碇山真十郎出立便ヨリ、京都江申遣候事、

一六〇ノ二
一御書附一通

但田町元御屋敷御拝領被
仰出候義、

右は当月十三日、弁事御役所より御呼出ニて、御留守居附役隈元敬一郎罷出候処、久松監物様より御渡被成候付奉畏候、　御国元江可申上越旨申述置候、

御書附相添此段申上候、以上、

巳二月十六日　　内田仲之助

主殿様

追て本文之通、被

仰出候付ては、　御承知之上御礼之義、先達て元庄

内屋敷　御拝領之節之通被仰上、其段御当府江も被

仰渡度奉存候、此段も申上候、以上、

一六一　宸翰拝戴ニ付藩士へ祝料並休暇ヲ与フ

十七日、藩庁ニテハ、勅使先日鹿児島ニテ宸翰ヲ久光公父子ニ渡シ、更ニ御直垂一領・羽二重十疋ツヽ、拝戴セシメラレタルニ由リ、一門以下諸士ニ祝料金ヲ下賜シ、一日ノ休暇ヲ与フ、ソノ達書左ノ如シ、

一六一ノ一　御宸翰御拝戴ニ付、御一門方初其外諸士一統江、明十七日御祝料金頂戴被仰付候段は、申渡置候通ニ候、依之家部毎ニ金子壱両宛被成下、明後十八日休日ニ被仰付候条、

勅使方御用関係之御役場外は当番迄出勤、一統於家々酒肴を設、親戚相会奉戴仕候様被仰付候条、此旨向々江可申渡候、

但金子之儀は応家部、会計方より御番頭并御用人方江引渡、夫々頂戴相成候様可取計候、

明治二年巳

二月十六日　　右衛門

龍　衛

一六一ノ二　御直垂　一領

一羽二重　十疋

右之通今般

勅使柳原右少弁様を以、

太守様

中将様御銘々被遊

御拝領候、依之御一門方并諸大身分、其外月次御礼罷出候面々諸士迄、於席々相謁、御祝儀被申上筈候得とも、御座支ニ付

御宸翰拝見之節、一緒ニ御祝儀被申上候筋ニ被仰付候、此旨向々江早々可致通達候、

明治二年巳

二月十七日　　備　後（島津忠義）

〔島津久治〕圖書
〔桂久武〕右衛門
〔島津広兼〕伊勢
〔川上久齢〕龍衛
〔町田久憲〕内膳
〔島津久義〕良馬
〔島津久芳〕隼人

一六二　薩州藩大宮御所ノ警衛ヲ免セラル

十九日、本藩大宮御所ノ警衛ヲ免セラル、ソノ令達左ノ如シ、

島津少将

御東幸御留守中　大宮御所御警衛被　仰付置候処、御模様之次第有之被免候事、

一六三　外国人ヨリ貨幣借入ノ事ニ付達書

二十日、諸藩ニ於テ、外国人ヨリ私ニ借財スルヲ禁シ、止ムヲ得ス借財スル時ハ、外国官ノ指揮ヲ受クヘキヲ達セラレ、二十二日ニ至リ、更ニ外国ヨリノ物品購入代金、或ハ借用金等アラバ、其ノ高并ニ返済期等ヲ調査シ、三月中ニ差出スヘキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一六三ノ一
諸藩ニ於テ、私ノ相対ヲ以テ、外国人ヨリ貨幣借リ入候儀不相成候、以来借入度向願出候上ハ、外国官ヨリ差図可致候間、此旨可相心得事、

一六三ノ二
諸官府藩県共、外国ヨリ買入候諸品代金払残、并ニ借入候金高払返済方期限等、早々取調、来三月中外国官ヘ可差出事、

一六四　島津忠義本城ヲ退キ、通勤シテ政務ヲ執ルコトヲ達ス

コノ日、忠義公自筆ヲ以テ、今般朝廷藩治職制ヲ定メ、公私ノ別ヲ明ニセラレ、且ツ我等版図返上ヲモ奏上シ置キタレハ、本城ヲ退キ、政庁ヘハ通勤シテ、朝政ヲ奉行スベキニヨリ、其ノ意ヲ諒トスヘキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一諸藩政府之設ハ、元来

朝政ヲ執行スル場所候処、名分混乱シ、自己之政府ト相心得、遂ニ天下之政令異途ニ出、大権統一セサルニ立至リ候、然処此節執政・参政之職分被定、家事ト不混様可執扱旨被
仰出候は、旧弊一新之
御趣意改革之大端ト奉恐察候、就ては我等事本城ヲ退、政府へハ掛て出席、
朝政ヲ奉行イタシ度、殊ニ版図返上ノ事件致布告置候通ニ付テハ、公私ノ別ヲ貫体シ、退城ノ上仰
朝裁候義、当然之筋ト心得候付、各々得其意、早々手当可致候事、
右之通
太守様御筆を以、被　仰出候条、一同可奉謹承候、
左候て、御手当事関係之御役場江は、夫々追て可被
仰渡儀も可有之候条、其通可相心得候、此旨向々江致通達、諸郷・私領へも可申渡候、
明治二年巳二月廿日　　知政所

一六五　藩治職制ノ細則及ヒ付帯ノ藩達

コノ日、藩庁ニテハ藩治職制ニ拠リ、其ノ細則ヲ定メ、従来ノ議政所ヲ廃シ、家老職以下筆者ニ至ルマデ、其ノ職ヲ免ジ職制ヲ施行ス、其ノ職制細則及ヒ附帯ノ藩達等左ノ如シ、

但職制細則ハ、明治元年十月二十八日ノ部ニアリ、

一六五ノ一　藩治職制ニ関スル藩達

一今般藩治職制就御治定、是迄之議政所被廃、御家老職以下筆者ニ至迄被免候旨、被
仰出候事、
別紙之通被　仰出候条、支配下江も早々可被申渡候、
但承知之名前、銘々腰書ニ可被相記候、
明治二年巳　　嶋津多右衛門
二月廿日　　伊藤彦介

一六五ノ二　今般藩治職制就御治定、御用人并御使番役所・御文書奉行・御右筆以下筆者ニ至迄、是迄之職務被免、兼て御布告之通、伝事方本御用人座江、書史方本議政所筆者詰所江被召建候旨、被仰達候、此旨向々江可致通達候、
明治二巳二月廿一日　　知政所

一六五ノ三
一内務局筆者

種子嶋中輔
皆吉五郎右衛門
帖佐彦七

右之通被　仰付候、
明治二巳
二月廿一日　知政所

一六五ノ四
一今般藩治職制就御治定、陸軍所并会計奉行所被廃、大隊長并会計奉行以下筆者ニ至迄、両局勤務之人数は都て職務被免、兼て御布告之通、軍務局本陸軍方江、会計局本会計奉行所江被召建候旨、被仰達候、此旨向々江早々可致通達候、
明治二巳二月廿二日　知政所

一六五ノ五
一伝事

田畑平之丞
貴嶋平八
得能良介

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、
明治二巳二月廿二日　知政所

一六五ノ六
一御広敷御用人
一御広敷番之頭
一御広敷掛横目

右は今般藩治職制就御治定、
両御丸右御役所等被廃、右御役々以下筆者ニ至迄、是迄之職務被免、兼て御布告之通、裏役頭并助詰所は本御広敷役所、内監は本御広敷掛横目詰所江被召建候旨被
仰達候、此旨向々江早々可致通達候、
明治二巳二月廿二日　知政所

一六五ノ七
一御納戸奉行并格
一御兵具奉行并席

右は藩治職制就御治定、右御役々御兵具所并筆者迄も被廃、右跡江兵器方被召建候旨、被
仰達候、此旨向々江早々可致通達候、
明治二巳二月廿二日　知政所

一六五ノ八
一若年寄　一大目附并格
一大番頭并格　一御番頭
一当番頭

右は今般藩治職制就御治定、右御役々并御番頭座之儀は、役所筆者迄も被廃候、就ては右御役ニて神社奉行勤、又は地頭職之面々は、当職一篇相心得候様被仰達候、此旨向々江早々可致通達候、

明治二巳二月廿二日　知政所

一六五ノ九
一御作事奉行　一御高奉行
一物奉行　一道奉行
一産物方掛御役々　一三嶋方掛御役々

右は今般藩治職制就御治定、右御役所被廃、御役々以下筆者ニ至迄、是迄之職務被免、出納方米穀取扱は本物奉行所、生産方は本産物方、生産方諸嶋掛は本三嶋方、営繕方は本御作事方跡江夫々被召建候旨、被仰達候、

一六五ノ一〇
一御庭奉行
一御膳所頭并御料理役
一両御丸御茶道
一両御丸御膳所掛横目
一御庭方

右は今般藩治職制就御治定、右御役々被廃、膳所は本御膳所、道具方は本御茶道方、庭方は本御庭方、膳所内監は本御膳所掛横目詰所江被召建候旨、被仰達候、

右之通向々江早々可致通達候、

明治二年巳二月廿二日　知政所

一六五ノ一一
一今般会計局被召建候付、向々証文当(等カ)之取扱は、局印取拵、其印を居、左候て取扱之名前相記可差出候、尤免印を以証文相成候儀は、是迄之通被仰付候、此旨総裁江申渡、可承向江も可申渡候、

但局印出来迄之間、是迄之取扱通被仰付候、

明治二巳二月廿三日　知政所

一六五ノ一二
一海軍局之儀、軍務局内江被召建、幸福丸乗組人数之儀は、是迄之通被仰付、書籍等は都て軍務局江差出、運送蒸気船其外浦舟等之儀、一切生産方支配被仰付候、
一是迄海軍方諸出入、其外万事軍務局調役申談、会計局江引合、此涯致首尾候様被仰付候、
一右通被仰付候付、海軍方并船隊将以下御役々、御舟奉行より筆者ニ至迄、都て此節被廃候、左候て右海軍方跡江生産方被相移候、
右之通被仰付候条、船隊将江申渡、向々へも早々可致通達候、
明治二巳二月廿四日　知政所

一六五ノ一三
一御細工奉行　一御医師
右今般藩治職制御治定(就脱カ)、右御役々被廃候、
一侍医
右此節被召建候条、
両御丸其外詰所之儀は本御医師詰所江相詰、本科・鍼科繰廻を以、以来泊番迄相勤、毎朝拝診済之上、可致退出候、尤両　御本丸は、当分御病気中等ニ付、両科共昼番并泊番相勤候儀は、御都合次第ニ被仰付候、
右之通被仰付候条、向々江早々可致通達候、
明治二巳二月廿四日　知政所

一六五ノ一四
一御茶道頭　一御数寄屋頭
右は今般藩治職制就御治定、御数寄屋并右御役々被廃、道具方之儀本御数寄屋跡江被召建、両御丸本御茶道方勤之道具方頭・同助詰所之儀は、御茶湯掛詰所と相唱、是迄之人数相勤候様被　仰達候、此旨向々江早々可致通達候、
明治二巳二月廿五日　知政所

一六五ノ一五
一今般藩治職制就御治定、騎兵所是迄之御役々、御馬預初筆者ニ至迄被廃、本御馬預詰所江出納奉行騎兵所掛詰所被召建候、左候て馬医之儀は、当分通被仰付置候旨、被　仰達候条、此旨向々江可致通達候、
明治二年巳二月廿五日　知政所

一六五ノ一六
一大政就御一新、各藩旧来職制可相改、従

朝廷被　仰出趣有之、仍て深御評議を被為　竭、御治定之趣は既ニ被
仰達置、一統奉承知通ニ候、就右諸向共人員減少、即今廃官之面々、間ニは全体微禄ニて、従来之俸禄而已を以、今日之経営弁来候向も可有之、右体之者は別段之思召を以、夫々御養料被成下候旨、
御沙汰被為　在候条、一同可奉承知候、就ては此節被免候諸御役人初筆者ニ至迄、於其局々役名并秩禄員数相記、名前帳相拵伝事方江差出候様向々江可致通達候、

明治二巳二月廿六日　　知政所

一六五ノ一七
一当年七拾歳以上罷成候者
一鰥寡孤独困窮之者
右弐ケ条之者、不依貴賤御用見合相成候間、御当地は来月十日限、諸郷・私領は同廿日限、七拾歳以上之者は夫々年輩相記届申出候様、向々江可申渡候、

明治二年巳二月廿六日　　知政所

一六五ノ一八
一今般藩治職制就御治定、
両御丸御側役所被廃、御側役以下筆者ニ至迄、是迄之職務被免、兼て御布告之通、尓后内務局と相唱候様被
仰達候条、向々江可致通達候、

明治二巳二月廿七日　　知政所

一六五ノ一九
一御府内并諸郷江変死者其外変事之節、是迄糺明奉行江披露遂来候へとも、今般藩治職制御治定、諸局被召建候付、以来は右体之披露は、都て監察局江可申出、尤御詮議又は糺方ニ相拘候儀は、同案を以糺明局江も別段可申出候、此旨向々江早々可申渡候、

明治二巳二月廿七日　　知政所

一六五ノ二〇
一糺明局之儀、糺明奉行所跡江被召建候旨、被仰達置候得共、御吟味之趣有之、糺明所江転局被仰付候旨、被
仰達候条、此旨糺明局総裁江申渡、向々江も可申渡候、

二月廿七日　　知政所

一六五ノ二一
一従前
君公ヨリ政府江令ヲ下シ玉フニ、御側役江　御沙汰相成、重大機密ノ事件トイヘトモ致取扱、　仰出或ハ
御沙汰書等ヲ以被相下来候得共、今般御一新之

御政体ニ慣ヒ、内務局知家事ト被相改候付テハ、以来大小トナク国事関係之義ハ、政府江御直沙汰相成候様有之、仮令内務之事トイヘトモ、於内務局　仰出、　御沙汰書等之取扱無之様、御治定被為　在候旨被　仰達候、此旨奉拝承候様、向々江可致通達候、

明治二巳二月廿七日　　知政所

一六五ノ二三
一今般藩治職制（就脱カ）御治定、是迄之神社方并御製薬方被廃、奉行初筆者ニ至迄、都て職務被免、此節御治定之神社方は本神社方跡江被召建候、左候て製薬取扱向等は生産奉行和薬種掛之面々、本御製薬方跡江相詰、諸事致弁達候様被仰付候条、可申渡旨被　仰達候、此旨向々江可致通達候、

明治二巳二月廿七日　　知政所

一六五ノ二三
一町奉行并格　　一長崎御付人并格
一屋久嶋奉行　　一御代官
一糺明方横目

右今般藩治職制就御治定、右御役名并職務被廃候旨被　仰達候、此旨向々江可致通達候、

明治二年巳二月廿八日　　知政所

一六五ノ二四
海軍所附士之事
一生産方附士
海軍所支配郷士之事
一生産方支配郷士
海軍所附之事
一生産方附

右は此節海軍所被廃、運送其外浦船等一切生産方支配被仰付候付、右附士以下生産方江被召附、右之通相唱候様被仰付候条、生産奉行江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二巳二月廿八日　　知政所

一六五ノ二五
一此節糺明局被召建候付、宗門犯科之者取扱も、都て糺明局受持被仰付、宗門方之儀、役所并宗門掛初筆者ニ至迄、都て被廃候、左候て是迄出納之金銭は、早々総帳取仕立、一切会計局江引渡候様被仰付候条、可申渡旨被　仰達候、此旨糺明局総裁并宗門掛江申渡、向々

江も可致通達候、

明治二巳二月廿八日　　知政所

一六五ノ二六
一職制御治定、諸局惣裁・奉行等被仰付候付ては、支配下末々所置振之儀、細詳遂吟味、早々申出候様、向々江可申渡候、

明治二巳二月廿八日　　知政所

一六五ノ二七
一去ル廿日以来、任職之面々明細書御用見合相成候条、早々可差出旨、向々江不洩様可申渡候、

本文ニ付、先役中被下方有無迄も、但書ニ相記、可被申出事、

明治二年巳二月　　知政所

右之通被仰渡候間、両日中ニ可被申出候、左候て支配下有之向は其支配江取揃、伝事方江可被差出候、以上、

明治二年巳二月廿八日　　伝事方

一六五ノ二八
御用人座附士之事

一伝事方附士

右伝事方附士被仰付、右之通相唱候様被仰付候条、可承向江も可申渡候、

明治二年巳二月廿九日　　知政所

一六五ノ二九
一此節職制就御治定、横目之儀都て被廃候、左候て本紀明奉行所跡江巡察詰所被召建候旨、被仰達候、此旨監察局総裁江申渡、向々江も可致通達候、

明治二年巳二月晦日　　知政所

一六五ノ三〇
一此節御番頭被廃候付、是迄御番頭関係之諸書付等は、伝事嶋津多右衛門・伊集院主計江差出候様、向々江可申渡候、

明治二巳二月　　知政所

一六五ノ三一
一御買物方之儀、見聞役相詰、出納致取扱来候得共、尓来見聞役不及相詰、出納奉行金財掛より致取扱候様被仰付候条、諸事厳重可致取扱候、此旨可承向々江可申渡候、

明治二年巳二月　　知政所

一六六　勅使帰京ニ付奉送ノ次第ヲ達ス

二十一日、藩庁ニテハ明日勅使帰京ニ付、奉送ノ次第ヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

勅使柳原右小弁(前光)様、明廿二日五時御出立付、御次第御手当左之通、

一御対面所御駕籠台ヨリ御出塀、重御門、御楼門、二丸、造士館前通、枡形島津信濃表門通、石燈爐筋御通行、同所下御渡戸ヨリ御乗船、

一太守様御着服、御服紗物・御半袴為　召、　御休息所ヨリ御駕籠台涯迄　御先立、夫ヨリ為御見送、御先ニ勅使御道筋ノ通、御渡戸口迄被為　入、　柳原様　御乗船ノ上、石燈爐筋六日町通、廣小路島津登角陸軍所脇ヨリ、御城下タ中辻番前通ヨリ矢来御門　御入、御帰殿、

一勅使御乗馬手当、

一御先乗備後殿、

一御一門方其外御楼門外並　御対面所内ヘ罷出、

　但着服麻袴、

一御番頭御用人御兵具奉行　御楼門外等ヘ罷出、

一御楼門外ヨリ兵士警衛、

　但大隊長差引、

一祝砲打方、

一御目付並御先払横目方、

一御通筋横目辻堅、

一御足次船手当、

一御中途掃除方並飾桶盛砂、

一御床飾御座構、

一御数寄屋茶道空焼、

　右拾弐ケ条御着之節通、

右之通御手当等ノ儀相心得、御役局受持ノ儀ハ、渾テ御着ノ節通ニテ、夫々都合能可取計候、此旨向々ヘ可申渡候、

二月廿一日　　知政所

一六七　脱賊追討ニ付薩州藩出兵、青森ニテ総督ノ指揮ヲ受クヘキヲ令セラル

二十四日、軍務官ヨリ本藩ニ脱賊追討ニ付出兵シ、青森ニテ総督ノ指揮ヲ受クヘキヲ令セラル、ソノ文左ノ如シ、

一　島津藩

今般脱賊追討ニ付、其藩兵隊出張申付候条、陸奥之国青森ニ到リ、彼地惣督之指揮ヲ受可致進退候事、

二月　軍務官

右巳二月廿四日、軍務官ヨリ御呼出ニテ、御達シ有之候事、

参考

今般脱賊追討ニ付、弊藩兵隊出張被仰付候旨、御達之趣拝承仕候、就テハ御急速之義ニテ、用金手支ニ相及、殆難渋罷在候御時節柄、近比痛心ニ堪兼恐縮奉存候得共、何卒此涯之処、御金六千両拝借被仰付被下候様奉願上候、御当地用途丈時々大坂表より差続申義ニ付、至急之金策難相調、無余義此段奉歎願候、以上、

御官名内　内田仲之助

二月廿五日

右之通御留守居付役勤田中清之進持参、御用掛江差出候処、明後日伺ニ可差越旨申聞候事、

〔朱〕「一右之通候処、同日又御呼出ニテ、隈元敬一郎罷出候処、当日之御場ニテ、金札六千両丈御下渡相成候事」

一六八　東幸中太政官ヲ東京ニ移シ、京都ニハ留守官吏ヲ置キ岩下方平ヲ留守次官ニ任ス

コノ日、東幸中太政官ヲ東京ニ移シ、京都ニハ留守官吏ヲ置クヲ布告セラレ、参与岩下方平留守次官ニ任ゼラル、

二十四日、東京駐輦ノ間、太政官ヲ東京ニ移シ、留守官吏ヲ京都ニ置クヲ布告ス、仍チ議定鷹司輔熙・参与岩下方平等ヲ以テ留守ト為ス、

岩下佐次

是迄之職務被免、留守次官被仰付候事、

一六九　公議所ヲ開キ制度律令ヲ議セシムルノ詔書ヲ下賜セラル

二十五日、昨年夏ヨリ屢々令達アリタル公議所ヲ開キ、制度律令ヲ議セシムルノ詔書ヲ下賜セラル、ソノ詔書左

ノ如シ、

詔書

朕将ニ東臨、公卿群牧ヲ会合シ、博ク衆議ヲ諮詢シ、国家治安ノ大基ヲ建ントス、抑制度律令ハ政治之本、億兆ノ頼トコロ、以テ軽シク定ムヘカラス、今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス、宜シク速ニ開局シ、局中礼法ヲ貴ヒ、協和ヲ旨トシ、心ヲ公平ニ存シ、議ヲ精確ニ期シ、専ラ皇祖ノ遺典ニ基キ、人情時勢ノ宜ニ適シ、先後緩急ノ分ヲ審ニシ、順次ニ細議シ、以テ聞セヨ、朕親シク之ヲ裁決セン、

二月〔二十五日〕

別紙、於東京被仰渡候段、田中清之進ヨリ申越候付、差上候事、

三月　　新納嘉藤二

一七〇　諸侯ノ妻女ノ在京セルモノヲ取調ヘ、触頭ヨリ届出ツヘキヲ口達ス

コノ日、東京ニ於テ諸侯ノ妻女ノ在京セルモノヲ取調ヘ、触頭ヨリ届出ヅベキヲ口達アリタリ、ソノ状況左ノ如シ、

一七〇ノ一

一二月廿五日、　御城江御呼立ニ付罷出候処、官掌金谷敬次郎方被罷出、当時諸侯奥方在東京之分至急取しらへ、来廿七日午刻迄ニ、御届可及旨被申聞候付、此段為〔得脱カ〕可御意、以廻章如斯御座候間、御触下江は其御触頭々々おひて、御取揃之様存候間、加州藩より廻状、二月廿五日晩到来ニ付、触下江は早々刻付を以、相達候事、

一七〇ノ二

触下

〔秋月種殿、高鍋藩主〕長門守養子〔種樹〕

秋月右京亮

右は諸侯内室在東京之分取調可申上旨、御達之趣承知仕候、右内室当分御当府江罷在候段承届申候、右之外對州・延岡・飫肥・佐土原何れも内室家族等、在東京之者無御座候、此段御届申上候、以上、

触頭

御官名内〔政風〕

内田仲之助

二月廿七日

弁事

御役所

一七一　長州藩使杉孫七郎忠義ニ謁シ使命ヲ陳フ

コノ日、去ル二十二日来着セシ長州藩使杉孫七郎〔重華〕、忠義公ニ謁シ、使命ヲ陳ブ、其ノ概況左ノ如シ、

大久保利通日記

二月二十二日

今日　勅使御発途ニ付、五ツ時御召船へ乗込、御待迎申上候、四字御乗船被為在候、拝謁ノ上引退キ、知政所へ出席、

一今日会計局・軍務局被召建、陸軍所会計方被廃候、

軍務局総裁

島津伊勢

会計局総裁

欠

一今晩大山格之助〔綱良〕入来、長州御使者杉孫七郎云々也、

廿四日

知政所へ出席、今朝重野〔成斉〕建言御草案持参故、席中廻覧両君公へ相伺、吉井同道杉孫七郎へ差越候、御返答ノ趣相達候、

廿五日

今朝西郷吉之助へ参ル、同人昨夜帰宿ニ依テナリ、四ツ時出勤、

一今日長州御使杉孫七郎へ、太守公拝謁被仰付候、

一西郷へ参政被仰付候、

一吉井同道二丸へ出席、拝謁候、

一七二　西郷隆盛藩庁ヨリ参政ヲ命セラル

コノ日、西郷隆盛藩庁ヨリ参政ヲ命セラル、初メ隆盛日當山温泉ニ在リシガ、本月廿三日忠義公自ラ之ヲ訪ヒ、藩政ニ参与センコトヲ促サレシニヨリ、之ヲ諾スルニ至リシナリ、

南洲全集

二月上旬、また日當山温泉に浴す、

二十三日忠義来訪し、藩政に参与せんことを促す、隆盛大に感激し、二十四日藩主に扈随して帰麗す、

二十五日参政を命ぜられ、再び藩政に与る、

一七三　島津久光病ヲ力メテ汽船三邦丸ニ駕シ、鹿児島ヲ発シテ上京ノ途ニ就ク

二十六日、久光公病ヲ力メテ、汽船三邦丸ニ駕シ、鹿兒島ヲ発シテ上京ノ途ニ就カル、

一七三ノ一　大久保利通日記

二月廿六日

五過二丸ヘ出殿、巳刻中将公御発駕、御乗船被遊候、

一照國社ヘ参詣〔以下略カ〕

一七三ノ二　寺師宗道日記

二月廿六日　晴天

致出席候、今日四ツ時

中将様三邦丸蒸艦より御登京被遊候、御供廻纔少之由候〔以下略カ〕

一七四　小牧昌業議政官史官試補ヲ命セラル

コノ日、藩士小牧昌業善次郎議政官史官補ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

島津少将

其方家来小牧善次郎、議政官御用有之、御雇被仰付候間、出仕可申付事、

二月　行政官

今日非蔵人口ヘ小牧善次郎御用ニ付、御留守居付役寄溝口吉左衛門同伴ニテ罷出候処、東園宰相中将様ヨリ御渡相成候付、差上候事、

二月廿六日　有川十右衛門

写　小牧善次郎

御雇ヲ以、議政官史官試補被仰付候事、

二月　行政官

一七五　軍艦武蔵焼亡ニ付船将谷村昌武ノ届書

二十八日、軍艦武蔵焼亡ノ災ニ罹ル、船将谷村昌武ノ届書及ヒソノ関係書類左ノ如シ、

一昨廿八日、御艦武蔵不慮之儀ニ付、当番士官并水夫火焚等呼出し、細々糺問仕候処、左之通之事件申出候、今般出艦ニ付、御修覆并諸事、昨廿八日迄ニて都て相済候ニ付、御艦掃除申達置候処、別紙通人数乗込ニて、

掃除も残なく相仕舞候得共、砲丸室之儀は充分掃除出来兼候故、右室内為掃除、水夫小頭石川初太郎と申者、挑灯携入室仕候処、間もなく発声仕候段、怪我人共より申出候、就ては右室内江合薬又は仕込弾丸等有之候や、外ニ不審之廉無御座候、尚又精々糺問之上相違之儀も有之候ハヽ、則御届可仕候、前件之形行何とも奉恐入候、此段不取敢御届申上候、以上、

武蔵

船将　谷村小吉

二月廿九日

水夫小頭　石川初太郎　相分不申

水夫　前田仲之丞　有村源次郎　桐野幸太郎　怪我

喜三太　順平　初五郎　吉之助　梅太郎　喜助　相分不申

彌三郎　彦太郎　怪我

大工　乙吉　佐次郎　寅蔵　安五郎

火焚小頭　勇蔵　相分不申

火焚　前田袈裟助　嘉吉　徳蔵　鶴吉　六之助　怪我

太鼓役　由蔵　右同断ニ付死

御修覆ニ付雇大工

相分不申

清助
音次郎
寅吉
金次郎
峯吉
定吉

怪我

昨廿八日乗込人数右之通ニ御座候、

【参照】

一去月廿八日、品川沖ニ於て軍艦武蔵丸破損之砌、水夫拾壱人沈没流込致候ニ付、自然海辺ニ於て、漂流之死体見当候もの有之候ハヽ、早速軍務官江可届出事、

三月　行政官

別紙之通被
仰出候付、相達候事、

三月五日　弁事役所

安房　上総　下総
武蔵　伊豆　相摸
右沿海之
諸藩中

右之通弁事伝達掛より御呼出、官掌藤本峻馬を以被相渡候旨、備前其外両藩より廻状到来、加州藩江順達、触下江も相達候事、三月九日町便より京都江申遣候、

一七六　諸藩領地ノ歳入案書ノ通リ認メ届出ツヘキヲ達セラル

三十日、諸藩領地ノ歳入、元治元年甲子ヨリ明治元年戊辰マテ五ケ年ノ平均ヲ算シ、案書ニ準拠シテ認メ、四月限ニ弁事ニ届出ツベキヲ達セラル、ソノ達書及案書左ノ如シ、

巳二月晦日仰渡

一　諸藩

今般領地歳入之員数御取調ニ付、元治元甲子ヨリ明治元戊辰迄五ケ年平均致シ、別紙案書之通相認、当四月限弁官事江可差出旨被　仰出候事

但諸藩ニ於テ御預所之分并ニ管轄中社寺領等、歳入同様相認、一同可差出事、

二月　行政官

右は二月晦日雲州藩御城江御呼出、官掌金谷敬二郎ヲ

以て御渡被成候旨、加州藩より廻状到来、備州藩江順達、触下江も相達候事、京都江三月三日西村出立便より申遣候事、隈元首尾、

〔別紙〕

表紙認様

領地租税録一

何姓何之守

拝領高――

外

込高・新田高・改出高

高――

元治元甲子ヨリ明治元戊辰迄五ケ年平均

正租納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定免之分

此外年々不同ニ御座候、

同断

雑税納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定納之分

此外年々不同ニ御座候、

右之通ニ御座候、以上、

明治二己巳

月　　何姓何之守

何社寺領租税録二

何之守御預所

受領高

外

込高・新田高・改出高

高――

元治元甲子ヨリ明治元戊辰迄五ケ年平均

正租納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定納之分

此外年々不同ニ御座候、

同断

雑税納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定免之分

此外年々不同ニ御座候、

右ハ附属之社寺取調候趣、書面之通ニ御座候、以上、

明治二己巳

月　　何之守御預所

付紙ニて

合三冊

何社寺 領 租 税 録 三

何之守領地

受領高――

外

込高・新田高・改出高

高――

元治元甲子ヨリ明治元戊辰迄 五ケ年平均

正租納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定免之分

此外年々不同ニ御座候、

同断

雑税納高

一米――

一金――

一永――

一銭――

内

米――

金――

永――

銭――

右定納之分

此外年々不同ニ御座候、

右ハ附属之社寺取調候趣書面之通ニ御座候、以上、

明治二巳巳

月　　何之守領地

一七七　黒田清隆箱館追討ニ付総督清水谷公考ノ参謀ヲ命セラル

コノ日、黒田清隆箱館追討ニ付、総督清水谷中将公考ノ参謀ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

一　黒田了介

今般箱館追討ニ付、清水谷中将参謀申付候事、

二月　軍務官

右之通、久我大納言様ヨリ二月晦日被仰渡候旨、御届申出候事、巳三月三日西村出立便ヨリ京都江申遣候、

一七八　桂久武ニ当分ノ間執政心得ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテハ桂久武ニ当分ノ間、執政心得ヲ命ス、ソノ辞令左ノ如シ、

一　桂　右衛門

右執政之人体被仰付迄之間、執政同様之心得を以、御用致取扱候様被仰付候、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳二月晦日　知政所

一七九　木場清生徴士大坂府判事ヲ命セラレ、従五位下ニ叙セラル

二月、コノ月木場清生内伝、徴士大坂府判事ヲ命セラレ、従五位下ニ叙セラル、ソノ辞令書左ノ如シ、

一　木場傳内

徴士大坂府判事被仰付候事、

二月　行政官

叙従五位下

右

木場傳内

宣下候事、

二月　行政官

【参照】　御官名

其方家来木場傳内儀、徴士大坂府判事被仰付候間、此段相達候事、

二月　行政官

〔朱〕「右御受有之候事」

一八〇　徴士・雇士ハ諸藩ヘ沙汰ノ上任命シ、雇士ハ行政官ノ認可ヲ受クコトヲ達ス

コノ月、尓後諸藩士ノ徴士・雇士等ニ命セラルヽ時ハ、其ノ藩ニ照会ノ上ニテ命スヘキニヨリ、府藩県ニテモ、雇士等ノ任命ハ、行政官ノ認可ヲ受クヘキヲ達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

一自今以後諸藩士之輩、徴士・雇士等江被
　仰付候節は、一応其藩江
　御沙汰之上、可被
　仰付候、府藩県ニ於ても雇士猥ニ申付間敷、一々行政官江可伺出候、若し事宜ニより至急相雇度節ハ、何々御用ニ付、当分出仕可致旨相達置、行政官江伺済之上、雇士ニ可申付事、

二月〔三日〕　　行政官

〔稿本表紙〕

明治二年
三月　忠義公史料　三

〔稿本にて補正〕

一八一　藩庁負傷者療養料ノ額ヲ定メテ支給スヘキヲ達ス

三月一日、藩庁ニテハ、負傷者療養料臨時ノ支給ヲ変更シ、負傷ノ程度ニ応シ、予メ其ノ額ヲ定メテ支給スヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一金三拾五両
　但極深手
一同弐拾八両
　但深手
一同弐拾両
　但浅手

右ハ帰陣之手負人数ヘ、是迄時々養生料被成下候得共、以来日数百日丈之賦ヲ以、右通国鈔等ヲ以被成下候条、此旨軍務局・会計局総裁ヘ可申渡候、

但百ケ日相立不致平癒候者ハ、応日数右ノ割ヲ以被成下候、

三月　知政所

〔宋〕
「巳三月朔日

御本文軍務局・会計局総裁ヘ申渡候、

田畑平之丞」

一八二　島方居住願出ノ者アル時ノ処理法ヲ達ス

コノ日、嶋方居住願出ノ者アル時ハ、監察局ニテ検察ノ上、糺明局ヘ廻送スベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一嶋方居住之願申出候節ハ、監察局江可差出候、左候テ同局検察済之上、糺明局江差廻候様被仰付候条、向々江可申渡事、

明治二年巳三月朔日

一八三　久光参内シテ天杯ヲ拝領シ、且禁中足袋
　　并ニ杖ノ御免アリタリ

二日、久光公着京、翌日参内シテ天顔ヲ拝シ、天杯ヲ頂戴セラレ、且ツ病気ニ付、禁中足袋并ニ杖ノ御免アリタリ、

近衛家御用部屋日記明治二年三月十三日

一薩州ヨリ大隅守儀、去ル三日依召参朝被致候処、拝天顔天杯頂戴、且御休息所ヲイテ御酒肴頂戴被致候、尤所労中ニ付、　禁中足袋并杖御免、御休息所迄侍臣両人被免当、去ル六日同様参朝被致候処、積年勤　王之勲労ヲ被慰度、勅使被差下候処、早速為拝謝病中推テ登京参朝候段、　叡感不浅格別之思食ヲ以、御品々下賜、且又参議兼左近衛権中将従三位被蒙　宣下、依之御礼等モ相済候ニ付、帰国之義相願候処、願之通被仰出、今日御当地発途被致候旨申来、

一八四　島津久光議定出仕ヲ命セラル

四日、久光公議定出仕ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

（注意）太政官日誌第卅号ニ侍従トアルヲ、仝卅五号ニ、中将ト正誤アリ、且ツ此ノ時、久光公上京中ニテ、忠義公ハ在国中ナリ、然ルニ明治史要ニモ日歴稿本ニモ忠義公履歴ニモ皆忠義公トアリ、如何

三月四日丙子

御沙汰書写

島津侍従

議定出仕被　仰付候事、

○校正

第卅号一葉前面ノ島津侍従ハ、島津中将ノ誤リナリ、

一八五　俸禄其他出納ニ関スル通達ハ証印ヲ用フ
　　ヘキヲ達ス

コノ日、俸禄其他ノ出納ニ関スル伝事方ヨリノ通達ハ、証印ヲ用フヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一俸禄其他出納向等ニ致関係候儀を、伝事方ヨリ諸向江相達候節ハ、以来別紙之通証印を以、相達候様被仰付候条、此旨向々江可申渡候、

明治二巳三月四日　　知政所

但別紙略ス、

一八六　藩庁諸官衙ノ休日ノ変更等ヲ達ス

五日、藩庁ニテハ従来諸官衙ノ休日ハ、昼夜詰切ヲ要スル局ノ外ハ毎月二七ノ日ナリシヲ、一六ノ日ニ変更セラレ、又高支配方・屋敷方ハ会計局管掌ノ旨ヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一毎月一・六ノ日

右は是迄二・七ノ日休日被召立置候得共、以来右之通休日被召改、当日は諸役局占切被仰付候旨、被　仰達候事、

但監察局並諸御番所・内務局、其外昼夜不明様相勤来候局々は、是迄之通可相心得候、

一御高支配方

一屋敷方

右は本御高奉行支配被仰付置候得共、此節職制御治定ニ付、会計局支配被仰付、勘定役之内、分課ニて相勤候様被仰付候、此旨会計局総裁江可申渡候、

〔朱〕「明治二年巳」三月五日　　知政所

一八七　島津久光叙任宣下ヲ蒙リ打袙ヲ拝領ス

翌日官位ヲ辞退スレトモ許サレス

六日、久光公参内、出格ノ思食ヲ以テ、参議兼左近衛権中将ニ任シ、従三位ニ叙セラレ、御召古ノ御打袙一領ヲ拝領、翌日叙任宣下ヲ辞セラレタレトモ許サレズ、其ノ関係書類左ノ如シ、

島津中将

先般積年勤王之勲労ヲ被慰度、勅使被差下候処、早速為拝謝病中推て登京参朝之段、叡感不浅候、依之格別之思食ヲ以、別紙之通下賜候条、益以一新之鴻業ヲ賛補〔輔〕勉励可有之旨、

御沙汰候事、

別紙

御召古

御打袙　　一領

右下賜候事、

島津中将

参議兼中将之事、雖無家例、出格之以
思食
宣下候事、

島津中将

任参議兼左近衛権中将
叙従三位
右
宣下候事、

辞退ノ上表

臣久光不顧恐伏テ奉歎願候、今般以天使厚蒙勅諚上京仕候処、不図モ昨日以出格之思食、従三位左近衛権中将之官位蒙宣下、実ニ奉恐入候、然処兼テ御届モ申上置候通、病体平臥之身不得勤其職、徒ニ高官位拝戴仕居候テハ、如何ニモ心底不安次第ニ候間、深奉恐入候得共、返上仕度奉存候、何卒趣意相立候様、宜御執奏可被下候、恐惶謹言、

三月七日　　島津宰相中将

弁事御中

官位辞退之儀、志情尤ニ候得共、格別之御宸断ヲ以、被仰出候間、願之趣難被聴食、精々力病奉命可致旨、御沙汰候事、

一八八　島津久光・毛利慶親連署建言

コノ日、久光公再ヒ参内シ、毛利宰相中将ト連署シテ、人心ノ方向ヲ定メ、人選ヲ謹ミ一視同仁ノ叡慮ヲ貫徹セラレンコトヲ三條公ニ建言セラル、ソノ書左ノ如シ、

久光公毛利宰相ト連署ノ建言書

臣等建言の筋、格別言上可仕儀も無御座候へども、乍恐衆議公論を尽させられ、大公至誠を以て、御採択あらせられ、御政令益々一途に出で、近小多端に渉らず、着落拾収の目的相立ち候処にて、御論決あらせられ、人心の方向相立候儀、第一御基礎の階梯に御座あるべく、自然一個の新奇を主張し、各功業を専らとし、其成否を問ハざる様に相成候てハ、所謂論すべくして行ふべからざるの訳に相成り、随て御政令も相行ハれ難く候、尤も其源由する所ハ其人を得させらるゝと否と

に可有之ニ付、御人撰に御廟議を遂させられ候上、緩急の順序を失ハせられず、諸事御施行なさせられ候御議最も御急務と勘考仕候、願くハ臣等御寵遇の　朝憲を天下列藩ニ推及し、一視同仁の　叡慮貫徹仕候様、伏て奉懇願候、以上、

三月

長門宰相中将

島津中将

一八九　西郷従道山縣有朋ト共ニ魯佛二国ノ地理形勢ノ視察ヲ命セラル

コノ日、西郷従道信吾山縣有朋ト共ニ、魯・佛二国ニ遣サレ、地理形勢ヲ視察セシメラル、ソノ令達左ノ如シ、

一八九ノ一

島津少将

其方家来西郷真吾御雇ヲ以テ、魯・佛二国ヘ地理形勢ヲ視察スルタメ、被差向候間、此旨可相達事、

但神戸・長崎二港之間、便宜ニ従ヒ出港可致、且路費之儀ハ右両役所之内ヘ申出請取可申事、

一八九ノ二

各通　長崎府

兵庫県

毛利宰相中将家来山縣狂介・島津少将家来西郷真吾、右両人今般御雇ヲ以テ魯・佛二国ヘ地理形勢ヲ視察スル為メ、被差向候ニ付、神戸・長崎両港之間便宜ニ従ヒ出港可致、且路費之儀モ右両役所之内ヘ申出請取候様申渡候間、此旨可相心得事、

一九〇　車駕再ヒ東幸発輦相成ル

七日、車駕、再ヒ東幸発輦相成リタリ、ソノ概要左ノ如シ、

三月七日己卯

卯下刻　車駕建禮門ヨリ　御首途、御留守宮・公卿・在官諸侯・諸官員ハ後院前通、其他諸侯ハ九條家門外ニ於テ、　蹕ヲ奉送ス、夫ヨリ順路　行幸、昨秋ノ儀ノ如シ、辰下刻青蓮院　御小憩、門室ヨリ菓子一箱ヲ上ル、於是御見送三等以上ノ官員　御対顔被　仰付、御出輦拏茶屋　御小憩、巳刻大津駅　着御、御昼ノ御膳ヲ上ル、圓満院ヨリ昆布一台、園城寺ヨリ菓子一箱

ヲ献ス、夫ヨリ鳥井川　御小憩、申刻草津駅　着御、田中七左衛門ノ家ヲ以テ行在トス、本多主膳正郊迎シ奉リ、　天気伺トシテ　行在ニ詣リ、鮒十尾ヲ献ス、錦織寺ヨリ白砂糖ヲ上ル、

一九一　藩庁造士館ヲ廃シ、和漢洋ノ三学局共役員ヲ免シテ学館ト唱フヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ造士館ヲ廃シ、和・漢・洋ノ三学局共役員ヲ免シテ、尓後学館ト唱フヘキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

造士館改称達書

一今般藩治職制就御治定、是迄之造士館被廃、和・漢・洋之三局共教授以下筆者ニ至迄、都て役職被免、兼て御布告之通、尓後学館と相唱候様、被　仰達候、此旨向々江可申渡候、

〔朱〕「明治二年巳」三月七日　　知政所

一九二　藩庁廃官者ニ全禄ヲ給スルコトヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、役料三十俵以下ノ廃官者ニハ、全禄ヲ給スベキニヨリ、残余ノ重ミ払渡相受度者ハ、申出ツヘキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

廃官者全禄支給云々達書

一諸御役人并兵士・筆者・小役人等、此節廃官之面々、助役迄も三拾俵以下御役料米等被下置候者は、都て是迄之全禄被下賦ニ付、夫々治定之趣は、尚又可申渡候得共、此涯御米申受度者は、形行出納奉行米穀掛方江可申出候、左候て三拾俵以上俸禄被下置候面々は、別段以等級被成下筈候間、其段は追て可申渡候、此旨向々江可申渡候、

但海陸軍局廃官之面々は、銘々自身通帳取仕立、軍務局免印を以、出納奉行米穀掛江申出、御米可申受候、

三月七日　　知政所

一九三　伝事方ヨリ諸局ノ勤務者明細表ヲ差出スヘキコトヲ達ス

コノ日、又伝事方ヨリ、諸局ニ其ノ局々勤務者ノ明細表

ヲ、来ル十日限調製シテ、会計奉行ニ差出スベク、尓後就職ノ者ハ本人ヨリ同様ニ差出スヘキヲ達ス、

一政府会計・軍務・監察・糺明・内務之諸局勤職之面々、筆者迄も明細書取束、来ル十日限会計奉行江可被差出候、左候て追々職務被仰付候節は、当人より同断可被差出候、此段申達候、以上、

但承知ノ名前腰書ニ可被記候、

〔宋〕「明治二巳」三月七日　伝事方

一九四　軍艦武蔵丸罹災後ノ処置方ヲ軍務官ヨリ命令ス

八日、軍艦武蔵丸罹災後ノ処置方、軍務官ヨリ命令アリタリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

一九四ノ一　谷村小吉

謹慎申付置候得共、被免候、

三月　軍務官

右三月四日被仰渡候間、御届申出候事、

一九四ノ二　武蔵丸　船将　司官中

右艦中器械取上、尚修覆可相成様精々遂吟味可申候事、

三月　軍務官

一　中村岩太郎　肝付伊右衛門　佐藤善之助

〃　防州岩國藩　朝枝辰太郎

軍艦補備長官として函館表江出張申付候事、

三月　軍務官

右弐通三月八日、久我大納言様ヨリ、御渡相成候旨、御届申出候事、

一九四ノ三　元武蔵艦乗込

二等格士官中　村岩太郎　肝付伊右衛門　佐藤善之助

右人数三月八日軍艦江乗込、箱館表江出港之旨、御届

申出候事、弐通とも同九日町便より京都江申遣候、

一九五　海軍軍艦運送船四隻ヲ発セシメ陸軍ニ応援シテ箱館ノ賊ヲ討タシム

九日、海軍ニ令シ、軍艦（甲鉄・春日・陽春・丁卯）・運送船（飛龍・豊安・戊辰・晨風）各四隻ヲ発シテ、陸軍ニ応援シテ箱館ノ賊ヲ討タシメ、此日品川海ヲ発ス、其ノ春日艦ヘノ命令、及ヒ青森着迄ノ行動、大概左ノ如シ、

一九五ノ一
一春日艦

来月朔日当港発碇、函館ヘ可航旨御沙汰候事、

二月　　軍務官

右ノ通二月廿九日被仰渡候、

一九五ノ二
一御軍艦甲鉄艦及春日艦・陽春艦、長州軍艦丁卯艦、別ニ運送船四艘、箱館ヘ可航旨被仰渡候、三月九日東京出艦、夫ヨリ所々ヘ碇泊、同月廿日南部ノ宮古ヘ着艦、同廿四日迄同所ヘ滞艦、同廿五日午前五時比、蒸気船壱艘、亜米利加ノ国旗ニテ入港セリ、無間モ日ノ丸ヲ揚直シ、突然甲鉄艦ヘ衝突、士分七名甲鉄ヘ飛乗リ、直様該船ヨリ大小銃ヲ発シテ、甲鉄艦ヲ奪フノ策ナリ、依テ官艦都テ点火シ、当艦及各艦ヨリモ砲撃ス、然ルニ右七名甲鉄艦ヘ飛乗候内、四人ハ即刻打果シ、三名ハ早クモ帰艦セリ、右ハ則チ賊艦回天丸ニシテ、策ノ果サルニ依テ退港逃奔、依テ官艦追討セント雖、何レモ進行スル蒸気力無之、遺憾ナカラ打洩シ、夫ヨリ蒸気ヲ差急キ、漸々六時半頃甲鉄艦及当艦・陽春艦・丁卯艦同港出艘ノ処、遙ニ蒸気船二艘ヲ見掛、壱艘ハ早船ニシテ無間モ艦体不明、夫ヨリ壱艘ヲ見掛ケ盛ニ速力ヲ増シ進行ノ処、当艦壱番ニ抜出、同十時頃南部領内黒崎ノ内段ノ浦ト云沖合ニテ接近スレハ、該船ハ則チ賊艦アジロツト艦ニシテ、当艦ヨリ二三発砲撃ノ処、奈何セン同船ハ同所白浜ヘ乗上ケ、夫ヨリ乗組員凡九拾名余上陸、山中ヘ逃去候ニ付、右追討ノ為メ当艦ヘ便乗シ、御兵具方隊貳拾名、当艦兵卒十名都合三拾名上陸、直様進撃候得共、其所在踪跡ヲモ不明ニ付、不得止ヲ帰艦セリ、此時賊艦火夫壱名擒、且本艦ハ其侭焼却、実ニ愉快ナル初戦ナリ、依テ襲来候賊艦回天丸戦死・手負ノ人名左ノ通リ、

一船将甲賀源吾・士官矢作沖麿・同渡邊大蔵・同筒井専

一郎・同大塚浪次郎・同布施半・同小幡忠甫・同柴山昇、彰義隊士官節長竝（ママ）、笹間金八郎・同加藤作太郎、神木隊士官三宅八五郎・同古橋丁蔵・同酒井扇太郎、水夫七名

合弐拾名戦死

外手負五拾名程

一同廿六日八時過キ、津軽領青森へ着、夫ヨリ四月七日迄同所へ滞艦、

一九五ノ三　海軍応接方ヨリ東京軍務官へ書面

前文略、天気悪ニ付、宮古港碇泊中、今廿五日払暁賊船一艘入来リ、及砲発候処、戊辰丸之儀、一昨廿三日風波強々、諸艦当合申候ニ付、少シ沖之方へ出シ置候処、破損所出来、就テハ怪我人并行方不知ノモノ出来、役々人少ニ相成、敵地ヘハ難進、一旦品川港へ引戻シ、乗人并修覆等差加度申候得共、参謀衆ハ軍艦ニテ、直様賊船追掛、会計器械方拙者共計ニテ、怪我人等手配致居候事故、右請ハ難出来旨申候得共、何分進兼候船無余儀事ニ付テハ、病院守衛之兵モ無之、当港差置候次第ニ参兼候ニ付、右戊辰丸ヘ為乗込差戻シ候間、宜敷御計可被成候、則左ニ

甲鉄艦

乗込　八人

外ニ上陸即時死一人

戊辰丸

乗込　四人

外ニ即死三人

飛龍丸

乗込　一人

右之通御座候間、宜御計可被下候、尚委細ハ医師払底ニ付、長谷川従者大谷ト申人幸医師之事故、附添遣候間、此之者ヨリ御聞取可被下候、先ハ取急キ如斯御座候、以上、

三月廿五日　海軍　応接方

一九六　藩庁各衙ノ知照会同ノ手続ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、諸局関渉ノ用向ハ互ニ知照会同シテ、諸事壅滞セサル様、注意スヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

各衙ノ知照会同手続達書

一諸局御用談等之節、是迄は旧来之仕向も有之候得共、此節職制御治定、諸局総裁・奉行、其外調役等被召建候付ては、各局関渉之御用向は、互ニ本末緩急之次第も有之儀ニ付、仮令は軍務局専任之御用筋は、諸奉行其外彼方江出会、会計局は勿論、其外諸局請持之儀は、軍務局調役・筆者之間、其局々江出会いたし、公事不致壅滞様可相心得候、此旨向々江可申渡候、

〔朱〕「明治二年巳」三月九日　知政所

一九七　薩・長両藩ニ東幸留守中京地ノ警衛ヲ達ス

十日、御東幸御留守中、長藩ト共ニ京地ノ警衛ヲ命セラレ、我藩ニハ三小隊ノ兵ヲ備ヘテ、厳粛ニ取締ルベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

島津少将

今般　御東幸御留守中、其藩京地御警衛被仰付候間、非常之節ハ不及申、平素諸取締向至重之儀ニ付、一入厳粛可取計旨　御沙汰候事、

但兵数之儀ハ、三小隊相備可申事、

一九八　島津忠義大久保利通ヲ召シ、藩政改革ノ功ヲ賞シテ短刀ヲ与フ

コノ日忠義公滞在中ノ大久保利通、明日帰京ノ途ニ就クヲ以テ之ヲ召シ、藩政改革ノ功ヲ賞シテ、短刀ヲ与ヘラル、其ノ状況左ノ如シ、

大久保利通日記

十日

十一字参城、

一今日於　御休息所、　御短刀左安吉三所物七子赤銅御手ツカラ拝領被　仰付候、此度ハ其方致帰国、就変革段々骨折イタシ呉候故ヲ以、都合克相運、別テ令安堵候トノ御沙汰拝承、何共恐懼ニ堪サルノ次第候得共、謹テ御受仕候、長ク家宝タルヘキモノナリ、

一九九　藩庁藩内地頭ノ欠員アル時ハ、之ヲ伝事ニ管セシムヘキヲ達シ直ニ之ヲ実行ス

コノ日、藩庁ニテハ、藩内地頭ノ欠員アルトキハ之ヲ伝事ニ管セシムヘキヲ達シ、直ニ之ヲ実行セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一諸所地頭之内明所相成候節は、伝事江御預被　仰付候条、此旨可承向へ可申渡候、

〔朱〕「明治二年巳」三月十日　知政所

一谷山地頭兼帯桂右衛門江被　仰付置候得共、此節御家老御役被免、参政被　仰付候付ては、右地頭職之儀明所相成伝事預被　仰付候条、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳三月　知政所

二〇〇　藩庁医学院ヲ廃シ、教授以下ノ職ヲ免シ医院ト称スヘキヲ達ス

コノ日、又藩庁ニテハ藩治職制ニ基キ、医学院ヲ廃シ、教授以下ノ職ヲ免シ、医院ト称スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一今般藩治職制就御治定、是迄之医学院被廃、教授以下都て職務被免、兼て御布告之通、尓後医院と相唱候様被　仰達候、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳三月十日　知政所

二〇一　浮浪人取締達書

コノ日、東京ニテハ浮浪人取締ノ為メ、公私ヲ論セス藩人ニシテ各所ニ居住ノ者、寄留ノ者、又ハ一時滞在ノ者等、悉ク其ノ主人ヨリ来ル廿日迄ニ其ノ人名ヲ届出テ、尓後到着ノ者ハ、其ノ都度主人ヨリ届出ツベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

〔朱〕「本文御届申出候趣は、末弐拾五枚目ニ有之候事」

一浮浪人之義ニ付テハ、昨年来毎々被　仰出候旨も有之候処、今以行届兼、都下往々脱籍無産之輩有之趣相聞得、実以不相済事ニ候、就ては今般戸籍改正、右等之徒御取締相成候ニ付、在東京之公卿・諸侯を初徴士・大夫・士、行政官支配附より府下之社寺・士民、文武其外諸塾ニ至迄、無籍之者差置候儀、一切不相成候事、

一不得止子細有之、厄介等ニ致し置候者は、其情実巨細ニ書記し、来ル廿日迄ニ可届出事、

一諸向家来を初、其外東京滞在之者は姓名書記し、其主人々々より、来ル廿日迄ニ可届出事、

一以来他国より到着之者有之節ハ、其度毎主人々々より可届出事、

但

公卿・諸侯・徴士は行政官江相届、大夫・士・行政官支配并附は、触頭を以同様可相届事、

三月〔八日〕　行政官

右弁事伝達所におゐて、官掌河上辰蔵を以、被相渡候旨、月番郡山藩外弐藩より回章到来いたし候事、

巳三月十日

一三月十九日町便より京都へ差遣候事、

二〇二　藩士森時之助東京府大病院常務方ヲ命セラル

コノ日、又藩士森時之助雇ニテ、東京府大病院常務方ヲ命セラレタル旨ヲ、東京府ヨリ同公用人ニ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

〔朱〕「本文時之助儀ニ付ては委細往返留ニ有之候事」

森　時之助

大病院常務申付候事、

三月　東京府

右東京府より、公用人付添ニて御呼出之上、判事北嶋時之助より、当人江被相渡候事、

巳三月十日

御名

公用人

其藩士森時之助御雇を以、大病院常務方申付候間、此段相達候事、

三月　東京府

右東京府より御呼出之上、公用方理事見習、時任清左衛門へ判事北嶋時之助を以、被相渡候事、

巳三月十日

二〇三　東京ニ於テ明屋敷ノ拝借又ハ添地ノ願出ヲナスニ添地トシテ下賜セラル

十二日、東京ニ於テ神田橋拝領屋敷外、明屋敷ヲ拝借、又ハ添地ノ願出ヲナセシニ、十九日ニ至リ添地トシテ、下賜ノ内達アリ、六月ニ至リ公然ノ指令アリタリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

二〇三ノ一
一神田橋御門外向明屋敷壱ケ所有之由ニて、御拝借地御願立之儀申越趣、令承達候、就テハ夫々伺之上申越筈候得共、其通ニては外々より借地相成候てハ、甚遺憾之事候故、直様借地相成候儀願立候様可致、
中将様御儀も此節
勅使御受御礼として、近々
御上京之筈ニ付、其上形行申上候様可致候、此段申越候、以上、

二月廿八日　　嶋津主殿

内田仲之助殿

御本文被仰渡趣承知仕候、然処営繕方御用地ニ相成、当分御囲御出来相成居申候、乍併御掛大原少将様御方江粗前以御内意申込置候処、営繕方之儀は一端之御用地ニ付、御用済之上ハ如何様とも御取計御出来可相成との事ニ付、仰渡之趣を以表向御願書差出、猶亦御内意申込置候様可仕候、此段御清答旁申上候、以上、

巳三月九日　　内田仲之助

主殿様

二〇三ノ二
一別紙手扣書を以、去月御内意申上置候処、其後営繕方御用地御囲御出来相成候、就ては若御不用相成候節は、近比恐多奉存候得共、何分手狭ニて甚難渋仕候間、何卒拝借亦は添地之間、以御評議御免被
仰付被下候様偏ニ奉願候、左様御座候得は、以御蔭家作向聊相寛、別テ難有仕合奉存候、此段宜敷御執達奉願上候、以上、

三月十二日　　御名内

内田仲之助

弁事

御役所

二〇三ノ三
(朱)「御張紙

営繕方御用相済候上は、為添地下賜候事、弁事伝達所より御呼出に付て、公用方理事見習時任清左衛門罷出候処、官掌真名部一太左衛門を以、御張紙ニて被相渡候、就ては御礼之儀、御往返日賦を以
御着輦之上、私相勤候様可仕候事、

巳三月十九日　　田中清之進

本文ニ付
三月廿二日弁事御役所より御呼出ニ付、理事隈元敬

一郎罷出候処、権弁事多久與蔵殿より御張紙之儀は取消ニて、口達を以相達候筋心得候様被相達候事」

二〇三ノ四　口上手扣

今般拝領被
仰付候神田橋御門内屋敷之儀、壱万三百坪余有之、家作連建明地無之、非常火災等之節、邸中甚不弁利差見得心配仕居申候、屋敷箇所之儀、被
仰出候趣も有之、深恐入奉存候得共、神田橋御門外北向も凡弐千坪程も可有之哉、明屋敷御座候、若御不用ニ被為在、御差支無御座候ハヽ、最寄ニ付拝借又は添地之間、
御評議を以被
仰付被下候儀は、難被為出来儀ニ可有御座哉、殊更此内京師ニおゐて版籍之建言申上居、余計手広可奉願訳ニは無御座候得共、余り手狭ニ付、不得止私手切無屹度御内々御都合奉伺度、奉存候事、

御名内　内田仲之助

二月
巳三月十二日

右弐通時任清左衛門より官掌伊藤民之助江差出候処、致落手候旨申聞候事、

二〇三ノ五　指令

島津宰相

神田橋御門外明地、願之通為添地下賜候事、

六月

二〇四　言路洞開上下貫徹ノ為待詔局ヲ設ケ、庶民ニ至ルマテ意見ヲ陳述スヘキヲ達ス

コノ日、又言路洞開上下貫徹ノ御主趣ニテ、東京城ニ待詔局ヲ設ケラレタルニヨリ、庶民ニ至ルマデ意見ヲ陳述スベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一大政更始以来旧弊一洗、言路洞開上下貫徹、少も雍蔽無之、天下有志之者竭丹誠為国家無忌憚建言致候ニ付、追々御採用相成候得共、猶実効之不立廉々有之、畢竟御旨趣貫徹不致、有志之者撰挙ニ相洩候哉と、深く御煩念被為在候ニ付、此度於東京城待詔局被為開候間、有志之者草莽卑賤ニ至る迄、御為筋之儀早々建言可致、

篤と議論相遂、其所長を以夫々御用可被
仰付御趣意ニ候間、向後潜伏隠遁欝々其志を不達者有
之候ては、至誠尽忠之素志ニ相悖候間、尚上下一致偏
ニ尽力可致旨被
仰出候事、
三月〔十二日〕　行政官
右三通（二通ハ除ク）三月十二日、伝達所より御呼出
小室新彌ヲ以御渡相成候旨、備州藩外両藩より廻状到
来、伊州藩江順達触下江も相達候事、
三月十九日町便ヨリ京都へ差越、

二〇五　石神良策一等医学校医師五局取締ニ任セラル

コノ日、石神良策一等医学校医師、五局取締ニ任セラル、
其ノ辞令左ノ如シ、
一等医学校医師五局取締　石神良策
右之通等級治定之事、
三月

右之通三月十二日行政官ヨリ被仰渡候旨、御届申出候
事、

二〇六　島津久光京都ヲ出発シ大坂ニテ三邦丸ニ乗艦着麗ス

十三日、久光公京都ヲ出発シ、十九日大坂ニテ三邦丸ニ
乗艦、二十一日着麗セラレタリ、其ノ概況左ノ如シ、
近衛家日記
明治二年三月十二日　快晴
一嶋津宰相中将様明日御出立、御帰国ニ付御餞別トシテ、
塩見マン　一箱
御肴代金　三百疋被進候、
大久保利通日記
十四日
九時比摂海へ着艦、伊丹七へ暫時上陸、
中将公昨日御下坂西本願寺御滞留ノ由故、則参館拝謁、
京師近情等拝誦イタシ候、〔十五日～十八日省略カ〕
十九日
中将公御発途ニ付、七字過西本願寺へ参殿イタシ候、

寺師宗道日記

同廿一日　晴

略上七ツ後時分、沖江蒸気船相見得、合図砲声度々相聞得候、定て三邦丸ニ候半、

中将公御下りならんと云、夕時分帰ル、

同廿二日　雨天

市來氏も参候、昨日

中将公御着船、三邦丸御乗舟之由、御官位従三位参議

中将御任官之由〔以下省略カ〕

久光公帰館達書

中将様御事、

勅使為御拝謝御上京、去ル三日

御参　内被遊候処、於　常御殿

天顔御拝天杯御頂戴、於御休息所　御酒肴御拝戴、同

六日重て　御参　内、於　常御殿　天顔御拝、輔相公

御取持ニて

勅使為拝謝病中推て登京参

朝之段

叡感不浅、格別之

思召を以、　御召古御打袷下賜、尚御一新之鴻業を賛

輔勉励可有之旨被

仰渡、左候て雖無家例出格之

思食を以、参議兼左近衛権中将従三位被為蒙　宣下候、

然処御所労ニ付、依御願御当地江之御暇被　仰出、去

ル十三日京都　御発駕、同十九日、大坂　御発艦、同

廿一日　御着艦、　御機嫌能被遊　御着館候、依之御

一門方始諸士并座附士迄も、一同今日登　城、　太守

様　中将様江御祝儀被申上候筋被仰付候条、向々江可

致通達候、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二〇七　西洋式蒸気船並風帆船当時所持分調査シ、雛形ノ通リ巨細届出ツヘク云々達書

十九日、西洋式蒸気船并風帆船共、当時所持ノ分雛形ニ拠リ調査シ、巨細届出ツベク、以後事故アル時ハ其都度届出ツベキ旨、軍務官ヨリ達セラル、ソノ達書及雛形左ノ如シ、

西洋式蒸気并風帆船共、当時持合之分并船章別紙雛形

之通、巨細不漏様、今般改テ可届出候、且亦向後買入候分、破損等一々早速可届出候事、

三月十九日　軍務官

薩州藩

外ニ拾三藩略ス、

〔朱〕「巳三月廿七日御国元并京都へ取調方申越候事」

雛形

船号　原名　和名

木製 鉄製

但軍艦ハ砲数并ニ斤数巨細可記事、

長サ　何十尺

巾　何尺

水入リ深サ　何尺

荷積高　何頓或ハ何石

檣　何本

煙出シ　何本

一時何里行

但日本時日本里

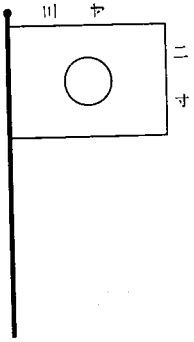
一昼夜所費石炭凡何斤、船中所在石炭囲所何斤入リ

右西洋紀元何年何国製造

我何年何月何港ニ於テ買入レ

以上

船章



右美濃紙ニ可相認事、

右之通軍務官ヨリ廻達到来、伊州藩江順達触下江も相達、

二〇八　東京芝田町町並抱屋舗地続預地共、下邸トシテ下賜セラル

コノ日、東京芝田町町並抱屋舗地続預地共、下邸トシテ下賜セラル、ソノ書左ノ如シ、

但本邸ハ去月十三日下賜セラル、

嶋津少将

芝田町々並抱屋敷地続預地共、為下邸下賜候事、

三月　行政官

〔朱〕「本文ニ付五月廿二日御礼済」

弁事御役所より御呼出ニ付、公用方理事見習、時任清左衛門罷出候処、権弁事平松甲斐権介様を以、御渡相成候、就ては御礼之儀、御往返日賦を以御着輦之上、私相勤候様可仕候事、

巳三月十九日　　田中清之進

二〇九　藩庁諸道関門廃止ノ朝命ニ付イテ心得違無キ様注意スヘキ旨ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、諸道関門廃止ノ朝命ニヨリ、関門ヲ撤シ番所ハ猶ホ従来ノ通、通行ヲ検シ非違ヲ監察スレトモ、之カ為ニ道路ヲ抑塞シ、行旅ヲ妨クルニ至リテハ、朝旨ニ背クニヨリ、心得違無キ様、注意スベキ旨ヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一諸道関門御廃止之

朝命被為　在候付、御領国中諸関取除、御番所は是迄通ニて、出入改方尚又念入候様致通達置候処、全体関門を被廃候

御趣意は、御政令四外ニ暢達し、上下之情不致間隔様との御宏謨ニ候、然るニ番所之儀は通行を検視し、非違を監する之設ケニ候処、万一道路を抑塞し、行旅を妨くる等之事有之候ては、名は番所ニて実は関門之旧習を襲ひ、

朝旨を遵奉せさるニ相当り候間、屹と心得違不致様ニ更ニ被仰付候条、向々江可致通達候、

明治二年巳三月十九日　　知政所

二一〇　浮浪人取締達書ニ基キ届出ヲナス

廿日、東京ニテハ去ル十日、浮浪人取締ノ為メ、達セラレタル達書ニ基キ届出ヲナセリ、其ノ届書左ノ如シ、

一内田仲之助　　田中清之進

隈元敬一郎　　肥後七左衛門

溝口吉左衛門(ママ)　　今井一兵衛

時任清左衛門　　鶴丸金之進

石原正右衛門　　餅原岩十郎

相良此右衛門　　原口孫之進

加納伊豆太郎　　斯波平蔵

右御当府在勤之士分

士分

嶋津帯刀　白男川龍次郎
濱田恕哉　濱田直助
長崎助八郎

右昌平学校江入館

士分

大脇源左衛門　益山次左衛門
山口平次郎　田代五郎左衛門
伊勢勘之丞　黒田才蔵
池上勇次郎　榎本源次郎
市來宗次郎　松清喜之助
丹山左一郎　鈴木十大夫
執印休蔵

足軽

竹内直治　野嶋龍助

蒸気船機関者并水手

前田袈裟助　前田仲之丞
桐野小太郎
内田仲之助家来
今熊兼次郎
夫卒

清次郎　新助
京都西七条村雇夫
壽次郎

右奥羽諸所ニて戦争之節、手負又は自病等ニて、為養生方当分大病院江罷在候、

士分

堀剛十郎　岩切喜之助

足軽

有川嘉之助

右前条病人為差引大病院江罷在候、

足軽

前田藤助　吉利勇蔵
永井伊右衛門　有川雄左衛門
盛川政一郎　清藤才太郎
玉利藤次郎　川畑吉左衛門
木藤森助　立山宗之進
大篠甚吉　橋口良助

右御当府在勤

元新宮藩
旧幕府開成所教授方

海陸軍兵書取調兼務
宇都宮鑛之進

右長病ニて親族等も無之故、旧友斯波平蔵方江為養生方罷居候、

元豆州伊東岡村
神職江口大和悴
木村益蔵

右弐拾三ケ年以前本国暇済、昨年十月より一往抱ニて公用方足軽申付候、

元丹後田邊河原村
百姓定右衛門二男
小嶋貞蔵

右安政六未年生国暇済、一往抱ニて右同断申付候、

元肥前長嶋今石炭町
乙名桃井豹一郎弟
森　猪之助

右生国暇済、昨年十二月より一往抱ニて、右同断申付候、

元高輪仲町居住町人
大木屋平右衛門事
井上平右衛門

右所暇済之上、昨年正月より召抱右同断申付候、

深川海辺大工町
武蔵屋松五郎二男
中嶋善蔵

右細工方ニ付、一往召抱申候、

元上総長柄郡小泉村
百姓友右衛門二男
新助

右幼年より所暇済之上、肥後七左衛門家来ニ召仕候、右は浮浪御取締ニ付、御達之趣承知仕候、弊藩御当府滞在人数右之通御座候間、此段御届申上候、以上、

御名内
田中清之進

三月廿日
弁事
御役所

右弁事御達所江溝口太左衛門(ママ)より差出候処、官掌手塚主膳受取相成候事、

巳三月廿日

二一一　白山佛国帝ヨリ薩摩藩公ヘノ贈品ヲ鹿児島ヘ持チ来リテ島津忠義ニ謁ス

二十二日、佛国公篤（コントデ）諸侯ト訳ス白山（モンブラン）其ノ国帝ヨリ本藩公ヘノ贈品ヲ鹿児島ニ持チ来リテ、忠義公ニ謁ス、其ノ次第左ノ如シ、

一佛郎西国ノ公篤諸侯ト訳ス白山、其国帝ヨリ
太守様江進呈ノ品持参ニ付、三月廿二日
御対面所ニ於テ賜謁、当日白山登
城ノ次第左ノ如シ、

一前日会計総裁ヨリ明日十二字登
城セシム可ノ旨、書翰ヲ以テ通達ス、

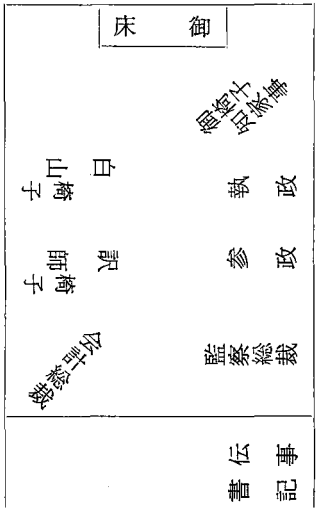
一当日会計局員二名白山旅館マテ前導トシテ被遣、同道
ニテ登　城、
　但訳師附添、

一伝事ヨリ来着ノ段言上ス、

一御楼門ヨリ入リ唐御門ヲ通高欄ヨリ登ル、会計総裁高
欄ノ下迄出迎、

一太守様高欄上マテ御迎、
　但執政・参政・監察・総裁・伝事・知家事・侍直長罷出、

一御対面所江着座、
　但座席進退会計総裁勤之、



御床飾等平常　御出座ノ通リ

一茶ヲ賜フ、
　但道具方受持、

一賜謁　御応答アリ、

一進呈ノ品　御受取知家事江御渡、

一礼式畢リ前行ノ如ク退出ス、
　御見送リ御迎ノ通リ、
　但会計局官員并訳師附添、前件ノ通、

一集成館ニ於テ酒肴ヲ賜フ、

但会計局受持、
以上

二一二　東京着輦ニ付奉迎ノ上参内シ祝詞ヲ述フヘキヲ達セラル

コノ日、東京ニテハ、来ル廿八日御着輦ニ付、奉迎ノ上四月一日参内、祝詞ヲ述フヘキヲ達セラル、其ノ関係書類左ノ如シ、

一　在東京諸侯

来廿八日
御着輦ニ付、卯半刻元平岡丹波屋敷前江罷出奉迎、着御被為済候得は、退散可有之事、
四月朔日巳之刻参
内恐悦可申上事、
但奉迎并参賀之節有位者衣冠、無位者直垂着用可有之、猶又所労等之輩ハ、重臣名代を以、恐悦可申上事、
三月　行政官

一　在国諸侯

来ル廿八日
御着輦ニ付、四月朔日以重臣恐悦可申上事、
三月　行政官
「本文恐悦之義、内田仲之助相勤候事、」(朱)
御取次香成直之丞

巳四月九日便御国元江申上候事」
右弐通弁事伝達所ニおゐて、手塚泰助殿を以被相渡候旨、月番三藩より廻状到来いたし候事、

一今度
御東幸ニ付、諸藩心得振之儀、左一ツ書を以奉伺候、宜御差図被成下候様仕度奉願候、以上、
三月廿日　柳澤甲斐守(保申)内　久城壮輔　池田侍従内　澤井権次郎　徳川中納言内　津田兵彌
弁事

御役所

一御着輦御当日、無役之諸侯奉迎場所之儀、且何刻参着仕可然御座候哉、

御張紙

御布告ニて可致承知事、

一供廻り之者共、何れ之御場所へ差置候て、宜御座候哉、

同

御布告ニて、可致承知事、

一御着輦奉迎場所へ罷出候節、并翌日為伺　天機参朝之節は、何服着用仕候て宜御座候哉、

但

無官之者は、着服如何相心得可然御座候哉、

同

有位者衣冠、無位者直垂着用之事、

一在国之諸侯は、重臣を以奉伺天機候て、宜御座候哉、

右之外尚心得振之儀、宜御差図被成下候様仕度奉存候、以上、

一今度御着輦被為在候ハヽ、貢献品之儀、如何相心得候て、宜敷御座候哉、此段奉伺候、以上、

柳澤甲斐守内
久城荘輔
備前侍従内
澤井権次郎
徳川中納言内
津田兵彌

弁事

御役所

御張紙

不及其儀候事、

一御着輦之節、奉迎之諸侯休所之儀ハ、元松平下総守屋敷ニ被設置候事、

但供廻り之分は、同所門前幕張之内江可差置事、

三月

右御達書一通并伺書二通御張紙ニて、弁事伝達所ニおゐて、江坂義彦殿を以、被相渡候旨、月番三藩より廻状到来いたし候事、

巳三月廿三日

二一三　御再幸ニ付聖慮ヲ奉体シ、又外国人ニ対シ粗暴ノ所為ヲナスヘカラスヲ達ス

二十四日、今般ノ御再幸ハ、公卿群牧ヲ会同セシメ、衆議公論ヲ以テ、国家ノ基礎ヲ定メ、万世不抜ノ鴻業ヲ立サセラルヽノ聖慮ナレバ、皆其意ヲ奉体シ、各其ノ分ニ応シテ、報効スベキ事、并ニ外国人ニ対シ粗暴ノ所為ヲナシ、皇威ノ失墜ニ関スルコトヲ惹起セバ、其ノ藩主又ハ主宰者ニモ責ヲ負ハシムルコトアルベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一今般再
御臨幸被為
遊候儀は、兼て被
仰出候通、公卿・群牧ヲ会同シ、衆議公論ヲ以、国家之大基礎被為定、上下治安万世不抜之鴻業被為立度
聖慮ニ候条、諸藩士は不及申、公卿附属之面々ニ至迄銘々心得方可有之は勿論ニ候得共、猶又厚ク
御主意ヲ奉体認、仮初にも不都合之儀無之様、各其分に応シ、報効之覚悟可為肝要事ニ付、主人々々よりも篤と可申聞様、
御沙汰候間、此旨相達候事、

三月〔二十四日〕　行政官

一外国人通行之砌於途中出逢候節、往来之半を譲り可致通行様、兼て御布令之趣も有之候処、近来間々不都合之儀も有之趣相聞へ、以之外之事ニ候、自然瑣末之行違より、皇威ニ関係候様之儀出来候ては、実ニ難相済次第ニ候間、向後混雑無之様屹度相心得可申、万一粗暴之所業於有之は、当人ハ勿論、時宜ニより其藩主或ハ主宰之者江厳重可被及御沙汰、此旨更ニ相達候事、

三月〔二十四日〕　行政官

右弐通三月廿四日弁事伝達所ニおゐて、圓城寺愛之丞を以て、被相渡候旨三藩ヨリ廻状到来、伊州藩江順達触下も相達、

二一四　島津忠義夫人産後病気ノ為逝去セラル

コノ日、忠義公夫人晴子(テル)産後病気ノ為逝去セラレ、二十五日神葬ヲ用フベキヲ達シ、廿八日執行セラル、ソノ達書及ヒ概況等関係書類左ノ如シ、

二一四ノ一

一御前様今未上刻　御出産、

御女子様御誕生別て御健ニ被遊御座、依之御一門方諸大身分其外任職之面々諸士并座附迄於席々相謁、御祝儀申上候筋被仰渡候、此旨向々江可致通達候、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一四ノ二
一御前様御事　御出産後御病気段々被為成御療養候得共、御労倦御増極々御大切ニ被為及候、依之御一門方・諸大身分其外任職之面々、只今登城席々謁ニて、　太守様　中将様江可被奉伺御機嫌候、

右外略ス、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一四ノ三
一御前様御病気御養生不被為叶、今夜亥下刻被遊御逝去候、依之御一門方并二等官以上知家事江相付、太守様　中将様江可被伺　御機嫌候、

右外略ス、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一四ノ四
一御前様御逝去付、慎左之通、

一山野殺生并鳴物、日数二十日可相止候、
一普請作事并漁猟諸商売家職付音高儀は、日数三日可相止候、内は町屋之店鎖し用分相達候迄可明置候、
一御直士月代日数十日可相立候、
一火用心別て可念入候、
一二丸御方勤之面々も、右ニ準し人々心入を以可相慎候、

右之通向々江致通達、地頭・領主・琉球并諸嶋在番・長崎詰会計奉行江も可申渡候、

但諸郷・私領・琉球諸嶋之儀は、此書付相達候日より、前文通相慎、長崎之儀は仕来之通可相慎候、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一四ノ五
一御前様御諡

稚櫻豊暐姫命

右之通奉称候条、向々江致通達、諸郷・私領江も可申渡候、

明治二年巳三月　　知政所

二一四ノ六
御前様御逝去付

御忌服左之通

一御忌二十日　一御服九十日
太守様

一御忌三日　一御服七日
中将様

一御忌十日　一御服四十五日
天璋院様

右之通御忌服被遊　御請筈候得共、日数相過候へハ、一日御遠慮之筈候、

一御忌二十日　一御服九十日
貞君様

右前条同断之節は、一日御遠慮之筈候、

一御忌二十日　一御服九十日
徳壽院之御方

一御忌二十日　一御服九十日
於典殿
寧姫様

一御忌三日　一御服七日
勝姫様
紫雲院様

知鏡院様
晴雲院様

右三御方様ニは、日数相過候へハ、一日御遠慮之筈候、

一御忌三日　一御服七日
於盛様

右日数相過候得は、一日御遠慮之筈候、

一御忌三日　一御服七日
悦之助様
於成様
真之助様
於俊様

右之通御忌服被遊　御請候条、向々江可致通達候、

明治二年巳三月　知政所

二二四ノ七
一御前様御遺体、今日四ツ時　御入棺之筈候条、御手当等之儀、神社奉行江申渡可承向々江可申渡候、

明治二年巳三月廿五日　知政所

二二四ノ八
一御先代様御葬祭之儀、是迄仏家作法を以御執行被為在

来候得共、此節
御前様御逝去ニ付テハ、方今復古之御盛典ニ被為基、
御葬祭向都て神国之礼式を以可被為遂行旨、被
仰達候条、此旨神社奉行江申渡、向々江も可申渡候、
但御葬具出来ニ付ては、受持之局々より都て神社方
江引合、早々無手抜取計候様、被仰付候、
明治二年巳三月廿五日　知政所

二二四ノ九
一常安峯
右は此節福昌寺境内山中開拓之場所
右之通相唱
豊暐姫命御遺体可被遊　御埋葬旨被仰達候条、向々
江可致通達候、
明治二年巳三月　知政所

二二四ノ一〇
一御前様御葬送明後廿八日被仰付、同日八ツ時御供揃之
筈候条、向々江不洩様致通達、御手当等之儀無滞相弁
候様可取計旨、神社奉行其外可承向江可申渡候、
明治二年巳三月廿六日　知政所

二二四ノ一一
一明廿八日
稚櫻豊暐姫命御遺体奉葬之御次第
一当日午之刻御裏御卧所より、同御書院御床前江御遷座
之上、葬主已下
御前ニ参リ幣物を備江奉葬之詞を白し、畢て葬主已下
四度之拝ありて、四度之手を拍つ、畢て
御方々様御拝、夫より御一門方并御女中方拝礼、次ニ
参政・知家事・裏役頭・同助・侍直長・侍直・裏詰・
侍医・内監并御年寄已下諸女中等拝礼、
但御裏御卧所より御遷座之節、御櫃を舁奉る者ハ、
裏詰足軽より相勤、裏役頭以下内監以上は、御守
上之儀を勤む、
一御卧所より御遷座之跡、
一御裏御書院御出之跡、
右大祓如例、社家より相勤、
一常安峯之御塚所江御着、御埋葬之儀畢て葬主御告文を
読む、随従之群官拝伏する事例の如し、幣物を案上ニ
奉奠す、鼓吹始終音曲を奏す、次ニ葬主介添等、四度
拝ありて四度の手を拍ツ、次ニ　公族已下随従の諸官
各再拝拍手有之、次ニ幣物を撤す、其儀奉奠の例ニ同

し、

一右終て葬具を焼却し、尓后諸官皆退出す、

一退出之節　公族方并諸官女中等、内之丸入口小川ニて大祓社家之内より相勤之、

一御葬礼之夜より御塚成就迄之間、裏役頭・助、裏詰・内監之間壱人ツヽ、并検事両人・足軽弐人・人足壱人不明様白夜直番被仰付候、

一墓方被仰付迄之間、社家之内繰廻相詰、御祭礼相勤候儀、神社奉行受持、

一御葬被為済候段、知家事より御方々様江申上ル、

右之通被仰付候条、向々江早々可致通達候、

明治二年巳三月廿七日　　知政所

二一四ノ一二

一御前様御葬送之節、御裏御玄喚より、御台所御門　御出、御楼門下通、吉野橋北郷主水前通、堅馬場筋内之丸　御通行、本桂樹院跡より常安峯江　御着、

一諸士其外一統、右御道筋江罷出拝礼、

但改服、

一御葬場内外取締監察局受持、

但書同断

一御行列前後江検事四人ツヽ、足軽召列、従行御中途取締可致候、

但書同断

右之通被仰付候条、向々江可致通達候、

三月　　知政所

二一五　藩治職制ニ拠リ新ニ地頭並ニ副役ヲ置ク

コノ日、藩治職制ニ拠リ、新ニ地頭並ニ副役ヲ置キ、副役ハ民事奉行副役、及ビ見習ヲ以テ之ニ充ツベキ規定ナレドモ、地頭ハ一方ノ重寄軍国ノ提督タルベキモノナレバ、此ノ二職ハ特ニ人選スベキニヨリ、其ノ意ヲ諒トシ勉励スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

二一五ノ一

一地頭之儀、一方之重寄にして、軍国之事を提督し、不容易職任候付、此節分て被仰達趣有之、部下之事務専御委任被仰付候、右ニ付地頭副役之儀、民事奉行副役及見習を以被仰付、職制書ニ被載置候得共、別段御人撰を以被仰付候筋被仰達候条、地頭并地頭副役・民事奉行江申渡、向々江

も可申渡候、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一五ノ二

一地頭職は古之郡領ニて、士民を撫育し、所部を粛清し、一方之重寄ニ任し、所謂分憂之官とて、古今殊ニ其撰を重せり、我藩四封之内ニ外城を列置し、軍政を寓し、地頭をして其治教を提督せしめ、因て骨鯁之先哲を任用し、親く其地ニ莅み、士民を愛養し以て国家を維持す、実ニ深遠不抜之美制たり、尓後治平之久しき、終ニ遙任兼帯之職となり、空名を存する而已ニ成行候処、近年居地頭之古制雖被復、動もすれハ散官閑職之様ニ成立、部之庶務却て決を他人ニ仰くニ至る、今般版図返上之　御献言被為在、随て藩治職制御変革之段、申達置候通ニ付ては、地方官之儀、第一王土を管する要職、仮令藩国之属下たりと雖も、府県之事体と大小之区別有之而已、況や軍国多事之時ニ当り、方寄之任訳て重大之事候故、一方之事専御委任被仰付候条、篤と　御趣意を体認し、御先代之美制ニ基き、職制御規定之件々実効相挙候様、処分可有之、尤別段副役をも被召付置候付、毎事申談、所管之地内は両役時々致点検、士気興起せしめ、軍威相輝キ、勧農諸事行届候様可取計、左候て重大之事件は直ニ政府江申稟し、商議之上親しく上裁を受け、可致施行被仰付候、此節天朝ニ於て監察使被差立、諸府各県を御巡察之御定、御布告相成候得は、朝制ニ依法し、時々検使被差廻、所部之治否を察し、地官之能不を考へ、褒貶黜陟被為有度　思召候条、一統奉承知、猶又勉励職掌を竭し候様被　仰達候、此旨地頭并地頭副役江申渡、向々江も可申渡候、

明治二年巳三月廿四日　　知政所

二一六　在米中ノ薩藩士吉原重俊以下三名ニ改メテ留学ヲ命スル旨ヲ達ス

コノ日、在米中ノ本藩士吉原重俊（彌次郎）変名大原令之助・種子島敬輔（一作綱変名吉田伴七郎）・磯永彦助（変名長沢鼎）ニ改メテ、留学ヲ命スル旨ヲ達セラレタリ、其ノ達書左ノ如シ、

一　　御名

其方家来大原令之助・吉田伴七郎・長澤鼎、兼テ外国

留学罷在候処、今度改テ留学被
仰付候間、此旨相達候事、
三月　　行政官
弁事御役所より御呼出ニ付、時任清左衛門罷出候処、
弁事久松監物殿を以被相渡候事、
巳三月廿四日　　田中清之進
〔朱〕「巳三月廿七日御国元江申上候事」

二一七　藩庁島津忠義夫人逝去ニ付戦亡者招魂祭延期ノ旨ヲ達ス

二十六日、藩庁ニテハ、明後廿八日戦亡者招魂祭ヲ執行セラルベキノ処、忠義公夫人逝去ニ付、延期セラレタル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一明後廿八日、於　御対面所戦亡人数招魂祭被　仰付候旨申渡置候得共、
御前様御逝去付被召延候条、可申渡候、
明治二年巳三月廿六日　　知政所

二一八　藩庁廃人トナリタル者ヲ調査シ軍務局ニ申告スヘキ旨ヲ達ス

二十七日、藩庁ニテハ出軍負傷者ハ、医師及ヒ検事ヲシテ、巡検セシムベキニ定メ置キタレド、尓後廃人トナリタル者ヲ、各管轄者ヨリ調査シテ、軍務局ニ申告スルコトヽシタル旨ヲ達ス、其ノ達文左ノ如シ、

一御城下并外城・私領出軍創症之面々江診察為見廻、医師並検事被差遣候旨、被仰付置候得共、右は被成御免、左候て御城下之儀本隊長、外城之儀地頭并同副役、私領之儀領主より、創症ニて廃人相成候者は、委細取調、軍務局江申出候様被仰付候条、向々江可申渡候、
明治二年巳三月廿七日　　知政所

二一九　隠居・嫡子等ノ官位ニ就キシ年月日等雛形ニ拠リ取調ヘ差出スヘキヲ命ス

二十九日、東京ニテ弁事役所ヨリノ命ヲ以テ、月番藩ヨリ隠居・嫡子等ノ官位ニ就キシ年月日等、雛形ニ拠リ至急取調、触下藩ノモノ迄取集メ、来月二日迄ニ差出スヘキノ回章ニ接ス、其ノ関係書類左ノ如シ、

二九ノ一
一以廻章致啓上候、陳ハ今日弁事伝達所より御呼出ニ付、

罷出候処、官掌伊東民之助殿を以、御渡ニ相成候、諸侯隠居・嫡子方官位ニ就候年号月日、至急御用ニ御座候間、早々取調書出候様被仰出候、就てハ来月二日迄ニ御藩ハ勿論、其触下ニも御取集、備前藩へ御差出可被成候、尚廻章御見納より同藩江御返却可被成候、以上、

月番　郡山藩
備前藩
紀州藩

三月廿九日

薩州様
外諸侯方略す
右公用人中様

雛形

一年号月日　隠居
官位　姓名
年齢
同　嫡子
同　姓名
年齢
居住何国何所

右触下江明日中此方江書出候様、廻達いたし置候事、

三月晦日

二一九ノ二
一隠居・姓名・年齢等早々可申上旨、御達之趣承知仕候、〔朱〕「御届済」
実父嶋津中将年齢等、於爰許相分兼候付、京都表江申越置候間、往復迄御猶予可被下候、此段申上候、以上、

御官名公用人
田中清之進

巳四月二日

弁事
御役所

〔朱〕「巳四月六日京都へ申越候事」

右触下共都て六通、備州藩へ差出候事、

巳四月二日

二二〇　神奈川県知事寺島宗則ヲ参与ト為ス

三十日、神奈川県知事寺島宗則ヲ、参与ト為ス、

〔本文記載なし〕

二二一　軍務官判事森有禮、租税ハ米金何レニテモ随意ニセン事ヲ公議所ニ建議ス

此月、軍務官判事森有禮金之丞上下実名ヲ一定シ、租税ハ納入者ノ便宜ニヨリ、米金何レニテモ随意ニセシメラレンコトヲ、公議所ニ建議セリ、

租税之議

第一　以来収租ノ儀ハ、米納・金納其便宜ニ従ヒ、勝手次第其収メ人ノ意ニ任ス可キ事、

第二　以来定額租税ノ外、新規租税取立ノ儀ハ、公議所ノ公議ヲ経サル向ハ、可為厳禁事、

第三　右定額増減ノ儀モ同断ノ事、

右存外ノ侭建言仕候間、御評議ヲ奉乞候、

三月

軍務官判事

森　金之丞

公議所

御中

〔稿本表紙〕

明治二年
四月

忠義公史料　四

〔稿本にて補正〕

二三二　太政官ヨリ戸籍取調・小学校設立・商法司廃止・徴兵帰休ノ件等ヲ達ス

四月小二日、東京ニテハ、太政官ヨリ戸籍取調ノ件、諸道府県ニ洽ク小学校設立ノ件、商法司廃止ノ件并ニ徴兵帰休ノ件等ヲ廻達アリタリ、其ノ達書左ノ如シ、

達書

戸籍は治道之基ニシテ、凡百之
御政事是ヨリ不生ハ無ク、戸籍不明ニ候ては、教化仁恤之道も不相立、誠ニ以て緊要之事ニ候、就ては斯ク
御一新相成候上は、猶更府藩県ニ於て不可帰之地、不可入之人ハ無之筈ニ候処、永ク無籍戸外之者有之候ては、率浜之儀ニも戻リ、第一御施行之道不相立、蒼生之疾苦目前之事ニ候、依之戸籍之儀ニ付、先般ヨリ追々
御沙汰も有之、畢竟一夫一婦も不得其所者有之候ては、
御一新之
御主意ニ戻リ不相済ル儀ニ付、御取調之上無産無頼之者は、成丈ケ其所を得候様、順次ニ御世話可被遊と、深き
思食ニて、戸籍御取調之事被
仰出候儀ニ候得は、於府藩県尚亦無籍戸外之者ハ、夫々入籍帰籍各為得其所候様取計可申、乍併不得止之儀ニて、帰籍入籍難致者等は素より、一朝一夕之事ニ無之、右等之者ハ訴出候ハヽ、各其情実ニ任セ、至当之
御処置被
仰付候儀は、不及申候処、間ニは
御主意取違之向も有之哉ニ相聞へ、以之外之事ニ候、向後尚又府下末々之者ニ至迄、厚ク
御主意を奉体認、心得違之義無之様、無洩可相達旨、

御沙汰候事、

三月　　行政官

一庠序之教不備候ては、政教難被行候ニ付、今般諸道府県ニ於テ小学校被設、人民教育之道、洽ク御施行被為在度　思召ニ候間、東北府県速ニ学校ヲ設ケ、御趣意貫徹候様、尽力可致旨被仰出候事、

但学校取調トシテ、東京学校より人撰を以、被指向候間、商議可致事、

三月〔二十三日〕　　行政官

一自今商法司被廃候事、

右之通被仰出候間、為心得相達候事、

三月〔十五日〕　　行政官

一兵制御変革之儀も有之候付、徴兵一ト先帰休被仰付候得共、石高ニ応し差出候軍資金之儀は、是迄之通上納可有之候、此段更ニ申達候事、

但徴兵帰休被仰付候ニ付てハ、未タ徴兵差出無之藩々ハ、先差出ニ不及候事、

三月〔十七日〕　　行政官

右四通、四月二日弁事伝達所より御呼出、官掌圓城寺愛之允を以御渡相成候旨、忍并土・水戸藩より之廻状到来ニ付、長州藩江順達触江(ママ)も相達候事、

二二三　藩庁海軍学生ニ在職中扶持米四石給与スヘキコトヲ達ス

三日、藩庁ニテハ本来ノ海軍学生ニ、在職中扶持米四石宛ヲ給与スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一本海軍学生在職中、御扶持米四石之割を以被成下候条、軍務局総裁江申渡、向々江も可申渡候、

明治二年巳四月三日　　知政所

二二四　藩庁買物方蔵ヲ進物蔵ニ合併シテ、諸財蔵ト改称ス

四日、藩庁ニテハ、従来ノ買物方蔵ヲ進物蔵ニ合併シテ、諸財蔵ト改称シ、来月一日ヨリ実施スヘキニヨリ、簡易正確ニ施行スヘキ旨ヲ、会計局総裁其ノ他ニ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一御買物方蔵之儀、進物蔵江合併ニて、同所江転局被仰付候、左候て以来諸財蔵と相唱、来月朔日より金銭其外諸物入払、双方蔵役人等相混し、互ニ可致取扱候、尤当時相勤候人数は当分通ニて、来午三月交代より、蔵役人其外人員減少筋致吟味可申出候、就ては第一簡易ニ基、万端不締之儀無之様取扱可致旨、会計局総裁江申渡、可承向江も可申渡候、

明治二巳四月四日　　知政所

二二五　英医シーボルトノ三田大圓寺寓宿願ヲ謝絶ニ付、外国官ヨリ再度交渉アリタリ

東京ニテハ、曩時外国官御用係北代忠吉ヨリ、英国医師シーボルト(von Siebold)ヲ、芝区三田大圓寺菩提所内座敷ニ、寓宿セシメ度旨ノ交渉アリ、京師ナル家老ノ指揮ニテ謝絶シタルニ、コノ日更ニ外国官ヨリ交渉アリタリ、ソノ関係書類左ノ如シ、

外国官
御用掛
北代忠吉

右は、外国人シーボルトと申者、旅館として大圓寺江〔朱二本文令承達、大圓寺之儀不容易場所柄之事候付、程能断切相成候様、都合御召置相成度趣、御同官判事衆より申来、何分急速否能可取計候、別紙差遣此旨及返答候、以上〕以書面申聞候様との事ニ付、条合相応ニ相立、是亦書面を以返答仕候処、別紙之通亦候懸合御座候間、私直参館右忠吉江面会、御一新後之儀故、是迄之振合を以御断申上候ては、不都合之訳ニも可有御座候得共、旧幕府よりも屢借渡之儀、達相成候得共、於弊藩は至て大切之場所ニ付、右事情汲取相成候様との趣意を以、断切相成候、末々之儀ニ御座候得は、鄙官之私独決を以、御請仕候訳ニは難到、いつれ京都亦ハ御国許江懸合、差図之上ならてハ御答申上兼候間、夫迄之処ハ御猶予相願度、乍此上押て御召入相成、万一不都合相生候ては、申訳も無之旨巨細申述候処、委細致承知候、申立之趣尤之儀ニ付、何分報知次第猶可及御届旨申聞候間、自今いつく迄も御断可相成とは奉存候得共、形行申上候付、何分被仰渡度奉存、別紙相添此段申上候、

以上、

正月廿九日　　内田仲之助

主殿様

一御復書之趣致承知候、然ハ過刻何分大圓寺一円之文言ニ相認候ニ付、御指支之御答御尤と存候、右は全左ニ無之、シーホルトなる者指置度存候は、寺内ニても住持之居間並其廻リ之席ニ有之、過日已ニ当官より一人同所江指立、寺内及見分候処、出入等も裏手門よりいたし、表門玄関等之昇降等は、常ニ致候訳ニ無之ト申事ニ候、住持上京之留守ニて、役僧江之対談いたし候由候処、一円惟御菩提所と申訳ニ有之故、今一往打返及御尋問候ニ付、早急御詮議有之度存候也、以上、

正月廿九日　　外国官判事

薩州

公用人中

尚以本書之通ニ付、尊藩君公御入等有之候共、御障相成候間、席(ママ)ニも無之様被存候、又御復書中自然葬式之節等、指支候様被申越候得共、是亦何之御邪魔ニも不相成候様被存候付、御詮議之為申入候也、

「本(朱)文、無余儀申立候趣は難留置候事」

一三田大圓寺内座敷之儀、於其藩無余儀事情縷々申出候趣も有之候得共、今般英館付医師寓宿願ニ相成、同館最寄適宜之場所無之、公使館近辺相隔候てハ、於朝廷御不都合之廉有之候ニ付、公使館造営迄之間、暫時之儀ニも有之候ニ付、裏手之方座敷一構今般御用ニ相成、前条医師住居御許容相成候間、相当之宿料彼之方より差出筈ニ付、是等之談判之儀は、住僧亦は其藩公用人ニて、程能取計可有之候事、

但本文之趣は、英国医師よりも引合候儀も可有之候付、為念此段も申達置候、

四月四日　　外国官

嶋津少将殿

公用人中

二三六　外国官判事町田久成・中井弘ヨリ、外国交際ニ付近来ノ事情ヲ報道ス

コノ日、外国官判事町田民部(久成)・中井弘蔵(弘)ヨリ、外国交際

ニ付、近来ノ事情ヲ報道セリ、ソノ文左ノ如シ、

外国交際ニ付近来之始末

太政官

一悪金鋳造（弐歩金大凡拾壱品）

但旧幕より引続鋳造相成、去年御一新以来、貨幣局ニおゐて鋳造之分至て疎悪之品のよし、右取束ね外国人の手ニ落ちたる高、大凡三千万両、此償金大凡六百万両余、

一長州下之關償金三百万両之払、残高百五拾万両、

一横須賀製鉄所を請返し、横濱運上所を質入せし高大凡五拾万両、

一貨幣局引追高、英商江借用金大凡百万両、外ニ外国人拾弐人余江約束せし金銀地金調文高不詳、

右之払方、方今外国官ニおゐて談判最中ニ候事、

一耶蘇一条

但五嶋之始末、

右追々談判程能相調候央ニおひて、此節〔時存〕横井参与殺害之攘夷輩京攝間ニ蔓延し、攘夷之説を盛んに主張せし風聞、各国公使江伝知せり、

一御発輦東京江

幸相成、天下之諸侯を会合し、国是御確定、政府之御基礎相立候付、攘夷輩不承知ニて、水口迄百五拾人計御発輦を留め奉り候事、

一横井殺害之輩寛仁之御沙汰ニて、死一等を御寛免之風聞之事、

一攘夷輩追々東京へ入込、潜伏之事、

右数条ハ各国不審ニ相考、用心いたし居候事、

一右数ケ条を以て見る時ハ、政府の威権なきハ必然なり、

一三月廿一日、英岡士夫婦馬車ニて、大森辺を過ル、非蔵人何某抜刀、夫婦を馬車より引卸せり、

一廿三日、硬鉄船船将外一人、馬車ニて過ル、供奉前駆の隊より抜刀引卸せり、

一細川〔慶順〕中将英公使と行違ひ、高輪辺道路互ニ相譲り合通行之節、小姓体の者已ニ引卸さんとせしを、公使ハ軽ふして其場を立退けり、

一佛国書記を横濱にて打擲せり、

右之事件ニて、悪金償金等之事破れ、英公使ハ去ル朔日大限〔重信〕・宇和嶋〔伊達宗城〕両人面会、交際不相調を公使より申出たり（細事ハ、不記）（実則）

一昨日徳大寺卿〔蜂須賀茂韶〕・阿州公、

主上御使ニて公使江面会あれとも、更ニ不聞入、
一大隈・宇和島両人ハ、今日横濱江出張、各国へ面会之筈ニて発足せり未一左右不相分、
一刑法官・軍務官等右引卸人を探索、少々手掛り相分り候事、

巳四月四日

外国官判事町田民部、中井弘蔵より申越候形行、

二三七　藩庁方限支配ヲ廃シテ徇達ヲ置キ、両丸ノ番人ヲ廃シテ検事ヲ置クコトヲ達ス

五日、藩庁ニテハ従来ノ方限支配ヲ廃シ、徇達ヲ置キ、二人宛交代ニテ番所ニ日勤シ、布達及ヒ守衛ノ事ニ当ラシムベク、又両丸ノ番人ヲ廃シ、二ノ丸ニ検事一人ヲ置クベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一徇達

右は、是迄方限支配被廃、以来方限分を以右之通被召建候条、御番所江致日勤、御布告之趣は無遅滞方限中江徇達行届候様取扱被仰付、且殿中見締被仰付候間、是迄之御番人同前昼夜不明様、両人ツヽ繰廻を以可相勤候、尤依事は詰之検事江も引合可相勤候、

但徇達之儀九等ニ被召建候、

一両御丸当分之御番人は被廃候、
一検事壱人

右二丸御番所江昼夜不明様詰被仰付候、
右之通被仰付候旨被　仰達候条、向々江可申渡候、

明治二年巳四月五日　　知政所

二三八　大圓寺ヲ外国人ニ貸渡ニ付田中清之進ヨリ知政所ヘ届書

一外国官より御達之儀有之候間、内田仲之助江唯今罷出候様、去月廿九日申来、私被差出候処、御用掛宮本小一郎出会、高輪大圓寺先達て外国人旅宿之義御沙汰相成候処、於其藩再応差支候趣は致承知居候得共、当時柄外国人を町家江差置候ては、不締ニも有之上、第一於東京府も故障筋有之候付、脇方江引移候様行政官より御達相成候処、ミニストル宿隔絶候ては不都合ニ付、同所之義ハ地続之事故、借受度頻に申出候、就ては僧坊之内一郭之内なから外郭之様取計、

太守様御出府之上、
御参詣被為在候ても、聊差支無之様可致候間、是非貸渡候様、勿論於其藩如何様差支候ても、
朝廷御用と相成候得は、致方無之筈ニ候得共、左候ては双方共旁不宜候付相談候、且重き御菩提所之事ニは候得共、諸藩ニも同様御用ニ寄り、貸渡相成候場所も不少様承候付、得と仲之助江も申聞候上、何分可及御挨拶趣ニて引取、則日別紙之通申遣置候、然処昨日別紙之通御達相成候間、最早此上御断相成候筋合も無之候付、別紙相添此段形行御届申上越候、以上、

四月六日　　田中清之進

知政所

一右付宮本小一郎へ之返答は、雑留ニ有之、
一外国官より御達之趣は、御用帳ニ有之、

二二九　田中清之進・内田政風ヨリ藩庁へ報知書

六日、東京ニテハ、田中清之進・内田仲之助ヨリ藩庁ニ、去ル四日、町田氏等ヨリ報告ノ外国交際ノ事情、其ノ他種々ノ事件ヲ報道セリ、其ノ報知書左ノ如シ、

〔朱〕「四月六日町便より左之通」

一過日より外夷交際之一条、色々風説、且細川・久留米・備前・因州并浮浪等、攘夷之説紛々喧敷承申候間、探索仕候得共、聢と為仕儀不承得候間、中井弘蔵・森金之丞等江問合申候処、昨四日町田民部・弘蔵同道ニて差越、別紙弐通之件々承得申候、実ニ不容易次第ニ付、今日午刻より京都御屋敷迄三日半仕立町飛脚を以持届ケ、京都より御国元迄至急相達候様申越候付、届次第被達　御聴候儀共、宜敷御執計可被下候、尤今日後之儀模様次第、猶委細承得、弥切迫之形勢ニ罷成候ハヽ、近日中詰合之中壱人差立、事情具ニ可申上候、此旨早々申上越候、已上、

巳四月六日　　田中清之進
　　内田仲之助

知政所

右之別紙壱
　四月四日ノ部ト同文故略ス、
別紙之弐
一耶蘇之儀は、五嶋ニて相修候者を無理非常之罪ニ所、且仏体を砕き候由、其内遁出候もの外夷へ相通し、夫

より事起、彼申には、譬ハ此御方ニて伊勢大神宮を自
侭ニ取扱候ハヽ、傍観ニハ堪ましく、我耶蘇之教も同
様也と色々強弁之趣ニ相聞申候、
一御発輦ニて前晩非蔵人口迄参入奉止ル者共、色々御諭、
終ニ為魁者両三人供奉被　仰付候得共、十津川人百五
十人計水口迄追上ケ、猶奉止候得共、終ニ御採用無之、
一廿三日英硬鉄艦船将云々之儀、引卸候て、鞭を以船将
之帽子を放上候処地ニ落、乍漸夫を取、直様横濱ミニス
トル館江差越、甚立腹鳳輦御行在迄罷出、不法を言上、
御所置無之内ハ可奉押止旨、且ミニストル日本政府と
同意なる故、屢々無礼ニ可及、英国之恥辱と相迫り候
付、無致方ミニストル出府、様々難題申立、于今帰横
不致、乍併御着輦迄相待候様、乍漸談付為相成旨ニ御
座候、夫より弥事切迫ニ相成、談判も相断候趣ニ御座
候、
一細川此節は三大隊を列出府、頻ニ攘夷を唱、脱賊江粮
米を送たるよし、風聞ニハ久留米も同意、是ハ外夷よ
り申上たるよし也、
一彼より申立候趣大意、
御一新後于今至り事挙らすのミならす、或ハ悪金を製
し、或ハ虚言をいひ、或ハ内外之人を暗殺し、且不法
之振舞屢也、悪金之儀は分離いたし候処、此通也と吹
分て現品差出候よし、左すれハ我損幾莫ニ及、然ルに
是等之所置も埒不明、且攘夷を唱ゆるもの、脱艦之征
討も出来せす、政府政権を失したる確証也、其上外国
人を軽蔑し、更ニ礼法を不知、一艦之船将ハ我之重臣
也、其侭ニては、我政府ニ申訳不相立、又日本ニは和
魂といふ甚尊き訳有之由なり、夫は本来攘夷家ニて、
国を誤ル之賊、先第一ニ虚言、第二人を暗殺、第三悪
金を製し、第四期限を失忘する之類、是外国人の見る所
也、依て彼等の胸を裂魂を見度、ケ様ニ不義無礼無不
行所ニ出てハ、国民之不便見ルに不忍、迚も其侭ニて
は、公法ニおゐて不相済候間、断然交を絶候也、左候
て我政府江急を告ん為、既ニ発船さする也と大ニ激論、
誹謗有之と也、依て徳大寺・阿州ニも面謁を断、寂と
して礼ハ不失趣承得申候、
一刑法・軍務之両局より、横井を殺害いたし候党、且御
当府江潜伏之攘夷家を召捕、早々御所置相成候様申立
候由、且船将を引卸候ものゝ手懸も、少し相分候と之
趣ニ付、追て可申上候、細川も追返し、夫々御所置有

之候様、評議紛々と承申候、是又追て可申上候、

一町田・中井見留、此末断然御国基相立、箱館御鎮定、且激徒不義不法者悉く御所置急々相済、政権屹と実効相立、夷より間然するなきニ至らハ、十ニ一ニハ穏ニ可相成哉、国債之難事も有之、何とも見留兼候と、実ニ忙然之容体ニ見受申候、

一森金之丞見留事柄ハ、大意相変儀無之候得共、見込相違之廉、今外夷ニ、英程懇切を尽すの国なし、御一新已後、

朝廷江屢力を奉添、頻ニ事之挙ルを待遠ニ奉存候処、豈計哉、我ニ報ルニ不法不義をなし候を、於政府是を征するの兵威もなく今日を過す、依之激怒ニ不堪、断然交を絶と大ニ威張候得共、実ハ彼カ目よりハ小児之如き振舞を相励し候底意ニて、一日も早く事之挙ルやうニ責ル之一助なる気味あるべし、乍併今事を失せは弥正実交を絶へし、交を絶ハ国債を又責へし、依テ急ニ手を付暴を鎮定せは、事無事ならん、外各国ハいまた英程懇志なる国なし、只傍観して我のするを見るもの也、尤失礼之廉なけれハ只国債の難のミ、英交を絶ハ各国亦絶ツへし、然ル時ハ実国体累卵の如しと申居候、

一薩一大隊之常備あるときハ、攘夷の説も興らす、激徒常ニ屈すへしとの論頻なるよし、冀ハ御差出ニ相成度御事ニ御座候、決て浮きたる謀言ニ無之、心術如斯之事情と承申候、是ハ御見合ニ申上候、

右銘々之咄一々難取覚候得共、大意右之次第ニて、森咄之方正なる様ニ被察申候事、

二三〇　本藩精兵六百人東京警衛トシテ至急出張セシムヘキヲ達ス

七日、東京ニテハ、軍務官ヨリ本藩精兵六百人、東京警衛トシテ、至急出張セシムベキ旨ヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

御官名

其藩精兵六百人、東京警衛申付候条、至急出張可申付候事、

四月　　軍務官

「〔宋〕本文ニ付大村益次郎江承合之趣は雑留ニ有之」

軍務官より御呼出ニ付、時任清左衛門召出候処、権判事曽我準蔵を以被相渡候、左候て当時一統疲弊之折柄

ニは候得共、世態無拠事情有之候付、至急出兵可申付、就ては御賄等は
朝廷より御渡可相成、尤藩々ニおゐて、兵隊組合之多少も可有之候付、二三十人之過不足は不苦候旨、口達を以申聞候事、
但長州様江も御同様御達相成候由承届申候、
巳四月七日　田中清之進
「(宋)右付御国元へ申上候趣は、知政所留ニ有之」

二三一　英医シーボルト大圓寺貸用条件ヲ破リタルヲ以テ交渉ス

八日、東京ニテハ、曩時外国官ヨリ交渉アリタル英国医師寓宿ノ為メ、芝大圓寺内座敷借用ノ件、本日条件ヲ附シ区画ヲ定メテ貸用セシムルコト、セリ、後数日ニシテ英人其ノ区画ヲ破リタルヲ以テ交渉ヲナセリ、其ノ関係書類左ノ如シ、
「(宋)本文知政所へ申上越候趣は、知政所問合留ニ有之」
一弊藩菩提所芝大圓寺方丈一郭囲切、今般御用相成英国人江御借渡相成候由ニて、昨七日双方立会見分之上、図面を以致談判候分、於弊藩差支之廉無御座候、就てハ左之通御当官迄定約書差上候付、逗留之英国人江御達被下、左之条々違背不仕様、被仰渡置被下候様仕度候、
一、当巳六月中借渡之事、
但無御拠御月延相成候ハ、其段御達相成候様仕度候、
一、家作其外逗留中万一模様替いたし候共、引払之節ハ、本形通ニて仕直し可差返事、
一、逗留中寺内囲内江猥ニ踏入申間敷事、
一、不依何色御当官江無届ニて、寺僧へ直談判無之様いたし度候事、
一、寡君参詣且法事等有之節ハ、御当官へ御届可申上候付、早々逗留之者江御達被下候様仕度候事、
右之通約定仕置度御座候間、其段御達、御受之否弊藩江も承知仕置度奉存候、別紙図面相添、此段申上候、以上、

嶋津少将内　隈元敬一郎
巳四月八日
外国官

御役所

口上覚

英国人江借渡場所仕切之屏、去ル九日御屋敷より御立被遊候処、昨夕方英国人四人参り候て、表御門通行之場所仕切ニ相成居候処之板屏、破却仕候間、此段申上候、以上、

大圓寺

巳四月十二日　副司

右之通申出候付、左之通外国官へ差出候事、

一一昨十日、隈元敬一郎参館、御役向之御方江御逢申上、当方より囲方之儀及御引合候処、誰様そ御出役可被成旨御答ニ付、其侭差越、御待申上居候得共、御出役無之、図面朱引通囲方いたし置候処、昨十一日夕方異人参り、別紙寺僧より申出通ニ破却仕候よし、一応之引合も無之、甚以不得其意次第、何分難捨置御座候間、屹と御尋之上否承知仕度候事、

一右破却之囲辺へ門戸相立候哉之趣も、大工共より寺僧江引合候て、是亦申出候、是以初発より右等談判為仕義ニ無之、一円難得其意候間、御尋之上否承知仕度御座候、

右之通伺上候間、急速異人御引合、当方安堵出来候様、御所置奉願候事、

右外国官権判事都築荘蔵（字和島藩士）江面会、右事件ニ付ては追々歎願も可申上候間、何分至急御尋之上、否承知仕度旨演説之上、差出候処、直様当官より一人彼方へ差越、糺明之上、何分御達可相成旨、右荘蔵より時任清左衛門承届候事、

巳四月十二日

二三二　外国人ニ対シ暴行ヲ加フルヲ禁ス

コノ日、東京ニテハ外国人ニ対シ、暴行ヲ加フベカラザル旨ヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

巳四月九日便御国元へ申上候事、

一去月廿一日、同廿三日、品川且大森辺ニ於て、外国人を暴ニ馬車より引卸し、剰刀を抜候様之挙動有之、且其前も道を譲り扣へ居候英吉利公使を、差留候もの有之、又横濱表於て路上佛蘭西人ニ対し、無謂打撃いたし候者屢有之、右は是まで度々被仰出候趣を不相守、道路ニ於ては往来之半を譲り通行

可為致旨、御布令之処、前書之始末、第一
朝命を軽し、現在
御国難を曳出候所業ニ付、以後尚又屹度相心得可申、
若此後違背之輩於有之は、当人は勿論其主人ニ至迄、
屹度厳重可被処旨、
御沙汰候事、
右之趣兼て心得之為、文武之官員は勿論、府藩県末
々ニ至迄、不洩様可相達事、
四月〔四日〕　行政官
右弁事より被相渡候旨、月番三藩より廻状到来候
事、
巳四月八日　田中清之進

二三三　戊辰丸乗込ノ本藩兵破船上陸後、脱賊ヲ降伏サセ盛岡藩ヘ引渡シタル旨ヲ届出ツ

コノ日、又東京ニテハ本藩兵ノ戊辰丸ニ乗込ミ、函館ニ赴キタル兵士等、去月廿五日、南部宮古ニテ破船ノ為メ上陸シ、青森通行ノ途中、破艦上陸ノ脱賊ニ出会シ、七拾壱人ヲ降服セシメ、盛岡藩ヘ引渡シタル報知アリシ旨ヲ届出デタリ、其ノ届書左ノ如シ、

二三三ノ一〔朱〕「本文四月九日便より御国許江も申上候事」

弊藩兵隊之内戊辰丸江乗込之人数、去月廿五日之戦争ニ船艦相損、無拠弐拾五六人直様上陸、同日旧南部領通行、青森江差越候途中、脱賊百人計、破艦ヨリ上陸仕候ニ出逢候付、致追討、七拾壱人内異人壱人降伏ニ付、盛岡藩江引渡置候段、急報相達申候間、別紙名前書相添、此段御届申上候、以上、
御官名内　田中清之進
四月八日
軍務官
御役所
本文御用掛リ吉田傳衛江差出候事、
姓名略ス、

二三三ノ二
一同月三廿五日朝六字、港口江蒸気船一艘相走リ、港内相調居候処、弥入津御軍艦甲鐵丸之様ニ乗掛候故、互ニ砲発ニ相及候処、拙者共乗船戊辰丸は外船より少し港口江相掛居候故、賊船より厳敷相撃れ、手負死人六七人ニ相及候、然処味方之船は皆蒸気不相立、賊船自由

ニ砲発、八字ニは逃去候、味方漸々八字過ニ蒸気相立候故、春日丸其外都て追掛候得共、拙者共乗船は数丸相受、船相損出艦出来兼候段、阿州船将より相断候故、早速軍務官人数江引合、陸地昼夜陸路兼行、青森表江可至と申談、速ニ揚陸、今晩二字接待ニ着陣候事、此時戦死島田市次郎、手負内藤直太郎・夫卒仁助也、

一同廿六日六字、接待発軍、大蘆江着陣、則諸所江斥候差出シ候処、賊船一艘当沖ニおゐて春日丸より撃沈メ、賊は百人余り乗陸行方不相知候故、尚又斥候トシテ川畑吉次郎・宅間善助差出候事、

一同廿七日五字、大蘆発軍、沼之袋江九字着、村役人呼出シ、脱賊之行衛相糺候得共、一向不相分候故、役人両人ヲ搦取普代駅と志し、一里計発軍之処、斥候ニ差出置川畑・宅間走帰り、賊は既当普代村ニ昨日より滞陣之由、然共良々降伏之様子ニ相見得居段、依之又々兵を沼之袋江引揚、一先賊之方ニ降伏相勧タル方可然と一決致候事、

一同廿八日五字、賊へ降伏相勧メ候次第、軍務官所届書之通り、

軍務官江御届書

覚

此度三番兵具隊之内、兵士廿五人阿州戊辰丸江乗艦被仰付、宮古港江碇泊之処、去月廿五日朝賊艦襲来、戦争之砌、乗艦被相痛、青森迄は渡海出来兼候段、慥ニ船将より承届ニ付、直ニ兵隊は上陸仕、陸路兼行罷通候折柄、賊艦之儀も及大破、陸地江逃登候様承候ニ付、斥候又は探索方として諸所江差出申候処、同廿七日盛岡領之内普代村江屯集之由、然共既ニ進退相極居候段、斥候より報知御座候故、直ニ兵隊之儀は沼袋江繰込降伏相進候処、無異儀帰順仕候段申越候、依之同廿九日十字普代村江押寄、所持之武器不残取揚、姓名等相糺候処、左之通ニ御座候、

古川節蔵
小笠原賢蔵
西村眞蔵（イ直）
大澤亀之助（イ津）
松村金七郎
辻勇五郎
横田佑之助（イ佐）
吉田金次郎

明治2年(1869)

加藤幸蔵
脇屋直三郎
喜多川常蔵
小村泉九郎
垣屋慎蔵
長川勘次郎
伊藤東太郎
名村一郎
谷地洋及(イ津)
井上政治(イ改)
石井八彌
大久保藤十郎
新嶋與平次
四宮武三郎
渡邊千之助
松井平助
關本瀧太郎(イ次)
野間勘助
平井鋼之助
佐藤作之助

原(イ厚)録平
伊藤兵助
牧野鱗之助
四宮鐘之助
岡本英彌
細川治左衛門
武大之進(イ大)
帰山火之進
太尾左金吾
廣嶋久吉
柄堀繁次郎
加藤長太郎
伊崎眞太郎
井井源之丞(イ之)
高橋金次郎
水夫政吉
磯吉
半次郎
繁蔵

芳太郎　角次郎
次郎吉　長次郎
和作　火焚　榮次郎
啓之助　外ニ
平次郎　仏蘭西人
久米吉　コラシ
政次郎
紋蔵
重太郎
淺吉
鐵蔵
藤吉
伊之助
権右衛門
常蔵
常八
又吉
喜七
金次郎
松次郎

〆都合七十一人

右之人数は、不残盛岡藩江引渡置候付、此段御届ケ申上候、以上、

三番兵具隊
半隊長
川畑九之助

明治二年
巳四月四日

一同廿九日六字、発軍、普代江十字着、時宗寺江宿陣、賊之頭立候モノヘ向ひ差遣候処、古川節蔵・松村金七郎外ニ両人出ル、兵隊両側ニ侍立、監軍猪鹿倉源四郎・隊長・拙者・小頭大田平八正面、降伏相済、戎器不残取揚候処、左之通、

一スナイドル四丁
一シヤフル拾壱挺

一短筒　六挺
一長タイフ　弐丁
但弾薬共

二三四　芸道ヲ以小姓与等ニ被召出者并郷養子ノ者尓来分地別立高上リ等ヲ許可ス

コノ日、藩庁ニテハ従来芸道ヲ以テ小姓与等ニ召出サレタル者、并ニ諸郷ヨリ養子シタル者ハ、三四代迄ハ分地別立高上リ等ハ許可アラザリシモ、尓来諸士同様家系ノ差別ナク許可アルヘキヲ達ス、ソノ文左ノ如シ、

一芸道を以御小姓与等江被召出候者、且郷養子有之候得は、三四代迄は分地別立并高上り等不被仰付事候得共、以来芸道并郷養子之家筋無差別、常式諸士同様分地別立高上り共被仰付候条、向々江可申渡候、

明治二巳四月八日　知政所

二三五　藩庁俸禄ノ等級ト世禄差引計算法ニヨリ明細書ヲ作リ会計局ニ差出スコトヲ達ス

コノ日、又藩庁ニテハ曩時藩治職制ニテ、十一等官迄俸禄ノ等級ニヨリ、世禄ノ差引計算法ヲ定メタルニヨリ、之ニ準拠シテ其ノ明細書ヲ作リ、会計局ニ差出シ、会計局ニテ遺算ナク取計フベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一今般藩治職制御治定ニ付、俸禄之儀十一等官迄夫々等級被相定、其段は先達て申渡置通ニ候、右ニ付俸禄差引之儀相達置候得共、尚又御吟味之訳有之、尓後世禄五拾石ニて全禄被成下候儀ハ、申渡置候通ニて、世禄五拾石九斗九々迄ハ無差引、五拾壱石九斗九々は五拾壱石ニて俸禄差引いたし、夫より順々壱石々之等級ニて、九斗九々迄は同断差引俸禄相渡候様被仰付候、左候て壱斗以上之半米は一俵ニて被成下、壱斗以下之半米は不被成下候条、官職被仰付候時ニ、世禄明細書会計局江銘々可差出候、於会計局も差引算当無間違様取しらへ、御米払相成候儀共、米穀掛出納奉行江可相達候、尤明細書之儀、三日より内無間違様可差出候、当分差出置候面々は不及其儀候、

但損高之儀も、現世禄之通差引被仰付候、

右向々江可致通達候、

明治二年巳四月八日　知政所

二三六　島津久光官位昇進ニ付宰相中将ト称スヘキヲ達ス

コノ日、又藩庁ニテハ久光公（中将様トイフ）官位御昇進ニ付、宰相中将様ト称シ奉ルヘキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一中将様御事、此節御官位御昇進ニ付、以来宰相様と奉称、他所向相掛候儀は、宰相中将様と奉称候様被仰達候条、向々江可致通達候、

明治二巳四月八日　知政所

二三七　浮浪人取締ノ達旨ニ基キ其ノ後出府者ノ届出ヲナス

コノ日、又東京ニテハ浮浪人取締ノ達旨ニ基キ、其ノ後出府者ノ届出ヲナセリ、其ノ届書左ノ如シ、

一　士分　西郷助八　汾陽尚次郎　中村善之助　内田八郎次　國分才次

右は浮浪御取締ニ付、弊藩御当府滞在人数、先達て御届申上置候処、其後右之通書着仕候間、此段御届申上候、以上、

巳四月八日　御官名内　田中清之進

弁事　御役所

士分　大野周耕　田中徳之丞　鮫嶋武之助　町田陽蔵　田尻稲次郎　酒匂亀次郎　坂元勇輔　成松八之丞

植村彦五郎
坂元喜蔵
飯田春齊
斜木元春
足軽
黒田源蔵
川畑才右衛門
前田金次郎
高木淺右衛門
白石直右衛門
堀之内吉左衛門
馬渡武八
中山英治
濱田吉左衛門
高崎清次郎
川畑良右衛門
二見十太郎
黒川清助
山元直助
前田次郎次

濱田才助
川嶋耕蔵
永田戸次郎
湯田勇蔵
上村猪之丞
大磯覺右衛門

右御当地在勤又ハ諸生等ニテ出府仕候間、此段御届申上候、以上、

御官名内
月日　右同人
宛同断

右弐通、官掌伊藤民之助ヘ時任清左衛門ヨリ差出候事、

二三八　開成所入学志願者ノ願出ヲナス

十一日、東京ニ於テ開成所入学志願者ノ願出ヲナセリ、ソノ願書左ノ如シ、

一生国薩摩府下
一年齢弐拾四才

成松八之丞

一右同府下
一季齢弐拾三才
右佛学　〔ママ〕松元喜蔵
一右同府下
一右同弐拾才
酒匂亀次郎
一右同府下
一右同弐拾才
坂元勇輔
右英学
右は修理大夫家臣ニ御座候処、銘々入学之志願御座候間、御免被仰付被下度奉願候、此段申上候、以上、
御名内
四月十一日　時任清左衛門
開成
御役所
右時任清左衛門ヨリ開成所筆生大塩辨次郎へ差出候処、願通被仰付候付、来ル十七日ヨリ参官可致、尤左之通銘々持参可有之旨、申聞候事、

巳四月十一日
何ノ誰家来何役
英仏語学修業奉願候　生国　何ノ誰忰次三男厄介　何ノ誰巳年何才
右美濃紙六ツ切弐枚、

二三九　藩兵并藩主ノ上京ニテ藩邸狭隘ニ付、兵隊ノ屯所手当ヲ軍務官ニ願出タリ

十二日、東京ニテハ今般御達ニ拠リ、藩兵ノ出府并ニ藩主ノ上京ニテ藩邸狭隘ニ付、兵隊ノ屯所手当ノ儀ヲ軍務官ニ願出シタリ、其ノ願書左ノ如シ、

一今般兵隊至急差出候様、御達之趣承知仕、早速国元江急飛を以、申遣置候付、不日到着可仕候、然ニ兼て被仰渡置候趣も有之候間、修理大夫ニも自ら近々致着府候義と奉存候処、当屋敷何れも手狭ニて、多人数差置候場所無御座候間、何卒右兵隊屯所御見合を以、早々御手当被下置候様仕度、此段奉願候、以上、

御名内
四月十二日　田中清之進

軍務官
御役所
右田中清之進より差出候処、御用掛吉岡傳衛落手相成候事、
巳四月十二日

二四〇　監察局兵隊ニ紛敷行装ニテ市中ヲ徘徊暴行スル者ヲ厳重取締ルヘキヲ達ス

十三日、鹿児島ニテハ、近来末々ノ者兵隊ニ紛ラシキ行装ニテ、市中ヲ徘徊シ、暴行ヲナス者アリテ、取締ヲ厳重ニスベキニヨリ、予メ教諭シ置クヘキヲ監察局ヨリ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一近来末々之者共、兵隊ニ紛敷容貌ニて、上下市中江折々徘徊、酒屋并料理屋等江暴威を以押入、不謂所業いたし、市中動揺せしめ候者共有之旨、町役共より申出趣有之、不届之至候、依之今般取締向更ニ行届候様、夫々組合相立、分配相図を定置、右体之者有之候ハヽ、無用捨取押置、早々巡察立宿江可申出、依品は召捕差出候様、屹と厳法相立候付、乍此上右体之所業無之様、篤く心を用ひ、末々小者ニ至迄、其主人より可申付事、
但市中ニ限候儀ニ無之、近在何方ニても右体之振合有之候ハヽ、兼て取糺巡察江可申出事、
明治二年巳四月十三日　監察局

二四一　東京滞在兵隊ノ有無并人員・到着月日等取調届出ツヘキヲ達ス

十四日、東京ニテハ、東京滞在兵隊ノ有無并ニ人員・到着月日等取調、届出ツヘキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一各藩東京滞在之兵隊有無并人員・到着月日等取調、来ル廿日朝十字迄、無遅延可届出候也、
但是迄届無之向モ有之候得共、尓来東京江兵隊到着候ハヽ、屹度可届出也、
軍務官
御用掛
四月十四日
薩州藩
外略ス

二四二 藩庁学問修行ノ為派遣シタル者ノ給与ヲ三等ニ分チ給与スヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ従来学問修行ノ為メ派遣シタル者ニハ、毎月一人扶持并ニ金五両宛ヲ給与シタレトモ、尓来ハ勤勉ノ度ニヨリテ三等ニ分チ、各一人扶持ノ外ニ一等給金拾両、二等給金七両二分、三等給金五両ト定メ、給与スベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一等給料
一金拾両
二等給料
一同七両弐歩
三等給料
一同五両

右は学問修行方として被差出候人々給料被相定、月々壱人扶持并金五両ツヽ被成下候旨、被仰渡置候得共、依精不精等級不相立候ては、進達之詮不相得候故、右之通三等ニ被相定候付、登級之節は其局々ニおひて委敷致吟味申出候得は、尚又取調之上昇級可被仰付候、譬一等ニ至り居候者たり共、不精之廉有之候は、三等ニも可被相下候、尤壱人扶持之儀は食料迄ニ候得は、一二之等ニ至り候ても、相替候儀無之候、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳四月十四日　　知政所

二四三 白尾采女雇ヲ以軍艦第一等士官格ヲ命セラル

コノ日、白尾采女雇ニテ、軍艦第一等士官格ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

一　　白尾采女

御雇ヲ以軍艦第一等士官格申付候事、

四月　　軍務官

巳四月十四日御呼出ニ付、隈元敬一郎罷出候処、権判事西村完吉ヲ以被相渡候事、

〔朱〕「巳四月廿日、御国元へ足軽木藤森助便より申上候事」

二四四 藩庁世禄百石以下ノ徴士又ハ御雇ノ諸官ニ、尓後家族養料ヲ与フヘキヲ達ス

十六日、藩庁ニテハ朝廷ヨリ徴士又ハ御雇ニテ、諸官ニ任セラレタル者ハ、各々ソノ俸給アレド、家計難渋ノ者アルニヨリ、世禄百石以下ノ者ニハ、尓後家族養料米三拾俵ツヽヲ与フベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一徴士又は御雇を以、

朝廷之諸官被仰付置候面々は、資給之俸有之事候得共、依人跡家内経営難渋之向も可有之候付、世禄百石以下之者は、尓後家族御養料米三拾俵ツヽ被下置候旨、被仰達候、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳四月十六日　　知政所

二四五　重ネテ脱籍浮浪人ノ取扱ニ付明細ノ処置法ヲ達セラル

十七日、東京ニテハ重ネテ脱籍浮浪人ノ取扱ニ付、明細ノ処置法ヲ達セラル、ソノ達文左ノ如シ、

脱籍浮浪人之儀ニ付、昨年来毎々被仰出モ有之候処、今以処々流寓罷在候趣、畢竟本国復籍之途不相開、各処戸籍人別取調不行届等ニ依ルコトニテ、生民各其所ヲ得候様トノ篤キ御主意モ不相立、随テ窮迫ノ余リ、遂ニハ御政体ニ差障リ候儀ニモ可立到、甚以不相済事ニ候、依テ今般左之廉々被仰出候間、府藩県始諸采地中、急々脱籍之者悉ク本地ヘ引戻シ候様、其主宰ヨリ可取計候、自然復籍等閑ニ致置、此後流寓不所業之輩於有之テハ、総テ本地主宰ノ落度タル事ニ付、其科ニ依リ屹度咎方可被仰付候事、

一都下始府藩県戸籍人別、明細取糺可申事、

一御親兵并府県兵及附属等、是迄御用相勤居候者之内ニモ、脱籍有之候ハヽ、郷国明細取調可申出事、

但御用相勤候者ト雖モ、脱籍致居候テハ、後日復帰モ不相成、

御政体ニ差障リ候付、今度改テ本国ヘ御掛合之上、被召仕候事、

一府藩県共脱籍之者、其主宰ヨリ急速引戻シ、各其処ヲ得候様仕向ケ可遣候、自然其引戻シノ手行届兼候分ハ、姓名・年令・脱籍年月取調可申出候事、

附従前郷国之法ヲ犯シ、脱籍致候類、郷国ニ於テモ打捨置、本人モ其ノ法ヲ糺サレンコトヲ恐レ、復

籍不致向モ可有之候得共、大刑ヲ犯シ候分ハ格別、
其余ハ昨年赦罪被
仰出候事ニ付、総テ前罪差免シ可遣事、
一宮・堂上始、中下大夫・上士・社寺等、家来并采地之者脱籍致居、吟味行届兼候分ハ同様可申出事、
一府藩県共戸籍・人別取調等閑ニ打過、他方脱籍之者令潜伏、自然不所業之輩有之節ハ、其ノ事ノ大小ニ依テ其主宰ノ罪軽重ノ科可被
仰付事、
一此後脱籍之者於有之テハ、急速追捕ハ勿論、万一行方不知者ハ、最寄府藩県ヘ順達致置、姓名・年令・月日ヲ以可届出事、
右之通被
仰出候事、
四月〔十五日〕　行政官
右弐通四月十七日、弁事御役所より御渡し相成候旨、月番三藩より之廻状到来、伊州藩江順達、触下江も相達候、
〔朱〕「四月廿日、足軽木藤森助外壱人便より御国元江申上候事」

二四六　寺島宗則外国官副知事ニ任セラル

コノ日、参与寺島宗則外国官副知事ニ任セラル、〔寺島陶蔵宗則脱カ〕
是迄ノ職務被免、外国官副知事被仰付、

二四七　東郷嘉一郎雇ヲ以越後府判事試補ヲ命セラル

コノ日、東郷嘉一郎雇ニテ越後府判事試補ヲ命セラル、
其ノ達書左ノ如シ、
御官名
其方家来東郷嘉一郎儀、御雇ヲ以テ越後府判事試補被
仰付候間、此旨相達候事、
四月　行政官
弁事御役所より御呼出ニ付、時任清左衛門罷出候処、弁事平松甲斐権介殿を以被相渡候事、〔朱〕「四月廿日御国元江足軽便より申上候事」

二四八　京都警衛ノ兵士三小隊東京府警衛ニ変更

セラル

十八日、曩時京都警衛ヲ命セラレタル兵士三小隊ハ、東京府警衛ニ変更セラレ、此ノ日品川ニ到着セリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

二四八ノ一

一　御官名

其藩兵三小隊、京地御警衛被仰付置候処、今般東京皇居御守衛、更ニ被仰付候間、右兵隊早々東京へ可差出旨、御沙汰候事、

四月　行政官

右之通於京都被仰渡候旨、申来候事、

巳四月十七日

一右ニ付委細之儀は、往返留ニ有之候事、

一御国元へ申上候趣は、知政所留ニ有之候事、

二四八ノ二

一兵隊三小隊

右は、於京都御当府御警衛被仰付、海路より昨十八日到着仕候付、品川駅江滞在為致置候、猶人員等は追て可申上候、此段御届申上候、以上、

御官名公用人

四月十九日　田中清之進

軍務官

御役所

右時任清左衛門より、判事試補竹中久之助江差出候処、落手相成候事、

二四八ノ三

兵隊三小隊

隊長より兵士迄弐百六拾人

足軽并器械師九人

夫卒百四拾壱人

惣員四百拾人

右は於京都御当府御警衛被仰付、海路より到着之兵員ニ御座候間、此段御届申上候、以上、

御官名内

四月廿二日　田中清之進

軍務官

御役所

右時任清左衛門より、軍務官応接役桑原虎次郎江差出

候事、

二四九 戊辰ノ役参謀ノ西郷隆盛等ニ賞典取調ニ付管轄セシ諸兵ノ勤惰強弱ヲ録上セシム

コノ日、戊辰ノ役参謀タリシ西郷隆盛・大山綱良・伊地知正治、并ニ軍監タリシ桐野利秋ニ賞典取調ニ付、其ノ管セシ所ノ諸藩府兵等ノ諸所戦争ニ於ケル勤惰強弱ヲ録上セシメラル、其ノ達書左ノ如シ、

西郷吉之助

今般賞典御取調之儀ニ付、〔朱〕「軍監」参謀勤役中管轄之諸藩并府兵等、諸所戦争之勤惰強弱各差等ヲ附、別紙雛形江相記可差出候事、

一藩々情実之善悪労逸等ハ、別紙江可相記事、

一軍監・軍曹・御使番・会計方并金穀兵食方等、相届丈勤惰之差等、是又別紙ニ可相記候事、

前件之通被

仰出候条、至急取調言上可致候事、

四月　軍務官

〔大山綱良公文書及手簡（東京大学）にて校訂〕

大山格之助　伊地知正治

中村半次郎

右御書付銘々御渡、尤中村半次郎分朱書之通、

薩州藩

別紙之通御沙汰相成候条、以急飛国元江可相達事、

四月十八日　軍務官

右今日唯今御呼出ニテ、村山源七罷出候処、御用掛堀江提一郎ヨリ相渡候事、

一雛形ハ四枚被相渡候、

〔朱〕「四月廿日、御国元江足軽木藤森助壱人飛脚便ヨリ申上候事」

二五〇 条約国ヘ旅行志願ノ者ハ東京・大坂等ノ外国官ヘ願出ツヘキヲ達ス

十九日、東京ニテハ、条約国ヘ旅行願出ノ者ハ、許可ノ上改定ノ印章ヲ渡スベキニヨリ、志願ノ者ハ府藩県ヨリ東京外国官又ハ大坂・長崎・箱館・兵庫・新潟・神奈川外国掛役所ヘ願ヒ出ヅベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如

シ、

一自今条約済之各国江罷越度願出候者は、御許容之上御改定之御印章御渡シ可相成ニ付、右志願之者ハ、其府藩県より東京外国官并大阪・長崎・箱館・兵庫・新潟・神奈川外国掛御役所へ可願出事、

四月〔十七日〕　行政官

右弁事ヨリ被相渡候旨、月番三藩より廻章到来之事、

巳四月十九日

〔朱〕「四月廿日飛脚便より御国元江申上候事」

二五一　制度寮撰修森有禮制度寮副総裁ノ事ヲ摂行セシメラル

コノ日、制度寮撰修森有禮金之丞制度寮副総裁ノ事ヲ摂行セシメラル、

制度寮副総裁

二年四月十九日制度寮撰修ヨリ摂行　森有禮　鹿児島士

二年五月十八日廃官、取調掛被命

二五二　島津悦之助肥前佐賀ニ遊学ニ付横山正太郎ニ随伴ヲ命ス

コノ日、藩庁ニテハ、久光公御子悦之助君（久封後改忠経）肥前佐賀ニ遊学ニ付、横山正太郎安武ニ随伴ヲ命ズ、後更ニ長州ニ赴キ、翌三年ノ春ニ至リ帰国ス、其ノ関係書類左ノ如シ、

一悦之助様御儀、肥前佐賀江御遊学之筈候条、可承向江可申渡事、

横山正太郎

一右は悦之助様肥前佐賀江御遊学付、被召付候条可申渡候、

明治二巳四月十九日　知政所

二五三　藩庁軍務局ヨリ出軍実戦ニ臨ミ目下無役ノ者等ノ氏名・年令ヲ届出ツヘキヲ達ス

コノ日、藩庁軍務局ニテハ、出軍実戦ニ臨ミタル者并ニ本軍務局勤ニテ目下無役ノ者ハ、其ノ氏名・年齢ヲ軍務局調役ニ、廿四日限リ届出ツヘキヲ達ス、ソノ達書左ノ

如シ、

一出軍実戦帰陣之上、当分無役之人数、

但年輩可相記候、

一本軍務局勤ニテ当分無役之人数、

但書同断、

右人数御用見合相成候間、来ル廿四日限当局調役江可被差出事、

四月十九日　　軍務局

二五四　藩庁藩治職制ニヨリ唐通事ヲ廃ス

コノ日、又藩庁ニテハ藩治職制ニヨリ唐通事ヲ廃ス、其ノ達書左ノ如シ、

一藩治職制御治定付、唐通事被廃候条、唐通事頭取已下稽古ニ至迄、都て被免候条可申渡候、

明治二年巳四月十九日　　知政所

二五五　水本成美制度寮准撰修刑律取調専務ヲ命セラル

コノ日、東京ニテハ水本成美保太郎制度寮准撰修刑律取調専務ヲ命セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

一　水本保太郎

是迄之職務被免、制度寮准撰修刑律取調専務被仰付候事、

四月　　行政官

右巳四月十九日、弁事ヨリ御達相成候旨、御届申出候事、

二五六　触頭・触下諸侯ノ姓名等ヲ届出ツヘキヲ達ス

二十日、東京ニテハ、触頭・触下諸侯ノ姓名、並ニ在東京ノ隠居・嫡子及ヒ名代重臣ノ姓名ヲ届出ツヘキヲ、触頭ニ達セラレ、本藩ニテハ翌廿一日ソノ届出ヲナセリ、ソノ達書及ヒ届書左ノ如シ、

二五六ノ一　達書

一在東京諸侯姓名并隠居・嫡子共可書出事、

但在国之隠居・嫡子共書出ニ不及候事、

一当主在国ニ候得は、隠居嫡子重臣之内ニて、名代相勤

候者可有之候間、其姓名可書出候事、
一在国諸侯之姓名可書出事、
右之通官掌圓城寺愛之允より、口達を以伝達相成候旨、
月番三藩より回章到来候事、
月番水戸藩へ触頭より差出候筈也、
巳四月廿日

二五六ノ二 届書

触頭
在国
嶋津修理大夫〔忠義〕
詰合重臣
内田仲之助〔政風〕
触下
在府
宗 對馬守〔重正、対馬府中藩主〕
在邑
秋月長門守〔種殷、高鍋藩主〕
右長門守養子
在府
秋月右京亮〔種樹〕
在邑
伊東右京大夫〔祐相、飫肥藩主〕
右右京大夫嫡子
在府
伊東彦松〔祐帰〕
在府
内藤備後守〔政挙、延岡藩主〕
在府
嶋津淡路守〔忠寛、佐土原藩主〕
右淡路守嫡子
在府
嶋津又之進〔忠亮〕
右之通御座候、以上、
御名内
田中清之進
四月廿一日
右水戸藩へ差遣候事、

二五七 天皇百官群臣ヲ朝会シテ国是ヲ諮問シ、可否ヲ献替スヘキ詔書ヲ発ス

二十二日、　天皇百官群臣ヲ朝会シ、国是ヲ諮問シ、可否ヲ献替セシムベキ詔書ヲ下サレ、三條輔相之ニ添書ヲ附シ、更ニ口達書取ヲ以テ、意見書ハ来月四日迄ニ提出スベキヲ達セラル、其ノ詔書及ヒ添書・口達書取左ノ如シ、

二五七ノ一　詔書写

詔、朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ、天地神明ニ質シ綱紀ヲ皇張シ、億兆ヲ綏安スルヲ誓フ、然ルニ兵馬倉卒、未タ其績ヲ底サス、朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ、下ハ以テ億兆ニ慙ツ、今ヤ乃チ親臨、汝百官群臣ヲ朝会シ、大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス、是神州安危ノ決今日ニ在リ、誠ニ宜シク腹心ヲ披キ、肺肝ヲ表シ、可否ヲ献替スヘシ、朕将ニ励精竭力、大ニ経始スル所アラントス、汝百官群臣、ソレ勗哉、

明治二年己巳四月

二五七ノ二　添書

大政一新、天下更始之折柄、内外多難、深ク被為悩宸衷屢

詔勅を下され、宵旰図治被為在候処、実美短才微力、叨ニ重任ヲ辱メ未タ丕績を賛成し

宸襟を慰し、蒼生を安すること能ハす、恐懼措所を不知次第ニ候得共、

聖眷優渥御責任を蒙リ、且此度

勅旨も有之ニ付ては弥以在職諸公及ひ列侯と共ニ心を同し、力を戮せ、以て今日之計を為すニ非すんば、焉ゾ国勢を挽回し、万世之基礎を立、

皇国を維持し可申哉、今日之事実美独リ諸公列侯ニ望むのミならす、諸公列侯も亦臣子之責ニ候得は、冀クハ倶ニ

勅旨を遵奉し、各肺肝を吐露し、忌諱を不憚、

朝廷之為メ建議指画有之度候也、

四月〔二十二日〕　輔相

二五七ノ三　口達書取

今度

御国是之大基礎確立可被為在御会議ニ付、

勅詔之通被

仰出候間、各見込之処書取ヲ以、来月四日迄ニ可被差出候、尚追々箇条ヲ以テ

御下問被為在候間、此旨可被相心得候、

但別段存付有之面々ハ、参　朝可有言上事、

四月廿二日

別紙公議所ヨリ御回達相成候由ニテ、月番水戸藩外二藩ヨリ回状到来之由ニテ、佐土原ヨリ写申来候事、

四月廿五日

二五七ノ四
一今般被為召被仰出候通、諸侯見込之筋、建白致シ候者、或見込無之旨申上候者共、来月四日迄ニ、書面触頭ニテ取纏メ差出シ可申、尤別段演舌可致廉有之候欤、直ニ指出不申候半テハ、旨趣貫兼候等之儀ハ、其段触頭へ申断置、勝手次第、当人ヨリ指出可申候、

右之趣触頭ヨリ諸藩へ通達可有之候事、

月日無之

二五八　藩士肝付千早借用上地ヲ召上クヘキ達書及ヒ借用願書

二十四日、東京ニテハ藩士肝付千早、曩時本所菊川町元林昌之助(忠崇、元請西藩主)上地ヲ拝借シ居タルヲ、御用ニテ家作共召上グベキ旨ヲ達セラレ、当人ニ伝達ス、後六月七日ニ至リ、猶其侭拝借ノ願書差出シタルニヨリ取次ギタリ、ソノ達書及ヒ願書左ノ如シ、

肝付千早

本所菊川町林昌之助上地、当分拝借地御用ニ付、家作共被召上候事、

右東京府屋敷改吉元與三右衛門を以御呼出之上、時任清左衛門へ被相渡、尤当分麦作等仕付有之由ニ付、取揚次第御届可申出旨モ被相達候付、当人江相達候事、

巳四月廿四日

修理大夫家来肝付千早より別紙之通申立候間、御差支不被為在候は、其侭拝借被仰付被下候様奉願候、尤地税之儀は、当人より無異儀其御筋江上納可為仕候、別紙相添此段申上候、以上、

御名内

六月七日　　田中清之進

東京府

屋敷御改

御掛中様

一　拝借地奉願候書付

両國元矢ノ倉村松町旧幕旗下林部善一郎屋敷弐百八拾余坪之内八拾五坪也、先年より私借受、家・土蔵取立置申候、然処昨年来善一郎儀ハ如何相成候哉、無主同様之姿ニ御座候、依て私借請丈之地面は、其侭拝借被仰付度、尤並之地税上納仕可申候間、麁絵図面相添差上申候、何卒以格外之御評議、願之通被仰付候様御取計可被下候、以上、

六月七日　　肝付千早

田中清之進殿

絵図面略

右六月九日東京府へ持参、御用掛山田六郎へ差出置候事、

「御張紙」

書面、両國村松町林部善一郎上地弐百八拾坪余之内、八拾五坪御貸渡相成候、尤最寄並之地代上納可致事、

右御呼出ニ付、時任清左衛門罷出候処、東京府屋敷改鎌形次郎を以御渡相成候事、

巳八月九日

右当人へ相渡候事」

二五九　曩時延期ノ戦亡者招魂祭執行ノ旨ヲ達ス

二十五日、藩庁ニテハ、曩時延期シタル戦亡者招魂祭ヲ此ノ日執行ノ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一戦亡人数招魂祭被召延置候処、来ル廿五日被仰付候条可申渡候、

明治二年巳四月　　知政所

二六〇　白男川龍次郎昌平校雇ニ採用セラレ同教授試補副舎長兼勤ヲ命セラル

コノ日、東京ニテハ、藩士白男川龍次郎昌平校雇ニ採用セラレ、同教授試補副舎長兼勤ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

薩摩少将家来
白男川龍次郎

右ハ御雇ヲ以、昌平学校江出仕被仰付候事、

四月廿五日　副知学事

昌平官より御用ニ付、村山源七罷出候処、副知学事秋月右京之允殿より被相渡候事、

二六一　英国医師シトル雇入ヲ出願シ許可セラル

二十八日、英国医師シトル雇入ノ儀ヲ出願シ、五月二日ニ至リ許可セラル、其ノ願書及ヒ辞令左ノ如シ、

一　英医師シトル

右ハ、国元之義、医術一同未熟之義不少、今般教師ニ相頼、追々勉強為仕度、医道之義ハ無申迄、人命ニ相拘訳ニ付、此涯雇入申度御座候間、何卒御免被仰付被下候様可奉願旨、申付越候間、此段申上候、以上、

御官名内　田中清之進

四月廿八日

外国官　御役所

(朱書)願之趣聞届候、尤シトル相雇候上は、年限并月給等当官江可被申立事、

(朱書)朱書之通御付紙ニて五月二日、外国官筆生佐久間文雄より相下候事、

二六二　銃器及玉造器械ヲ英国ニ注文センコトヲ願出許可セラル

コノ日、銃器及ヒ玉造器械ヲ英国ニ注文センコトヲ、外国官役所ニ願出デタルニ、許可アリタリ、其ノ願書及ビ辞令左ノ如シ、

一アルミネ千五百挺
　但三角剣並鞘相添
一要具図面通ニテ一式相添
一右玉製造器械　壱揃
　但一日ニ五百発より千発迄之間出来之器械

右ハ弊藩為入用英国江致注文度御座候間、御免被仰付、

注文品早急相調候様御達被下度、此段奉願候、以上、

御名内　　田中清之進

四月廿八日

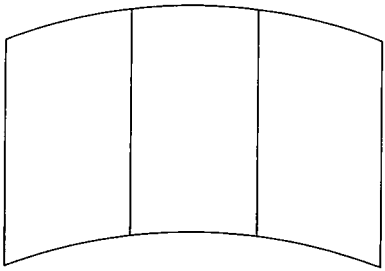
外国官

御役所

右弐通（シトル聘用ノ願書ト合セテ）外国官江持参、筆生佐久馬文雄江差出置候事、

高サ二寸二分

三十二発入



二六三　小倉壮九郎他二名昌平館入学ヲ許可セラル

コノ日、藩士小倉壮九郎・寺田平之進・吉國兵七昌平館入学ヲ許可セラル、ソノ願書・辞令左ノ如シ、

一生国薩摩府下　　小倉壮九郎

一年齢弐拾五歳

一右同府下　　寺田平之進

一右同弐拾壱歳

一右同府下　　吉國兵七

一右同弐拾八歳

右ハ修理大夫家臣ニ御座候処、入学之志願御座候間、御免被

仰付被下度奉願候、此段申上候、以上、

御名内　　村山源七

四月廿八日

昌平館

御役所

右之通差出候処、来月二日ヨリ出館可有之旨、被相達候事、

四月廿八日

二六四　島津忠義所労ノ為出府猶予ヲ願出ツ

二十九日、東京ニテハ、曩時諸侯・中下大夫・上士ニ、当月中旬迄ニ、悉ク東京ニ参着スベキヲ達セラレタレド、忠義公ハ所労ノ為メ、出府猶予ノ儀ヲ願出デタリ、其ノ願書及ヒ辞令左ノ如シ、

一諸侯其外当月中旬迄悉東京江致参着候様、兼て御布令之趣有之、御官名儀御期限通参府可致之処、此内より所労ニ付、涯々参府仕候体無之、延引罷成候間、恐多奉存候得共、快気迄御猶予被下候様仕度、左候ハヽ精々療養相加、少々ニても快方罷成次第早々参府可致段、今般国元より申付越候付、此段奉願候、以上、

御官名内

四月廿九日　　田中清之進

弁事

御役所

右弁事伝達所江時任清左衛門差出候処、官掌手塚泰助受取相成候事、

右江御張紙

願之趣被為

聞食届候事、

右弁事伝達所より御呼出付、時任清左衛門罷出候処、官掌芝野辰太郎を以被相渡候事、

巳五月三日

右付御近親様并長州様へ為御知相済候事、

二六五　軍務局ニ一等ヨリ三等迄ノ医師ヲ置クヘキヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、軍務局ニ一等ヨリ三等迄ノ医師ヲ置クベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

軍務局

一、一等医師

右六等官

同

一、二等医師

右八等官

同

一、三等医師

右十等官

右之通新ニ被召建旨被　仰達候条、軍務総裁江申渡、可承向江可申渡候、

明治二年巳四月　　知政所

二六六　藩庁地頭并副役ニ犯罪者ノ糺明・変死者ノ取扱等ニ付達ス

又藩庁ニテハ、地頭及ヒ副役ニハ其ノ所部内ノ事、大小トナク委任セラレタルニヨリ、犯罪者ノ糺明、変死者ノ取扱等ニ付テハ、糺明局ヘ引合、宜敷所置スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一今般地頭并副役被仰付、所部之郷内は、事大小となく専御委任之事候付、犯科者等糺明は勿論、科牢以下之軽罪は都て地頭捌被仰付候条、夫々糺明之上罪状委細相記、糺明局江申越候ハヽ、於糺明局科之軽重相調申遣候様可取計候、左候て時々地頭前ニて取扱被仰付候条、是迄之格護所不堅固之儀無之様取繕置、何篇御当地牢舎之仕向ニ準致取扱、遠流科以上之重科之者は、御当地糺明之上、夫々御取扱被仰付候、尤人殺其外重大之事変到来之節、地頭并副役他郷廻勤ニて不居合節は、時々廻勤先へ早速相達、速ニ差入及糺明方等、若相手者等不相知及御詮議程之事ニても、先ツ糺明局より不及差越、時機ニ依近郷地頭江も引合、一応詮議相遂、三日を経不相知節は、時機次第申越候ハヽ、糺明局より被差越儀も可有之候、左候て一通変死等ニても所役迄之取扱ニてハ、遺漏之儀も難計候付、所役任せニ不致様可有之候、併所役之儀も往々右体之御用筋も取馴、致弁別候様無之候ては、時ニ依り地頭遠方江行違、不致急埒儀も可有之候間、以来其辺之所地頭より、此涯宜処置可有之候、此旨糺明局総裁并地頭江可申渡候、

明治二年巳四月　　知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
五　月　忠義公史料　五

〔稿本にて補正〕

二六七　西郷隆盛藩兵ヲ統率シテ三邦丸ニテ出発品川ヘ到着後神田橋屋敷ヘ入ル

五月小一日、藩兵小銃隊半大隊、大砲隊半小隊、西郷隆盛統率シテ、三邦丸ヨリ出発シ、五日品川ヘ到着シ、六日神田橋屋敷ニ入レリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

二六七ノ一

兵隊惣人数
四百人余

右ハ、従国元蒸気船江乗込、昨日品川江着致し候付、弊藩屋敷内江為繰込置申候、此段御届申上候、以上、

御官名内
田中清之進

五月六日
軍務官
御役所

右時任清左衛門ヨリ、大村益次郎ヘ差出候事、

二六七ノ二

一元西尾隠岐守屋敷内江、今般屯集被仰付置候兵隊江、交代之積ニて、別紙御届申上候通、従国元兵隊着府致し候付ては、直様帰帆船江為乗込、出立為仕度御座候間、別段御用も無之候ハヽ、急速御暇被下候様奉願候、此段申上候、以上、

御官名内
田中清之進

五月六日
軍務官
御役所

右軍務官副知事大村益次郎ヘ、時任清左衛門より差出候処、御張紙ニて御用掛小國覺之助を以、御渡相成候事、

巳五月六日

〔朱〕
「願之通帰国休兵不苦候事」

二六七ノ三
一白米三拾六石七斗弐升
五月五日より十九日迄日数拾五日分、壱日壱人ニ六合ツ、
一金三百八拾弐両弐歩
日数同断、壱日壱人ニ金壱朱ツ、
惣人員四百八人
右ハ従国元海路通行一昨五日致着候段ハ、御届申上置候、就ては兵食等、右之通御下渡被下候様奉願候、以上、

御官名内
五月七日　田中清之進
軍務官
御役所

右村山源七より御用掛桑原虎次郎へ差出候処、金米共会計方より被相渡候事、

二六七ノ四
一白米弐石弐斗五升
五月五日より十九日迄
日数拾五日分、壱日壱人ニ六合ツ、
一金弐拾三両壱歩三朱
日数同断、壱日壱人金壱朱ツ、
惣人数弐拾五人
右は先達てより諸生等ニて致出府居候処、此節兵隊之内江隊入申付候間、本行之通兵食等御下渡被下候様奉願候、以上、

御官名
五月十九日　村山源七
軍務官
御役所

右村山源七より御用掛小國覺之助へ差出候処、米金共ニ会計方より被相渡候事、

二六八　島津忠義函館表出軍中ノ黒田清隆参謀ニ慰問書ヲ贈リ酒肴料ヲ賜フ

コノ日、忠義公函館表出軍中ノ黒田参謀ニ宛テ、慰問書ヲ贈リ、酒肴料ヲ賜ヒ、軍隊ヲ慰問セラル、ソノ慰問書左ノ如シ、

其表之形勢如何と日夜難忘候、遠地之出軍万事心配之筈存候、就ては無申迄も候得共、為　皇国大事之場合候間、此已来弥心力を尽し、速ニ鎮撫之術策相立度事ニ候間、猶一同江も右之趣意可申聞候、依て乍聊酒肴差送候間、慰戦労度願存候、以上、

五月朔日　　(島津)忠義

黒田(清隆)了介へ

二六九　黒羽藩邸ニ野津鎮雄・大山巌ヲ遣シ、會津征討中諸事周旋ノ礼ヲ述ヘ琉球布ヲ贈ル

コノ日、東京ニテハ、湯島天神下ナル黒羽藩邸ニ野津鎮雄(七左衛門)・大山巌(弥助)ヲ遣シ、會津征討中諸事周旋ノ礼ヲ述ヘ、琉球大布三反同小布弐反宛ヲ贈ル、其ノ書状及ビ目録左ノ如シ、

朔日、薩州侯ヨリ御使者野津七左衛門・大山彌助ノ両氏、東京湯島天神下ノ邸ヘ遣サレ、左ノ書翰ヲ齎セリ、

一筆致啓達候、御勤精弥御多祥、珍重奉存候、陳は先般賊徒御征討ニ付、弊藩人数其御地辺出軍中は、万端懇切預候処、王事速ニ其功ヲ奏シ、恐悦不過之候、右御礼為可申進使者差立、捧愚札候、目録之通致進覧之候、恐惶、

五月朔日　　島　修理大夫

大泰次郎(大関増勤)様

目録

一琉球大布　三反　　一琉球小布　弐反宛

大沼渉・安藤小太郎・與野鐵太郎・瀬谷角之進

(右小林華平日記)

會津征討ノ時ハ、其藩ノ本営

大沼　安藤　瀬谷

二七〇　燈明台建造ノ為英人ブラントン佐多岬到着スヘキニヨリ、便宜ヲ与フヘキヲ達ス

二日、東京ニテハ、燈明台建造ノ為メ、英人ブラントン来月中旬頃、ソンライス船ニテ佐多岬ニ到着スベキニヨリ、諸事便宜ヲ与フベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

島津少将

今度燈明台為製造、御雇入之英吉利人ブラントン儀、ソンライス船ニ乗組、当月末横濱出帆、燈明台御取建之場所々々へ罷越、来月中旬比佐多岬江到着之都合ニ付、着船之上ハ其筋役人罷出、諸事引合差支無之様、可取計候、此段為心得兼テ相達候事、

五月　　行政官

右御呼出ニて、弁事伝達掛久松監物より被相渡候事、

五月二日

二七一　人別帳・郷村高辻帳・絵図ヲ差出ス

三日、東京ニテハ曩時版籍奉還ノ願書提出ノ際、版籍取調ヘ差出スベキヲ命セラレタルニヨリ、本日人別帳四冊・郷村高辻帳四冊・絵図六枚ヲ差出シタリ、ソノ届書左ノ如シ、

一人別帳四冊

一郷村高辻帳四冊

一絵図　六枚

右は於京都、先般御名より土地・人民等奉還仕度言上之趣ニ付、版籍之儀は取調可差出旨、被仰出置候処、此節右之通差越申候間、相添此段御届申上候、以上、

御名内　　田中清之進

五月三日

弁事

御役所

右弁事伝達所江時任清左衛門より差出候処、官掌小室新彌高辻帳絵図共、受取相成候事、

巳五月七日

二七二　藩庁新ニ典獄ヲ設ケ、糺明局ニ属セシムヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、新ニ典獄ヲ設ケ、糺明局ニ属セシムベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一典獄

右十一等官ニ被召建、糺明局之属下

右之通被召建候旨、被　仰達候条、糺明総裁江申渡、向々江も可申渡候、

明治二年巳五月三日　　知政所

二七三　藩庁藩治官職ノ等級ニ応シ、東京・大坂・長崎等他国滞在者ノ賄料ヲ定ム

四日、藩庁ニテハ藩治官職ノ等級ニ応シ、東京・大坂・長崎其ノ外他国滞在者ノ賄料ヲ定ム、ソノ規定左ノ如シ、

一、一等
　壱日銀弐百目ツ、
一、二等
　壱日銀九拾四匁ツ、
一、三等
　壱日銀六拾目ツ、
一、四等
　壱日銀弐拾六匁ツ、
一、五等
　壱日銀弐拾目ツ、
一、六等
　壱日銀拾四匁ツ、
一、七等
　壱日銀拾弐匁ツ、
一、八等
　壱日銀拾壱匁ツ、
一、九等
　壱日銀拾匁ツ、
一、十等
　壱日銀八匁ツ、
一、十一等
　壱日銀八匁ツ、

右は東京・西京并大坂・長崎其外他国滞在地賄料、藩治官職等級ニ応し、右之通被相究、是迄滞在働き之訳も有之候得共、以来は滞在働き之無差別、金壱両六拾目替を以、被成下候旨被仰渡候事、

但等外之面々士分之儀は、十一等之地賄料被成下、夫卒之儀は、一身賦被成下候、

巳四月　　会計局

右之通向々江可申渡候、

明治二巳五月四日　　知政所

張紙

本文外ニ

一主従　　一壱身

壱日銀四匁　　壱日銀三匁

右は兵器方附士等、其外営繕方等之諸職人、是迄主従壱身之御賦被下置候面々、官職等外之者ニ付、地賄料銀右通被成下候旨、被仰渡候、

御官名内

田中清之進

五月十二日

軍務官

御役所

右時任清左衛門より差出候処、応接方飯後最中受取相成候事、

二七四ノ二

一金百八両三歩

五月十二日より十五日迄、日数四日

壱日壱人ニ壱朱ツヽ

一白米拾石四斗四升

日数同断、壱日壱人ニ六合ツヽ

惣人員四百三拾五人

右は銃隊半大隊・砲隊半小隊到着仕候段は、一昨十二日御届申上置候、就ては兵食等本行之通御下渡被下度、此段奉願候、以上、

御官名内

時任清左衛門

五月十五日

軍務官

御役所

二七四　東京守衛ノ為桐野利秋藩兵ヲ統率シテ豊瑞丸ニテ品川ニ着シ神田橋邸ニ入ル

六日、藩庁ニテ、曩時（先月七日）東京守衛ヲ命セラレタル小銃隊半大隊、大砲半座桐野利秋統率、豊瑞丸ヨリ出発、十二日品川ニ着シ、神田橋邸ニ入ル、故ニ守衛兵銃隊一大隊、大砲一座トナレリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

二七四ノ一

一東京　御守衛被仰付置候兵隊、明後六日出艦豊瑞丸より被差越候条、軍務局総裁江申渡可承向へも可申渡候、

明治二年巳五月四日　　知政所

二七四ノ一

一銃隊半大隊

一砲隊半小隊

右は国元より海路廻船、今日到着仕候、左候得は先達て着府いたし候兵隊と合て、銃隊一大隊、大砲一座罷成申候、此段御届申上候、以上、

右時任清左衛門より応接方加茂水穂へ差出候処、金米被相渡候事、

二七五　西郷小兵衛等六名函館表へ斥候トシテ温泉丸ニ便乗ヲ出願ス

七日、西郷小兵衛等六名、函館表へ斥候トシテ、温泉丸ニ便乗ノ事ヲ出願セリ、ソノ願書左ノ如シ、

相良五左衛門
松永清之丞
安藤直五郎
川上宗之丞
山本庄之助
西郷小兵衛

右は函館表出軍先江差遣度御座候間、此節出艦温泉丸江便船被仰付被下度、此段奉願候、以上、

御名内
村山源七

五月七日
軍務官
御役所

右之通御用掛桑原虎次郎へ差出候事、

【参照】

教佐
野津七二
小頭
中江喜之助
伍長
高城七之丞

右御用有之、豊瑞丸より去ル十二日着、

半隊長
相良五左衛門
松永清之丞
安藤直五郎
分隊長
川上宗之丞
山元庄之助
西郷小兵衛

右同断、三邦丸より去ル五日着、

右之通着相成候処、函館表へ為斥候被差越候段、於其御許承知いたし居候旨申出候付、

朝廷御雇運送船温泉丸へ便船、去ル十五日出帆相成申候、此段御届申上越候、以上、

五月十八日　　田中清之進

知政所

二七六　藩庁二等官以上ニ講釈ヲ聴聞セシメ五等官以上ニモ勤務支障ナキ者ハ聴講ヲ許ス

八日、藩庁ニテハ、毎月八日ヲ以テ、御座ノ間ニ於テ講釈ヲナサシメ、二等官以上ヲシテ聴聞セシム、次テ十五日ニ至リ、五等官以上ニモ、勤務支障ナキ者ニハ聴講ヲ許ス、其ノ達書左ノ如シ、

二七六ノ一　毎月八日

御座之間講釈、二等官以上拝聞被仰付候付、当日四ツ前龍之間・猿猴之間辺江相揃候様、被仰付候条、此段致通達候、

明治二年巳五月八日　　知政所

二七六ノ二　毎月八日

御座之間講釈之次第

一五等官以上勤場不差支人数罷出拝聞、

一拝聞諸官扣席龍之間・猿猴之間・象之間迄、

一四ツ時揃四打切ニて、御座之間・二之間御敷居涯より順々座席、

一座配差引監察請持席定之候て、御届知家事申上ル、

一御出座、

一講釈人罷出相勤、畢て退座、

一御入、

一拝聞官退座、

右之通被　仰付候条、向々江可申渡候、

明治二年巳五月十五日　　知政所

二七七　内田仲之助公議人ヲ命セラル

九日、内田仲之助公議人ヲ命セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一　　内田仲之助

右ハ今般公議人申付候間、此段御届申上候、以上、

御官名公用人

五月九日　　田中清之進

弁事

御役所　　内田仲之助

右は今般公議人申付候旨、弁事御役所江御届申上候間、此段御届申上候、以上、

御官名公用人
五月九日　　田中清之進
公議所

一村山源七より差出候処、弁事伝達所ハ官掌金谷敬二郎受取相成、公議所は清水錠蔵受取相成候事、

二七八　医師・画工・諸職人等ノ位階国名受領ヲ廃止シ既ニ許容ノモノモ停止スヘキヲ達ス

十日、東京ニテハ、従来医師・画工・諸職人等ニ、位階及ヒ国名受領ヲ、仁和寺・大覺寺・勧修寺ヨリモ許可シ来リタレドモ、総テ廃止シ、既ニ許容ノモノモ停止スベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一是迄医師・画工・諸職人等位階及国名受領之儀、仁和寺・大覺寺・勧修寺ヨリ差許来候処、向後被廃止、且従来許置候向モ、総テ可為停止旨被　仰出候事、

五月〔八日〕　　行政官

弁事より御達相成候由ニて、月番因州藩外二藩より廻状致到来候事、

五月十日

二七九　薩藩兵隊ニ箱館出張ヲ命ス

十一日、東京ニテハ本藩兵隊ニ箱館出張ヲ命セラル、其ノ命令左ノ如シ、

薩州兵隊

箱館出張申付候事、

五月十一日　　軍務官

右御呼出之上、岡本路之輔を以、田中清之進へ被相渡候事、

二八〇　藩庁分地ニ付イテ達書

十二日、藩庁ニテハ従来分地別立ハ、三拾石以上ノ者ヨリ拾石以上ノ分地ニテ、許可シタレトモ、尓後五十石以

上ノ内拾五石以上ニテ、許可スベキヲ達シ、尚ホ十五日ニ至リ年齢十五才以上タルベキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

二八〇ノ一 諸士分地別立之儀は、本家江高弐拾石余残置、拾石以上ニて分地別立被仰付来候得共、右通ニては漫りニ家部相殖へ、其弊本家共可及零落事候故、以来本家江三拾五石以上残置、拾五石以上ニて分地別立被仰付候旨被　仰達候条、向々江可致通達候、

明治二年巳五月十二日　　知政所

二八〇ノ二 分地高員数之儀、此節申渡通ニて、以来致別立候者は勿論、家督之者も拾五歳以下ニては、分地別立一切不被仰付候、此旨出納奉行其外向々江可申渡候、

明治二年巳五月十五日　　知政所

二八一　参与大久保利通副島種臣ト共ニ、行政官機務取扱ヲ命セラル

コノ日、参与大久保利通副島種臣ト共ニ、行政官機務取扱ヲ命セラル（本文記載なし）

二八二　上・下議局ヲ開キ輔相・議定・参与ヲ行政官ニ置イテ公選ニヨリ登庸スル詔書

十三日、詔アリテ上・下議局ヲ開キ、議政官ヲ廃シ、輔相・議定・参与ヲ行政官ニ置キ、三等官以上ニ投票セシメテ登庸セラル、其ノ詔書左ノ如シ、

二八二ノ一 詔書

朕惟ニ、治乱安危ノ本ハ、任用其人ヲ得ト不得トニアリ、故ニ今敬テ　列祖ノ霊ニ告テ、公選ノ法ヲ設ケ、更ニ輔相・議定・参与ヲ登庸ス、　神霊降鑑、過ナカランコトヲ期ス、汝衆、ソレ斯意ヲ奉セヨ、

明治二年五月十三日

二八二ノ二 御沙汰書

去歳閏月、政体御造立相成候処、時勢之変遷ニ随ヒ、適宜之政体大ニ御確定可有之候得共、千古未曽有御改革之儀ニ付、一時ニ被施行候テハ、却テ其宜ヲ失ヒ候儀モ可有之、依テ即今至急御改正無之候テハ、不相済廉々、別紙之通御改删被　仰付候事、

別紙

上下議局被相開候ニ付、議政官被廃、左之通被改置候事、

上局

議　長　(大原重徳任ス)

副議長　(阿野公誠任ス)

議　員

行政官

輔相一人(三條實美任ス)

議定四人(岩倉具視・徳大寺實則・鍋島直正任ス)

参与六人(東久世通禧・木戸孝允・大久保利通・後藤元曄・副島種臣・板垣正形任ス)

弁事

輔相

議定

六官知事

(神祇官知事中山忠能任ス)

(民部官知事松平慶永任ス)

(会計官知事萬里小路博房任ス)

(軍務官知事嘉彰親王)

(外国官知事伊達宗城)

(刑法官知事正親町三條實愛任ス)

(学校知事山内豊信任ス)

(内廷職知事中御門経之任ス)

(留守長官鷹司輔熙任ス)

右四職、公卿・諸侯ノ中ヨリ撰挙スヘシ、

但三等官以上総会同入札ノ法ヲ用ユ、

参与

副知事

(神祇官副知事福羽美静任ス)

(民部官副知事廣澤真臣任ス)

(会計官副知事大隈重信任ス)

(軍務官副知事大村永敏任ス)

(外国官副知事寺島宗則任ス)

(刑法官副知事佐々木高行任ス)

(留守次官岩下方平任ス)

右二職、貴賤ニ拘ハラス撰挙スヘシ、

但同断、

輔相　一人

議定　四人

参与　六人

右今日入札撰挙被　仰付候事、

六官知事　六人
内廷職知事一人
六官副知事六人
右明十四日入札撰挙被　仰付候事、

公撰次第
時刻各以序次着座
但正服之事
次弁官事読　詔書
次弁官事置入札箱於案上
但史官着座其側
次各記可挙之人名而納箱
次　出御
次参与持出箱、於　御座前而披之、検其数（史官記之）
次　入御
次輔相　宣下
次議定・参与入札了、弁官事於輔相座前披之、検其数（史官記之）

二八二ノ三　大久保利通日記

五月十三日
今日八字参　朝、今日ハ三等官以上ヲ被召、輔相・議定・参与入札被　仰付候、尤モ
主上神明ニ御誓ヒ、開札ハ於　御前有之候、四字引退、

二八二ノ四　岩下贈小松書
御痛所如何被為在候哉、折角御気長ニ御保養相功、御全快奉祈候、当表平和ニテモ、東京ハ万事甚混雑ニテ、不得止議・参初公撰入札ノ法ヲ以テ、人撰ニテ職務進退有之候由、私ニモ是迄ノ職務被免、留守次官被命候、御留守中ハ御用閑ニテ、一字過二字ニハ必退出仕事ニ候、東京ハ夜中雞明ニモ及候由、繁雑無限ト申事ニ候、大久保等心配ノ事ト存候、
一昨日ハ　楠公祭祀ヲ中路延年催候テ加茂ヘ参候、祭主ハ楠公子孫次郎左衛門ト申者ニテ候、正行朝臣自筆ノ正成卿ノ像写（本書ハ備前候ニ有之由）、左右ニ正成卿・正行朝臣・正儀朝臣ノ自筆歌掛物ニテ、感心仕候、（知紀）八田・（真柱）後醍院等ニテ候、奉歌八田・後醍院モ有之候ヘ共、忘申候、私立花ノサカリナリセハミヨシノヽヨシノヽミユキアラサラマシヲ

近頃ハ歌モヨミ不申、例ノ持病不相替差起、ヒル寝勝ニ消光仕候、如此候テハ勤務モ調兼候間、少御基本相定候テ、半年カ一年ノ御暇是非可相願ト奉存候、其内御全快ニモ相成候ハヽ、御交代願上度候、種々申上度義候へ共、例ノ不性御高免可被下候、頓首拝、

五月廿七日　　岩下弟

小松大兄

侍史

二八二ノ五

公選投票ヲ以テ官吏ヲ登庸スル詔書

己巳五月十三日、上・下議局ヲ開クヲ以テ、議政官ヲ廃シ、行政官中輔相・議定・参与・弁事ヲ置ク、詔シテ公選法ヲ設ケ、三等官以上ヲ会シ、投票ヲ行ヒ、之ヲ登庸ス、更ニ右大臣三條實美ヲ以テ輔相ト為シ、大納言岩倉具視・中納言鍋島直正ヲ議定トナシ、中将東久世通禧・木戸準一郎・後藤象次郎・副島二郎・板垣退助・大久保一蔵ヲ参与トナス、其詔ニ曰、

朕惟ニ治乱安危ノ本ハ、任用其人ヲ得ト不得トニアリ略下（前ニ記スモノト同文故略ス）

二八三　銃器等購入ノ約定書ヲ和蘭商社ト交換ス

コノ日、東京ニテ、英国製アルヒニー銃千五百挺、パトロン製造器械一式、及ヒラツパ・太鼓各々三拾五個ヲ、和蘭商社ヨリ購入ノ約束ヲナシ、約定書ヲ交換セリ、其ノ約定書左ノ如シ、

二八三ノ一

約定書之事

英製

一アルヒニーイ(Albini)銃　千五百挺

二帯バヤネツト付

但胴乱銘々

背負皮銘々

螺抜五挺ニ付壱丁ツヽ、

万力拾挺ニ付壱丁ツヽ、

替針銘々

英製

一同品パトロン製造器械　一式

但一日ニ五百粒ヨリ千発迄出来之器械絵図相添、

英製

一散兵ラツパ　三十五員

但緒相添
英製
一小隊太鼓　三十五員
但替皮十枚ツ、
外要具一式相添
〃為手附
洋銀六千弗
右は、其本国ニて新規製造、可成速ニ蒸気を以、横濱ニ到着之上、残金引替ニて請取候儀致約定候、為後証仍て如件、

明治二巳年
五月十三日

薩州
村田新八
上野敬助
田中清之進

和蘭商社
(W. M. Van Der Tak)
ハン・デル・タツクサマ

右巳五月十四日、上野敬介を以、彼方へ金共入付候処、左之通返書到来候事、

二八三ノ二
一日本薩摩士官村田新八并田中清之進と、在横濱和蘭商社ヱゼントウエ・ハン・デル・タツクと双方約束し、左之品々を右士官之為に、ハン・デル・タツク欧羅巴ニ誂遣ス事を承諾せり、
一短アルヒニー千五百挺
但し剣附
一附属品皮具　千五百
手本通り
一針　千五百
一螺旋抜き　三百
一万力　百五十
一一日ニ銅管五百より千迄出来候機械一揃
但し絵図添
一喇叭　三十五
一太鼓　三十五
但し一ツニ付皮十枚ツ、添
右品々は、極上之品ニして、可成速ニ飛脚蒸気船を以、横濱江取寄べし、但凡五六ケ月内之事、
右荷物陸揚いたし候ハヽ、同時ニ払方済ニて、日本士官引取る事も承諾せり、
一手金として洋銀六千元を、日本士官村田新八殿より落手せり、右手附金は、価金より引去るへし、

千八百六十九年　　和蘭商社エゼント
第六月二十四日　　ハン・デル・タツク

二八三ノ三
本文之内
一喇叭　三十五之内
但注文替ニテ不宜ニ付、十五丈相請取、
外ニ
二十注文致候事、
一太鼓　三十五
但皮十枚ツヽ、添、
右相請取、
右巳十一月十日、蘭之五番より相請取、原田宗助存知之事、

二八四　西郷隆盛元佐土原藩士外二名ヲ、藩士小姓与トシテ定府命セラレ度藩庁ニ願出ツ

コノ日、西郷隆盛ヨリ藩庁へ、元佐土原藩士淺田清次郎・元西大路藩士森時之輔、及ヒ元新撰組三井丑之助ヲ、藩士小姓与トシテ、定府ニ命セラレ度旨ヲ願出シタリ、其ノ書左ノ如シ、

元佐土原藩士
淺田政次郎

右は、生国ニおひて罪を犯、無拠脱走いたし候者ニては決て無之、奥羽之間江乗馬之義ニ付、差越候処、期限を失し、無致方流浪之身と相成居候処、昨年官軍押入候付、此御方之兵隊江訴出候処より、地理実見之次第承届候得は、無相違事故、諸方江為探索方差出、行先キ知己之者多ク、賊情ハ勿論、敵地之間道等委敷相分、格別之功業相立、夫而已ならす、若松ニおひて戦争之節も手負いたし、一向相励候付、御国元脱走いたし候者さへ、軍功を以帰参被仰付候位之事候へハ、生国江其趣を以、帰参之都合被成下候様有御座度候得共、当人之義も偏此御方様江被召置被下候様、歎願仕候事御座候間、御召抱之上御小姓与江被召入、江戸定府被仰付候様有御座度、生死之境ニ臨ミ、我物同様ニ召仕候て、平定之後捨置候様之仕向ケ御座候てハ、御徳義ニ相拘而已ならす、以来事ある節ニ至り、他国之者召仕候義ハ、万々不被為出来候ニ付、御勝利之後ハ重ク御扱被下候処、偏ニ企望いたし居申候、

元西大路藩士

森　時之輔

右は、西小(大)路藩ニは
朝廷より米穀方被命候処、時之輔ニハ、其藩より出張之役人ニて御座候処、一向六番隊江相付、金穀之世話いたし呉候処、御国兵隊之儀ハ、不一ト通用弁相成候処、其藩ニおひてハ、薩藩江私するとの説相起、金穀方江難罷居、六番隊付属之様罷成候て、一隊之尽力いたし候処、其功業不少、江戸迄付来候得共、我藩ニ帰る事も出来不申候時機罷成、既ニ其藩ニてハ脱走之御届申出、家財之沙汰ニ及候由、就てハ本藩申解呉候道も、絶候次第ニ御座候故、当分薩藩之名目を以、病院之役人と相成居候由御座候、右時機御国之故を以、其藩を被消、御国之為ニハ格別相成候訳之者御座候へハ、政次郎同様被仰付度義と奉存候、

元新撰組

三井丑之助

右は、板橋宿ニおひて、東山道より出兵いたし候兵隊江相付降伏、夫より諸方江探索為致、追々之戦争ニも御国兵隊ニ相加、功業も有之、御国者ニ候へハ一等兵士ニ可相加者御座候処、只今ニ至り、附属迄ニて御座候得共、又々箱館表出張之兵隊江相加出張いたし居申候、加納道之助と申者ハ、矢張新撰組ニ御座候得共、戦争前以悔悟いたし、帰向之者ニて、伏見戦争より相加、東山道手之案内者と相成、致出張筋合も相替候へ共、其功労ニおひて差等無之者ニ御座候間、加納同様被仰付可然義と奉存候、尤加納ニハ京師ニおひて御召抱相成、御小姓与ニ被入置、当分江戸邸江罷在、三人御賄被成下置候、道之助・丑之助ニも、江戸定府被仰付可然義と奉存候、

一今井一兵衛儀、御屋敷御普請中、至極骨折いたし、精勤之段委細承届申候間、仲之助申越候通、直様相運候様御取計被下度、御頼申上候、

右之通急速相運候様、御取計被下度、御願申上候、

以上、

五月十三日認

知政所

西郷吉之助

追て、浪士松澤和太郎青山勇蔵江相付、奥州表ニ出

張いたし、道案内又ハ探索等いたし、御用立候由御座候得共、一篇も戦争を経候義も無御座候間、御含被成下、御礼謝ニ及候ハヽ可宜者ニ御座候間、右辺之処、見計を以取扱候様可仕候間、御聞置可被下候、左候て右等之首尾書ハ、公用方より御届可申上候、

〔大西郷全集所収写真にて校訂〕

【参照】

一代々御小姓与　三井丑之助　森　時之助　淺田政次郎

右被召抱、右之通被仰付、東京定府被仰付候、

六月　知政所

一公用方理事見習　堀　剛十郎

右之通被仰付候条、東京へ可相詰候、

六月　知政所

一営繕奉行副役　今井一兵衛

右之通被仰付候、

六月　知政所　今井一兵衛

右東京詰被仰付候条、可申渡候、

六月　知政所

右四通之通被仰渡候付、銘々へ申渡候事、

二八五　秋田口負傷ノ藩士榎田仲兵衛治癒セサルニヨリ大病院へ入院ヲ願出ツ

十四日、東京ニテハ藩士榎田仲兵衛、秋田口ニテ手負ヒ長崎ニ於テ療治セシモ、治癒セズ、出京シタルニヨリ、大病院へ入院ヲ願出テタリ、其ノ願書及ヒ指令左ノ如シ、

願書　榎田仲兵衛

右は秋田口ニて手負、是迄於長崎療治方為致候得共、快気無之、此節出府ニ付、何卒大病院江入院被仰付被下度、此段奉願候、以上、

御官名内　時任清左衛門

五月十四日

軍務官
御役所
指令
(朱書)本文応接方加藤水穂江差出候処、判事中川對馬ヨリ一往帰国、又出府程之者へ、何迄も
朝廷御構と申儀、難出来旨申聞候事、
但入院丈は不苦旨承届候事、

二八六　藩庁東京・西京・長崎等定詰ノ者ニハ、兵士同様ノ賄米等ヲ給スル旨ヲ達ス

十五日、藩庁ニテハ、東京・西京・長崎等定詰ノ者ニハ、兵士同様賄米一日一人白米六合、納米ニテハ七合弐勺宛、及ヒ菜代百四十八文ツヽヲ給スル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一東京・西京・長崎共定詰之面々、応賦御賄米被成下置候得共、今般官職御改正ニ付、以来定詰之面々、兵隊同様、現人数ニ応し壱日壱人ニ付白米六合宛、被成下算当にも相拘候間、御蔵払方之儀は、納米壱升ニ付弐合べり之処ニて、七合弐勺ツヽ、払渡候様取扱可致事、
但菜代銭壱人ニ付百四拾八文ツヽ、被成下候、
五月　会計局
右之通向々江可申渡候、
明治二年巳五月十五日　知政所

二八七　大久保利通参与ニ岩下方平留守次官トナル

コノ日、公選ニヨリテ大久保利通参与ト為リ、岩下方平留守次官ト為ル、

大久保一蔵
参与更ニ被　仰付候事、
但是迄之兼勤被免候事、

岩下左二
是迄之職務被免、留守次官被　仰付候事、

二八八　藩士有村泰蔵医学校録事ヲ命セラル

コノ日、東京ニテハ、藩士有村泰蔵医学校録事ヲ命セラ

ル、其ノ辞令左ノ如シ、

一　有村泰蔵

右是迄之職務差免、更ニ医学校録事申付候事、

五月　学校　副知事

医学校権判事、岩佐玄珪を以被仰付候段、届申置候事、

巳五月十五日

二八九　西郷・桐野統率来着ノ兵隊、函館出張ヲ命セラレ品川海ヲ出発ス

十六日、曩時西郷・桐野統率出京ノ兵隊、去ル十一日函館表出張ヲ命セラレタルニヨリ、本日三邦丸・豊瑞丸ニテ品川ヲ出発セリ、其ノ届書左ノ如シ、

二八九ノ一　今般兵隊箱館表江出兵被　仰付置候付、此内致着府候、銃隊一大隊・砲隊一小隊、今日八字弊邸繰出、品海より乗船、十二字出帆之筈御座候、此段御届申上候、以上、

五月十六日　御名内　田中清之進

軍務官　御役所

右村山源七より差出候処、応接方飯後最中受取相成候事、

二八九ノ二　巳五月十八日足軽川畑吉左衛門・玉利藤次郎急便去ル朔日、三邦丸より被差立候西郷吉之助一列銃隊半大隊・砲隊半小隊、同五日品川へ着、翌六日神田橋内御屋敷へ繰込相成候、

同六日、豊瑞丸より被差立候中村半次郎等一列半大隊・大砲半座、同十二日品川着、当日前条同断、御邸江繰込相成候、

右之通着相成候付、別紙二通之通御届申上置候、然処去ル十一日、箱館出張被仰付候旨、別紙之通御達相成候付、一昨十六日八字繰出、品川より三邦丸・豊瑞丸へ乗組、当日出艦相成候付、当日別紙之通御届申上置候、右付ては函館表形勢、軍務官其外へ探索仕候得共、為取留儀相分不申、別紙三通相添、此段申上越候、以上、

五月十八日　　田中清之進
知政所
右ニ付、別紙之儀ハ御用帳ニ留置候事、

二九〇　京都ヨリ到着ノ兵士三小隊賜暇帰国ノ日限ヲ延引セラル

コノ日、又去月十八日京都ヨリ到着ノ兵士三小隊ハ、賜暇帰国セシメラルベキノ処、都合ニヨリ日限ヲ延引セラル、其ノ達書左ノ如シ、

達書

薩州兵隊
四百拾人
右御暇可被下之処、依御都合出立日限之儀は、追て可及
御沙汰候事、
五月十六日　　軍務官
右応接方より村山源七受取
届書
先達て京都より到着之兵隊、元西尾隠岐守屋敷跡へ被召置候処、去ル五日西郷吉之助一列着ニ付、御暇之儀別紙之通奉願候処、御張紙ニて、帰国休兵不苦旨被仰渡候、然処其後日限之儀、追て可被為及
御沙汰旨、別紙之通御達相成候、此旨申上越候、以上、
五月十八日　　田中清之進
知政所

二九一　大隊調練天覧ノ旨ヲ達セラル

コノ日、来ル十八日大隊調練天覧ノ旨ヲ達セラル、其ノ達書及ヒ諸侯ヘノ達書左ノ如シ、
二九一ノ一　達書〔五月十六日〕
軍務官
来十八日、四大隊調練　天覧可被遊旨被
仰出候事、
但雨天之節ハ御順延之事、
二九一ノ二　諸侯ヘノ達書
諸侯

来十八日、於本丸跡兵隊調練　天覧被為在候ニ付、拝見被　仰付候事、

衣体ハ直垂着用之事、

但雨天之節ハ御順延之事、

二九一ノ三
一

薩州
長州
肥州
土州

右近日大炮打方
天覧被遊度
御内命候間、大砲司令一人宛可差出旨申渡候事、

五月　軍務官

右御呼出之上、応接方小國覺之助殿より被相渡候事、

二九二　榎本武揚以下五稜郭ヲ出テ軍門ニ降ル

十八日、函館ニ於テ榎本武揚以下五稜郭ヲ出テ、軍門ニ降ル、其ノ始末概要左ノ如シ、

二九二ノ一
海陸軍参謀報告

十一日迄之賊情ハ、別紙一号・二号届書之通ニ御座候、其後十二日ニ至リ、箱館全我有ト也、賊軍悉ク五稜郭並ニ元津軽陣屋及ヒ辨天崎ノ台場等ノ要害ニ逃込、折々我陸軍ヲ窺フノ気色相見候ニ付、終日諸軍艦ヲ以テ、陸軍ヲ助ケ砲射ス、

十三日、辨天崎台場猶未不抜、春日・陽春両艦ヨリ大砲一門宛ヲ揚、山上ヨリ辨天台場ヲ放射ス、

十四日、戦情前日ニ大異ナク、時々軍艦ヲ外浜ヘ廻シ、元津軽陣屋ノ賊ヲ砲撃ス、此夕辨天崎ノ賊徒力尽勢屈降伏ヲ請フ、故ニ辨天崎ヘ向ヒ砲射ヲ止ム、

十五日、辨天崎ノ賊徒永井玄蕃、元蟠龍ノ船将松岡盤吉・川村録四郎等以下二百四十人降伏ス、大小砲器械等ヲ請取、

十六日暁天、三字ヨリ陸軍元津軽陣屋ノ賊ヲ攻撃ス、海軍之ヲ応援ス、一挙忽抜ク、十一・二日比ヨリ甲鉄艦ノ七十斤ヲ以テ五稜郭ヲ射撃ス、毎発多クハ命中、賊大ヒニ窮スト云、

十七日、薩藩田島敬蔵五稜郭ノ賊徒ト応接ノ末、賊魁榎本釜次郎・松平太郎・大鳥圭助・荒井郁之助歎願申出候趣ニ付、九字比参謀虎之助・軍監前田雅楽、陸軍

ニテハ参謀黒田了助、軍監村橋直衛・岸良彦七・有地静馬等、亀田ニ出張リ、面会ノ上歎願趣意聞取候処、謝罪降伏申出候ニ付、実効ケ条相立候ハヽ、可奉伺天裁旨申聞、賊徒ハ五稜郭ヘ差戻ス、同夜又候松平太郎・安富才助両人陣門ニ罷出、降伏之実効左之通相立度段申出ル、

明十八日

朝第六時ヨリ七字迄ノ間、首謀ノ者榎本釜次郎・松平太郎・大鳥圭助・荒井郁之助陣門ヘ降伏之事、午後一字ヨリ二字ノ間、兵隊以下不残出郭降伏之事、午後四字ヨリ五字迄ノ間、兵器悉皆差出シ、五稜郭差上可申事、

翌十八日、早天ヨリ前田雅楽、軍使器械請取方等引連テ、亀田会議所ヘ出張、出先監軍岸良彦七・有地静馬打合、各藩兵隊ヘ降伏護送ノ達等致シ、第七時賊魁榎本釜次郎・松平太郎・大鳥圭助・荒井郁之助軍門降伏、軍監申渡候ケ条左之通リ、

謝罪降伏実効ケ条左之通、

一首謀之者陣門降伏之事、

一五稜郭ヲ開キ、寺院謹慎罷在、追テ可奉待朝裁事、

一兵器悉皆差出可申事、

右之通申渡候条、可得其意者也、

海陸軍

五月　　参謀

二九二ノ二

首謀四人双刀取上ケ、長州一中隊ヲ以テ函館寺院ヘ護送ス、一字過キ兵士三百人、創傷者五十人、歩兵六百五十余人、合テ一千余人ヲ、薩州一中隊、伏水一小隊、備前一中隊、長州一中隊、大野一中隊、松前三小隊、水戸二分隊、黒石一中隊等ヲ以テ函館ヘ護送ス、四字過大小砲始武器悉皆取揚、五稜郭ヲ請取、伏水一中隊、水戸一中隊、松前一中隊繰込候事、

右之次第ニテ函館ハ全平定ニ相成候、モロラン（室蘭）三百計リ賊徒有之赴、是モ追々降伏可致被存候、若強抗致候ハヽ、早速打取可申候、不取敢右之段御届申上候也、

海軍

五月廿日　　参謀

軍監

軍務官

判事御中

二九三 薩摩藩士山下弘平大病院ノ副当直医官ヲ命セラル

コノ日、東京ニテハ、本藩士山下弘平大病院ノ副当直医官ヲ命セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

辞令

一　山下弘平

右病院副当直医官申付候事、

学校

五月　知事

医学校権判事岩佐玄珪殿を以、被仰付候段、届申出候事、

巳五月十八日

二九四 西郷助八外四名ヲ横濱在留英国大砲方指南ノ者へ入門セシメ度儀ヲ願出ツ

十九日、東京ニテハ西郷助八外四名ヲ、横濱在留英国大砲方指南ノ者へ、入門セシメ度儀ヲ願出デタリ、其ノ願書及ヒ指令左ノ如シ、

願書

一　内田八郎次
　　國分才次
　　西郷助八
　　汾陽尚次郎
　　中村善之助

右之者共儀、横濱在留英国大砲方指南役之者江入門為致、大砲修行為仕度候間、御許容被成下、右之趣英国公使江其御館より、御頼入被下候様仕度、此段奉願候、以上、

御官名公用人
田中清之進

五月十九日

外国官
御役所

右江御張紙
書面之趣聞届候事、

五月十九日　外国官

右時任清左衛門より外国官筆生佐久馬文雄へさし出候処、同日御張紙ニて、筆生加藤勝蔵を以被相渡候事、

【参照】

一、四斤半砲一挺
　　要具相添
右は弊藩西郷助八外四人、横濱表江砲術伝習方として差出候付、稽古用として同所江差遣度御座候間、御固場通融御印鑑御渡被下度、此段奉願候、以上、
　　御官名内
五月十二日　　時任清左衛門
外国官
御役所
右通差出候処、印紙被相渡候事、

二九五　藩庁急変火災ノ際常備軍集合ノ鐘令法及ヒ警衛法ヲ規定ス

コノ日、藩庁ニテハ軍務局ニテ、急変又ハ御城近火ノ時、常備軍集合ノ鐘令法及ヒ警衛法ヲ規定ス、其ノ達書左ノ如シ、

一急変之節は、護摩所早鐘を以、相図を定置候付、一番鐘ニて、当番常備一大隊軍局屯所江可馳付候、非番隊繰出候時機ニ候ハヽ、百秒時間位を置、同断鐘令ニ候条、鐘之令ニ応し、順席ニて可相集候、一之鐘令ニては、当番外兵隊致支度罷立、鐘令無之内馳付候儀、一切禁制之事、

　但三官之儀は、各隊一番鐘ニて可馳付候、

一御城近火之節は、当番常備一大隊速ニ馳付、御本門・二之丸御門弐小隊ツヽ、隊列を不乱御警衛向、御門出入等厳重相改、

御出府之節同様ニ候事、

　但残り四小隊は、巡邏をいたし、二字間を以交番可致事、

巳五月十九日　　軍務局
右之通向々江可申渡候、
五月　　知政所

二九六　合衆国留学生藩士松村淳蔵外五名へ、壱人一月洋銀六百元宛ヲ給スヘキヲ達ス

二十日、北米合衆国留学生本藩士松村淳蔵外五名へ、壱人一ケ月洋銀六百元宛ヲ給スヘキヲ達セラレ、改正ノ印章ヲ下附スベキニヨリ、定額ノ手数料ヲ納ムベキヲ命シ

尚廿九日ニ至リ、右印章ト其ノ心得ノ規則トヲ下附セラレタリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

二九六ノ一

合衆国留学生

松村淳蔵
杉浦弘蔵
永井五百介
大原令之助
吉田伴七郎
長澤鼎

右之者共儀、於合衆国都府留学之儀、今般更ニ被仰付、留学中諸入費為御手当、壱人壱ケ月洋銀六百元充被下置候条、別テ学業勉励、皇国之御為筋相心得、謹慎修業可致候、

右御免許之趣其当人共江当官より申達候得共、尚其主人よりも可被申達候事、

外国官
判事

巳五月
御名殿
公用人中

二九六ノ二

松村淳蔵
外五人

右今般改正之御印章、銘々付可相渡候間、当人年齢書付早々可被差出候、且御印章相渡候節、定例之通為手数料壱枚ニ付五百疋、上納可被致候、依之申達候、以上、

外国官
判事

巳五月廿日
御名殿
公用人中

右之通申来候付、当三月廿九日御届之写弐通差出候事、

巳五月廿一日

二九六ノ三
一金七両弐歩
壱人ニ五百疋ツヽ

松村淳蔵
杉浦弘蔵
永井五百助
大原令之助

吉田伴七郎
長澤　鼎

右御印章御渡被下候付、手数料として上納仕候、以上、

御官名内
村山源七

五月廿九日
外国官
御役所

右村山源七より差出候処、書記石川岩司より御印紙并規則書相渡候事、

五月廿九日

二九六ノ四
第五号

外国官印

嶋津少将家来
杉浦弘蔵
巳歳二十七

右之者、此度海外旅行之儀願出候間、差許申候、就てハ通行無差支様御免許被下、且差掛要用之儀は、相当之御扶助被下候様、其筋江依頼いたし候、

日本国

外国官知事

明治二己巳年五月廿四日　伊達中納言

御印章之横もし落ス、

二九六ノ五
規則

一各国御条約書中ニ有之候条々は、一々相心得可申候事、

一何事ニよらず
皇国之御為と可相成筋、見聞之節は精々心を用ひ、穿鑿を遂け候上、書面を以外国官又は神奈川・大坂・兵庫・長崎・新潟・箱館之内、外国掛御役所江飛脚便之節可申越、若又書通不便之節は、帰国之上可申出事、

一銘々父母之邦をはなれ、外国江罷越候儀ニ付、各覚悟可有之義ニ候得共、一身之慎方は不及申、聊之事なり共、
御国之御外聞不相成様心掛ケ可申、且引当無之、外国人より借財之儀決て不相成、万一旅費其外差支、無余義外国ニ於て借財いたし候ハヽ、帰国之節迄ニ何様ニもいたし償戻、決て不義理之事仕間敷、若又引負等いたし、其侭逃れ帰リ、追て相顕るゝニ於てハ、当人は勿論、主家一類迄其時誼ニより、急度御咎之上償戻之

儀可被仰渡事、

一海外旅行中、御国人ニ出会候ハヽ、仮令不相知ものニ候とも、互ニ相親ミ、其もの不心得之事有之候ハヽ、異見さし加へ、或ハ病気等難苦之体見捨兼候ハヽ、可成丈扶助いたし遣可申候事、

一外国人江対し恨を含候事有之候とも、可成ハ堪忍いたし、不得止節は其土地之役所へ訴立、静かに筋合糺しもらひ可申、何程忿怒ニ堪へさる事也とて、決て外国人を殺害いたし、又は為疵負候様之挙動致間敷事、

一御渡之御印章は大切ニ取扱、帰国之上可奉返納、尤当御役所ニ不限、前書何レ之港ニても帰着之都合次第、相納候て不苦候事、

一他国之人別ニ加わり候事并宗門相改候義、堅く御制禁之事、

一年限之義ハ、別段御定無之候得共、凡十ケ年ハ御許容可被下候事、

一年限相立無滞帰国之上ハ、旅行中之始末委細ニ可申上候事、

右之条々堅く可相守もの也、

明治二年巳五月廿九日　　外国官ノ印

松村淳蔵
杉浦弘蔵
永井五百助
大原令之助
吉田伴七郎
長澤　鼎

右同案一通ツヽ、都合六冊相渡候事、

外国官石川岩司より村山源七受取候事、

五月廿九日

二九七　西郷隆盛等函館征討応援隊函館ニ着シタレトモ降伏ノ後ナレハ帰途ニ就ケリ

コノ日、西郷隆盛等率ヰル所ノ函館征討応援隊函館ニ着シタレトモ、已ニ降伏ノ後ナレバ、三日間滞泊ノ後帰途ニ就ケリ、其ノ概況左ノ如シ、

二九七ノ一　五月十五日、本藩兵二大隊、西郷吉之助之ヲ統率シ、東京ヲ発途、品川沖ヨリ三邦丸・鳳瑞丸ニ搭シテ、箱館ニ向ヘリ、

二九七ノ二
五月二十日、本藩兵箱館ニ着航ス、時脱賊降伏セシヲ以テ、兵員ノ上陸ヲ許サス、滞泊三日ニシテ東京ニ帰航セリ、

【参照】

箱館新聞節録

一右ノ報未至時、五月十四五日頃、三邦・豊瑞二艦薩兵ヲ乗セテ、東京海ヲ発シ、廿日頃ニハ着ノ積リ、此兵着セハ一挙落城ナルヘシ、

一城中ノ兵千百モアルヘシト云、

二九七ノ三
箱館平定セルニ仍リ、本藩兵加治木左半砲隊ヲ始メ、諸隊五月二十五日乗船、箱館ヲ発航シ、六月朔日東京ニ着航、仝十五日東京ヲ発航シ、本日鹿兒島ニ凱軍セリ、

二九八　藩士堀萬十郎外三名昌平学校入学ヲ出願ス

コノ日、藩士堀萬十郎外三名昌平学校入学ヲ出願ス、其ノ願書左ノ如シ、

一生国薩摩府下　　堀　萬十郎
一季齢二十七歳
一右同府下　　大河平喜左衛門
一右同二十六歳
一右同府下　　吉利　祐助
一右同二十四歳
一右同府下　　奥　良之進
一右同二十一歳

右は御名家臣ニ御座候処、入学之志願御座候間、御免被　仰付被下度奉願候、此段申上候、以上、

御名内
五月廿日　　益山八右衛門
昌平学校
御役所

二九九　在府諸侯ヘ御下問ニ付キ礼服着用ニテ参

朝スヘキヲ達ス

コノ日、在府諸侯ヘ御下問ニ付、明後廿二日礼服着用参朝スベク、若シ在邑又ハ所労ノ者ハ、重臣ヲ差出スベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

一在府諸侯

御下問之儀有之候間、明後廿二日直垂着用ニて、辰之刻参

朝可有之候也、

但在邑并所労等之向は、名代重臣礼服ニて、出頭可有之候也、

五月廿日　　弁事

三〇〇　朝廷祭政一致・蝦夷地開拓ノ二件ヲ諮問ス

二十一日、朝廷親王・大臣・公卿・諸侯・五等官以上ヲ召サセラレ、祭政一致・蝦夷地開拓ノ二件ヲ諮問セラル、忠義公在邑所労ニ付参京ナク、重臣ヨリ奉答セリ、其ノ書類左ノ如シ、

三〇〇ノ一　御下問書

我　皇国　天神　天祖極ヲ立、基ヲ開キ給ヒシヨリ、列聖相承、天工ニ代リ天職ヲ治メ、祭政維一、上下同心、治教上ニ明ニシテ、風俗下ニ美シク、　皇道昭々万国ニ卓越ス、然ルニ中世以降人心偷薄、外教コレニ乗シ、　皇道ノ陵夷、終ニ近時ノ甚キニ至ル、天運循環、今日維新ノ時ニ及ヘリ、然レドモ紀綱未タ恢張セス、治教未タ浹洽ナラス、是　皇道ノ昭々ナラザルニ由トコロト、深ク　御苦慮被為遊、今度祭政一致、天祖以来固有之　皇道復興被為在、億兆ノ蒼生報本反始ノ義ヲ重シ、敢テ外誘ニ蠱惑セラレス、方嚮一定、治教浹洽候様被為遊度　思食候、其施為之方、各意見無忌憚可申出候事、

版籍返上之儀、追々衆議被　聞食候処、全ク政令一途ニ出ルノ外無之、依テ府藩県三治ノ制ヲ以テ、海内統一可被遊　御旨趣ニ付、改テ知藩事ニ被任候　思食ニ候間、所存無忌憚可申出候事、

蝦夷地之儀ハ　皇国ノ北門、直ニ山丹満州ニ接シ、経界粗定トイヘトモ、北部ニ至テハ中外雑居致候処、是迄官吏之土人ヲ使役スル甚苛酷ヲ極メ、外国人ハ頗ル

愛恤ヲ施シ候ヨリ、土人往々我邦人ヲ怨離シ、彼ヲ尊信スルニ至ル、一旦民苦ヲ救フヲ名トシ、土人ヲ煽動スル者有之時ハ、其禍忽チ箱館松前ニ延及スルハ必然ニテ、禍ヲ未然ニ防クハ、方今ノ要務ニ候間、箱館平定之上ハ、速ニ開拓教導等之方法ヲ施設シ、人民繁殖ノ域トナサシメラルベキ儀ニ付、利害得失各意見無忌憚可申出候事、

三〇〇ノ一　内田仲之助書

一今日御一新之時ニ相及、紀綱恢張治教浹洽候様、被為遊度
思食ニ付、其施為之方并蝦夷地開拓之利害等、無忌憚意見可申上旨、以
御書附被仰渡、畏恐入奉存候、右ニ付ては重大之事件ニて、奉仰
朝裁を候外、別段見込之儀無御座候間、宜御執
奏可被下候、且御達之趣は、早速国元御官名江申達、猶存寄之義も候ハヽ、可申上旨奉存候、以上、

御官名

五月廿五日　　重臣内田仲之助

弁事

御役所

右田中清之進より官掌安藤権兵衛へ差出候処、受取相成候事、

三〇一　藩庁侍医及ヒ八九等官ノ俸禄ノ改正等ヲ達ス

二十二日、藩庁ニテハ、侍医及ヒ八九等官ノ俸禄ヲ改正シ、又新ニ道具預ヲ置クベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

三〇一ノ一　一六等官内二級之俸禄

右は侍医之内御匕之儀は、兼て致劬労候付、別段之御吟味を以右之通俸禄被成下候旨、被
仰達候条、知家事江申渡、向々江可申渡候、

明治二年巳五月廿二日　　知政所

八等官級

一弐拾八俵　　一三拾四俵
一三拾九俵　　一四拾五俵

九等官級

一弐拾五俵　　一三拾俵

一三拾五俵　　一四拾俵
右之通俸禄等級被相改候旨被
仰達候条、此旨向々江可申渡候、
明治二年巳五月廿二日　　知政所

三〇一ノ二
一道具預
右十一等官ニ被召建道具方属下
右之通被召建候旨被　仰達候条、知家事其外可承向江
可申渡候、
明治二年巳五月廿二日　　知政所

三〇二　弾正台ヲ置キ吉井友實大忠トナル

コノ日、弾正台ヲ置カレ、吉井友實大忠ト為ル（本文記載なし）

三〇三　宮里繁之輔外四名医学校ニ入学ス

コノ日、東京ニテハ、宮里繁之輔外四名医学校ニ入学ス、
一　宮里繁之輔
吉水豊之介
梅元郁太郎
兒玉東一
田中貫一郎
右医学校江五月廿二日より入寮之事、

三〇四　東京大病院医師石神良策・山下弘平ヲ諸生教導ノタメ本藩ニ帰スコトヲ許サル

二十三日、東京ニテハ大病院出役医師、石神良策・山下弘平ヲ本国ニ下シ、諸生教導ニ任セシメンコトヲ請ヒ、許可セラル、其ノ願書左ノ如シ、

一　石神良策
山下弘平

右は国元之義、是迄医道不相開候付、追々取興候積御座候処、学術相心得諸生教導方等仕候程之者一人も無之候間、此涯差下何篇為致指揮度御座候、就ては両人も当分御役所出役中之義ニて、如何ニも恐多奉存候得共、医道之義は人命ニも致関係、暫時も難捨置義ニ付、無余義一往御暇被下候様、可奉願旨申付越候、此段申上候、以上、

御官名内

五月廿三日　田中清之進

大病院

御役所

一　鮫島誠蔵

叙従五位下

右

宣下候事、

五月　行政官

三〇五　藩士鮫島誠蔵辞令四通ヲ届出ツ

藩士鮫島誠蔵、曩時外国官判事ヲ命セラレ、次デ東京府判事ヲ兼任シ、従五位下ニ叙セラレシガ、コノ日改メテ東京府判事ニ任セラレシ旨ヲ届出デタリ、ソノ辞令左ノ如シ、

一　鮫島誠蔵

外国官判事被

仰付候事、

四月　行政官

一　鮫島誠蔵

外国官判事被免、東京府判事更ニ被

仰付候事、

五月　行政官

右四通被仰付候旨、当人より申出相成候事、

但位之儀御辞退申上候得共、御取揚無之段も申出候事、

巳五月廿三日

一　鮫島誠蔵

当官ヲ以、東京府判事被

仰付候事、

五月　行政官

三〇六　朝廷外国交際以下三件ニツキ諮問ヲ発シ在京内田仲之助奉答ス

二十五日、朝廷外国交際、藩知事任命、及ヒ理財法ニツキ諮問ヲ発セラレ、二十八日ニ至リ、在京ノ重臣内田仲

之助ヨリ奉答セリ、ソノ諮問及ヒ奉答ノ書左ノ如シ、

一夫宇内ニ国スルモノ、内外親疎ノ別アリト雖トモ、安ンソ相往来セサルノ理アランヤ、既已ニ往来ス、亦盟約ノ信ヲ固クセサルヘカラス、故ニ信義ヲ尋ネ、条理ヲ追ヒ、愈以独立自主ノ体裁ヲ確立候儀、交際上ノ準的ト被　思召候間、意見無忌憚可申出候事、

五月

一版籍返上之儀、追々衆議被聞食候処、全ク政令一途ニ出ルノ外無之、依テ府藩県三治ノ制ヲ以テ、海内統一可被遊御旨趣ニ付、改テ知藩事ニ被任候

思食ニ候間、所存無忌憚可申出候事、

五月

一理財之道ハ経国之要務ニシテ、人心之離合風俗之厚薄ニ関係シ、至重之事ニ候、嚮キニ幕府之衰ル、理財其道ヲ失ヒ、用度不節、新貨屢製シテ、府庫愈空シク、外ハ各国ノ債ヲ負ヒ、内ハ私鋳之弊ヲ生シ、殆ント矯救スベカラザルニ至ル、一旦朝廷其疲弊之甚ヲ受ケ、続テ東北之軍費莫大ニ及ヒ、楮幣御発弘相成候得共、国債私鋳之害上下之困迫、此極ニ至リ、量入為出之御目的スラ未相立、然ルニ外国交際日ニ開ケ、貿易月ニ盛ニ、此時ニ膺リ会計之基礎不相立候テハ、

皇国御維持之儀、如何可有之哉ト、深ク御憂慮被為在、今度上下同体政令帰一之　思食ヲ以テ、偏ニ全国之力ヲ合セ、従来之弊害ヲ矯救シ、富国強兵之本ヲ被為開度、就テハ条目ヲ以テ、御下問被為在候間、各意見可申出候事、

一悪金銀之事、

右私鋳厳禁之法并贋金通用停止之始末、

一内外国債之事、

右利息之法并返済之始末、

一歳入歳出之事、

右別紙之不足ヲ補ヒ、并凶荒ヲ救ヒ不虞ニ備ルノ始末、

五月

別紙

歳入

凡惣高七百九拾弐万五千石余
此免凡弐分五厘ニシテ、米百九拾八万千三百五拾石
余
内
歳出
一禁中
一皇太后宮
一後宮
凡現米拾五万石
一神社営繕
凡現米三万石
一行政・神祇・外国・刑法四官、弾正台・公議所・待詔局共
凡現米拾弐万石
一民部官水利・橋梁・駅逓・牧牛馬・物産其外入費
凡現米拾五万石
一会計官造幣・鉱山・営繕・百官旅費其外用度
凡現米拾三万石
一軍務官海陸軍用費
凡現米三拾万石
一学校及開成所
凡現米五万石
一病院・貧院
凡現米六万石
一製鉄所
凡現米七万石
一諸官月金
凡現米弐拾弐万石
一京都・東京・大坂三府
凡現米拾万石
一諸県月金諸費養廉
凡現米拾五万石
一宮・公卿及中下大夫其外俸禄
凡現米拾七万石
一降伏人及貧民等御扶助
凡現米拾弐万石
一内債元債三百五拾万両、一ケ年一割利分
凡現米八万石
一外債元債六百万両、一ケ年一割利分
凡現米拾三万石
一現米六拾六万六千六百六拾石余内外債三千万両十ケ年済

一賞典
高百万石此現米弐拾五万石
一非常予備
一臨時入費
凡現米三拾万石
合現米三百弐拾四万六千六百六拾石余
出入差引不足
現米百弐拾六万五千三百拾石余
別ニ諸税アリト雖トモ、未タ其実ヲ審ニセス、今
此ニ略ス、
右御呼出ニ付、重臣代田中清之進罷出候処、松(詮、平戸藩主)浦肥前守様を以、御渡相成候事、
巳五月廿五日

一理財之道、深
御憂慮被為在、御条目を以御下問之次第、奉畏候、会
計之義は普く時務ニ通達仕候者ニ無之候ては、容易難
申上義ニて、勿論差当り見込相付候義も無御座候、宜
御執
奏可被下候、猶早々国元江申遣、少将存寄も候ハヽ、
可申上と奉存候、以上、
御官名重臣
五月廿八日　内田仲之助

三〇七　函館出張ノ西郷以下ニ東京ニ凱旋スヘキヲ達スレトモ、既ニ一部ハ国元ヘ出発ス

コノ日、函館出張ノ西郷以下ニ皇居御用ニ付、東京ヘ凱旋スヘキヲ達セラレタレトモ、既ニ敵降伏帰国ノ後ニテ、一部分ハ海路国元ヘ出発セリ、
三〇七ノ一　薩州藩
西郷吉之助管轄之兵隊、当節函館出陣ニ候処、
皇居御用被為
在候ニ付、凱陣之節は、吉之助并兵隊共直ニ東京江凱
旋可致旨、可申遣候、此段申達候事、
五月　軍務官
三〇七ノ二　西郷吉之助
一
其方并管轄之兵隊共凱陣之節は、
皇居御用被為在候ニ付、直ニ東京江凱旋可致候、此段

申達候事、

五月　　軍務官

右弐通五月廿五日御呼之上、小國覺之助より、被相渡候事、

三〇七ノ三

一其藩箱館ヨリ致凱旋候隊長御用候条、明三日巳之刻参官可有之候様、可相伝事、

軍務官

六月二日　　応接方

薩州藩

外ニ略ス

右公用人中

三〇七ノ四

一西郷吉之助并管轄之兵隊共、

皇居御用被為在候付、御当地江凱陣仕候様、御達之趣承知仕候、然処賊徒降伏、追々官兵も帰陣之旨承申候間、右御達書出兵先江差遣候ても、迚も間ニ逢兼可申候付、御当地へ凱陣之上、相達候様可仕候間、被聞召置度、此段申上候、以上、

御官名内

六月朔日　　田中清之進

軍務官

御役所

右時任清左衛門より、軍務官書記竹中諏蔵へ差出候事、

三〇七ノ五

一箱館出兵被仰付置候弊藩兵隊、皆着仕候間、此段御届申上候、以上、

御官名内

六月五日　　田中清之進

軍務官

御役所

三〇七ノ六

一海路より箱館出兵被仰付候西郷吉之助并管轄之兵隊、彼地到着之処、賊徒降伏後ニ付、直様国元へ帰帆仕候段申来候間、此段御届申上候、以上、

六月五日　　御官名内

田中清之進

軍務官

御役所

右弐通共、田中清之進より応接方加茂水穂へ差出候

事、

三〇八　本営ヨリ函館帰還日程並酒肴料下賜ヲ達ス

一五月廿五日二字、フシヤマ号洋船江乗艦之事、
一同日、御国元より三月十一日并四月六日、五月朔日日付之御状之通、於船中相達安心候事、
一同廿六日、箱館港江滞船之事、
一同廿七日十字箱館港出艦之事、
一六月朔日二字、品川沖着艦、直ニ上陸、田町六丁目立宿、夜五字発軍ニて、十一時深川邸江着之事、
一御酒肴料四拾三両壱歩壱朱
　但壱歩三朱ツ、
　　田原彌七郎
　　外九拾八人
右之通夫卒ニ至迄、無等級頂戴被仰付候条、配当可有之候事、
六月五日　　本営

三〇九　藩庁地頭副役ノ四等官ヘ変更ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、地頭副役ハ藩治職制ニテ六等官ニ規定シタレトモ、四等官ニ変更スヘキヲ達ス、ソノ書左ノ如シ、
一地頭副役
　四等官
右は六等官ニ候得共、御吟味之訳有之、右之通官等被召替候旨、被仰達候条、向々江可申渡候、
明治二年巳五月廿五日　　知政所

三一〇　藩士朝職ニ就ク時ハ其ノ藩諮問ノ上採用スヘキヲ達ス

二十七日、従来藩士ノ朝職ニ就ク時ハ、予メ其ノ藩ニ懸合ナク採用セラレタレトモ、尓後ハ諮問ノ上採用スベキヲ達セラル、其ノ書左ノ如シ、
一今後藩士被召候節は、何等之官員へ

御登用可相成旨、一応御尋之上被
仰付候間、其段為心得相達候事、
但是迄御尋無之御登用相成候分、於其藩不都合之筋
も有之候ハヽ、無遠慮可申出候事、
五月　　行政官
右官掌を以御渡相成候旨、月番因州外弐藩より申来
候事、
巳五月廿八日

三一一　藩庁従来ノ絵師ヲ廃シ新ニ絵師・絵師助
ヲ置ク

二十八日、藩庁ニテハ従来ノ絵師ヲ廃シ、新ニ絵師并ニ
絵師助ヲ置ク、其ノ達書左ノ如シ、
一絵師
右十等官
一絵師助
右十一等官
右之通官等被召建、営繕方属下被仰付、是迄之絵師
都て被廃候旨、被
仰達候条、向々江可致通達候、
明治二年巳五月廿八日　　知政所

三一二　藩庁軍政設置ニ付小番以上ノ家ヲ外城ニ
復帰セシムヘキヲ達ス

コノ月、藩庁ニテハ、従来小番以上ノ家ニハ、附衆中ヲ
置カレタレトモ、軍政設置ニ付、外城ニ復帰セシムヘキ
ヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、
一大身分及ヒ寄合并小番家筋江附衆中被
仰付来候得共、今般御軍制御治定、外城之士気御勉励
被仰付候砌柄ニ付、以来被相廃、都て常之衆中ニ被
仰付候旨、被
仰達候条、地頭其外可承向江可申渡候、
明治二年巳五月　　知政所

〔稿本表紙〕

明治二年
六　月　忠義公史料　六

〔稿本にて補正〕

三一三　詔シテ島津久光・忠義以下ノ功ヲ賞ス

二日、詔シテ久光公・忠義公勤王ノ功ヲ賞セラレ、久光公ヲ権大納言従二位ニ、忠義公ヲ参議従三位ニ叙任セラレ、禄十万石ヲ永世下賜セラル、西郷隆盛以下亦行賞各々差アリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

三一三ノ一　詔書

朕惟、復皇道之衰、済天下之溺、一資汝有衆之力、而其建節巖疆、宣威遠方、難苦尽瘁無所不至、朕切嘉奬之、乃頒賜、以酬有功、顧前途甚遠矣、厥克翼賛大成、朕益有望汝有衆、汝有衆其懋哉、

明治二年己巳六月二日

三一三ノ二

島津宰相中将
島津少将

積年　勤王之称首ト為リ、大兵ヲ挙ケ、断然力ヲ朝廷ニ尽シ、戊辰之春伏見一戦、大ニ賊胆ヲ破リ、天下人心ノ方嚮ヲ決シ、続テ東北諸道ニ出兵シ、毎戦取捷、竟ニ今日平定ノ偉功ヲ奏シ、奉安宸襟候段、洵ニ　国家ノ柱石ニ被　思食叡感不斜、仍テ為其賞官位昇進、禄拾万石下賜候事、

六月　行政官

三一三ノ三

嶋津少将

高拾万石

依勲功、永世下賜候事、

明治二年己巳六月　御朱印

三一三ノ四　叙任宣下

任権大納言　　島津宰相中将
叙従二位
右
宣下候事、
明治二巳六月　　行政官

三一三ノ五

任参議　　島津少将
叙従三位
右
宣下候事、
明治二巳六月　　行政官

三一三ノ六

積年勤　　西郷吉之助
王之志不浅、丁卯以来大政復古之盛業ヲ賛ケ、続テ参謀之命ヲ奉シ、東京城ヲ収メ、其後北越ニ出張、軍務励精、指麾緩急、其図ニ中リ、竟ニ成功ヲ奏シ、奉安宸襟候段
叡感不斜、仍為其賞弐千石下賜候事、
六月　　行政官

別紙　　西郷吉之助
高弐千石、依勲功永世下賜候事、
明治二年己巳六月

三一三ノ七

吉井幸輔（友実）
多年勤　王之志不浅、大政復古之盛業ヲ賛ケ、続テ北越出張、軍務励精、指揮其宜ヲ得、竟ニ成功ヲ奏候段
叡感不斜、仍為其賞千石下賜候事、

吉井幸輔
高千石、仍軍功永世下賜候事、
明治二年巳六月

三一三ノ八

伊地知正治
戊辰正月以来、参謀之命ヲ奉シ、軍務勉励、万変応機、画策得其宜、今日平定之功ヲ奏シ、奉安宸襟候段、

叡感不斜、仍為其賞千石下賜候事、

巳六月　　行政官

伊地知正治

高千石、依軍功永世下賜候事、

明治二年巳六月

三一三ノ九

大山格之助〔綱良〕

戊辰之春以来、参謀之命ヲ奉シ、奥羽出張、諸藩反覆ニ依テ賊中ニ陥リ、大節ヲ以テ兵気ヲ鼓舞シ、千辛万苦益奮励、竟ニ奏功ニ及候段

叡感不浅、仍為其賞八百石下賜候事、

巳六月　　行政官

大山格之助

高八百石、依軍功永世下賜候事、

明治二己巳六月

三一三ノ一〇

海江田武治信義〔次〕

戊辰正月参謀之命ヲ奉シ、海道ヲ下リ、軍事精勤之段、神妙被　思食、仍為其慰労、目録之通下賜候事、

目録金千両

三一三ノ一一

堀　直太郎〔為影〕

戊辰之夏、参謀之命ヲ奉シ、奥州ニ進ミ、軍務励精尽力之段、神妙被　思食、仍為其慰労、目録之通下賜候事、

目録金千両

三一三ノ一二

本田彌右衛門親雄

戊辰之秋、参謀之命ヲ奉シ、於北越督府出仕、軍事精勤之段、奇特被　思食、仍為其慰労、目録之通下賜候事、

目録金三百両

三一三ノ一三

高崎左京正風
井上石見長秋　各通

戊辰正月、参謀之命ヲ奉シ、伏水之役大坂出張、大儀ニ被　思食、仍為其慰労、目録之通下賜候事、

目録金百両

三一三ノ一四　和田五左衛門

昨年賊徒掃攘之砌、軍務勉励、職掌ヲ尽シ候段叡感不浅、仍為其賞弐百五拾石下賜候事、

巳六月　行政官

和田五左衛門

高弐百五拾石、依軍功永世下賜候事、

明治二年六月

三一三ノ一五　中村半次郎〔桐野利秋〕

昨年賊徒掃攘之砌、軍務勉励、職掌ヲ尽シ候段叡感不浅、仍為其賞、弐百石下賜候事、

巳六月　行政官

中村半次郎

高弐百石、依軍功永世下賜候事、

明治二年六月

三一三ノ一六　昨年賊徒掃攘之砌、軍事精勤之段、奇特被　思食、仍為其慰労、目録之通下賜候事、

金四百両　島津　登

同　村山源七

同　樺山仲左衛門

金三百両　西郷慎吾

金百両　有馬意運

金弐百両　西　直八郎

同　岸良彦七

大河原作兵衛〔平弥〕

三雲為一郎

三一三ノ一七　島津淡路守〔忠寛〕

累年勤　王之志厚ク、丁卯以来宗藩ト協力、兵ヲ京都ニ出シ、続テ東北諸軍ニ合シ、殊死奮励、毎戦奏功、藩屏之任ヲ尽シ候段

叡感不斜、仍テ為其賞、三万石下賜候事、

三一四　在京新納嘉藤二、昨年末京都ヨリノ凱陣者ノ総人員及其ノ給与金高ヲ報告ス

コノ日、在京都新納嘉藤二ヨリ、昨年末京都ヨリ本国マテノ凱陣者ノ総人員、及ヒ其ノ給与金高ヲ藩庁知政所ニ報告セリ、其ノ書左ノ如シ、

上申書

一兵員三千百拾五人
一夫卒千弐百弐拾八人
総計四千三百四拾三人
但
京都ヨリ御国許迄弐百弐拾七里半
一金札四万千弐百廿四両三分弐朱
銭四百五拾文
右去十二月廿五日御届相成候処、本行之通御金被下候、
一兵員千三人
一夫卒三百八拾九人
総計千三百九拾弐人
但書同断
一金札一万六千三拾九両壱分弐朱
永三拾六文九分
此銭三百弐拾文
右去十二月廿五日後追々凱陣致シ、当四月十五日御届相成候処、本行之通御金被下候、
右ハ昨年諸道出兵凱陣帰休之兵隊、京都ヨリ国邑迄諸御賄下給候付、上下総人員書差出候様、被仰渡置候付、右之通両度御届相成候処、本行之通御金御下渡相成候、右御金之儀ハ、爰元御蔵本立相成、諸御払用ニ被振向候間、此段申上越候、以上、

六月二日　　新納嘉藤二
知政所

三一五　諸郷旧来ノ曖・与頭・横目等ノ職名ヲ廃シ、漸次軍政組織ニ改ム

コノ日、藩庁ニテハ、諸郷旧来ノ曖・与頭・横目等ノ職名ヲ廃シ、漸次軍政組織ニ改メ、分隊長以上ハ城下同様ニ任命シ、地頭并ニ同副役ノ命ヲ受ケ、政治ヲ執行セシムヘキ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一此節職制御治定ニ付、諸郷之儀軍政を寓し、地頭をして其治教を提督せしめ候様、当三月被　仰達置候付、兵隊被召建、曖・与頭・横目等之職名被廃、分隊長已上之儀、御上下同様被仰付、諸御用向等地頭并副役等

之下知を受、何篇是迄之通相勤候様被仰付候、
但各郷追々軍政御取興可相成事候間、政度被相替迄之間、曖・与頭等都て是迄之通可相心得候、左候て兵隊被召建候付ては、軍務局より郷々差入之上、地頭并副役引合取調候様被仰付候、
右之通被　仰達候条、地頭并軍務局総裁江申渡、可承向江も可申渡候、
明治二巳六月二日　　知政所

三一六　藩庁従来ノ身分ニヨル諸勤務ヲ尓後ハ止メル旨ヲ達ス

四日、藩庁ニテハ、従来諸勤務ハ身分ニ応シ、年功勤労ニテ命セラレタレトモ、尓後身分ニ拘ハラザル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、
一是迄諸向勤方之年功勤労を以、身分品能被仰付候も有之候得共、此節御制度御新ニ付ては、向後文武并軍功之外、平常之年功勤労ニては、身分御取訳不被仰付、其功労ニ応し加増等被仰付候、尤才器徳望抜群有之、被召出候儀は、別段之事候条、向々江可申渡候、
明治二年巳六月四日　　知政所

三一七　島津忠義藩ノ軍艦春日丸及乾行丸ヲ朝廷ニ献上センコトヲ願出ツ

五日、忠義公藩ノ軍艦春日丸及ヒ乾行丸ヲ、朝廷ニ献上センコトヲ願出セラル、其ノ願書及ヒ指令左ノ如シ、
三一七ノ一
臣忠義頓首再拝謹
案するに、文武相須ち、恩威兼行るゝハ治国之要務なり、苟も
朝廷天下を鎮服するの威なくんハ、深仁厚沢何を以て下黎庶に覃及せんや、今や大政維新、号令帰一、大に国礎を被為立之時に当り、兵戎備虞之制今日の急務にして、
皇基隆替の係る処と奉存候、況や海軍之忽にすへからさる、不待論儀に御座候、当藩従来所持之軍艦春日丸・乾行丸、謹て奉献仕候、脆小の製、万一の裨助ニ相成申間敷奉存候得共、兼て版図奉還も奉願置候とて、固より一藩の私有する訳ニ無之候間、臣の微誠　照鑒を賜ひ、御垂納被成下度、伏て奉懇願候、臣忠義誠恐再

拝以聞、

六月五日　　島津少将忠義

右封之侭田中清之進より、御国元より到来之旨演説之上、官掌へ差出候処、権弁事土方五位受取相成候段承届候事、

巳七月五日

三一七ノ二　　鹿児島藩知事

軍艦献上願出之趣神妙之至、

御満足被

思食候、然る処海軍之御規則御取調中ニ付、追て何分之

御沙汰可有之候事、

七月〔二十日〕　　太政官

右御呼出之上、多久少弁より七月廿一日相渡候事、

一献艦願之通被仰付候趣ハ、次ノ御用帳ニ有之候事、

三一八　賞典禄ハ御蔵米ヨリ支給スヘキヲ達ス

コノ日、朝廷ヨリ賞典禄ハ、御蔵米ヨリ支給スヘキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

今般賞典ニ付下賜候石高之儀ハ、御蔵米ヲ以テ被下候間、為心得相達候事、

但分積之儀ハ追テ　御沙汰可有之事、

〔六月五日〕

三一九　藩庁散高買求メ居ル者ハ一石二百貫文ニテ売払、制限外ノ購入ヲ禁スル旨達ス

コノ日、藩庁ニテハ、軍役高・領地高ノ外ニ散高買求居ル者ハ、此ノ際親戚以外ノ者ニ相対ヲ以テ、一石二百貫文限ニテ売払ヒ、七月限ニテ結末ヲ付ケ、尓後制限外ノ購入ヲ禁ズル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一御軍役高割之儀は一昨卯年被相定、現一所持高之儀は、是迄之通被仰付置候得共、猶又御吟味之訳有之、領地高之外追々諸士散高買求居候面々は、此涯相対を以売払候様、且一所之地被下置候砌、散高被召附候分は、可為是迄之通旨被　仰達候、就ては高場所善悪も有之筈候得共、壱石弐百貫文限ニて可売払候、左候て百石以上持高有之者は、此節売高相片付迄之間高相求候儀、

并百石以下ニて高相求候面々も、百石以上相求候儀は不相成候、

一右高売払ニ付ては、親類縁者之間致売買候儀、屹と不相成候、万一心得違致売買候者は、御吟味之上其高取揚可申付候、

右之通被仰付候条、聊心得違之儀共有之間敷候、此旨向々江可致通達候、

但伊勢雅樂・鎌田仙十郎儀、持切在之外諸士散高は、本文同様都て可売払候、且此節高売買ニ付ては、当七月限精々致引結届可被申出候、

明治二年巳六月五日　　知政所

三二〇　城下任職者及ヒ無役者ノ非常鐘令ノ法ヲ定ム

コノ日、又藩庁ニテハ、城下任職者及ヒ無役者ノ非常鐘令ノ法ヲ定ム、其ノ達書左ノ如シ、

一非常之節、早鐘之令有之候ハヽ、任職之面々は早々勤場へ罷出、夫々局之惣裁指揮可有之候、無役之面々は、上方限は福昌寺、下方限は南林寺江屯所被定置候条、各救応之心得ニて、腰兵粮用意いたし、四度目之鐘令ニて着到相記、一同相円可罷在候、左候ハヽ、軍務局指揮役之者差向、実戦之場合且護衛之場所等指揮可致候、

但焚出之儀は糧餉役受持、尤人数之儀は、両屯所江差向、徇達江引合夫々御手当可有之候、

右之通被定置候条、向々江可申渡候、

明治二年巳六月五日　　知政所

三二一　軍治各官其ノ他ノ服装容儀ヲ規定ス

コノ日、又藩庁ニテハ、軍治各官其ノ他ノ服装容儀ヲ、各々其ノ資格職分ニ応シテ規定シ、朝廷ノ制度定マル迄、之ヲ実施セシム、其ノ達書左ノ如シ、

一服制容貌之儀は上下を弁し、民志を定め、王制之根本故、朝廷ニおゐて、追々御沙汰之趣も有之、自然一定之朝制可被　仰出候得共、差当上下之弁別等不相立候ては、衆之耳目を混乱せしめ、風俗不正之基候条、軍治之各官其外資格職分ニ応し、服容左之通、

一御城下常備兵
右平常戎服、在宿ニは勝手たるへし、
惣髪・乱髪、
右士分以上左片腕ニ幅一寸五分、白地を以輪印をいたし、平日之服何色ニても不苦、
一御城下予備隊士分
右平常戎服、乱髪・惣髪勝手次第、
一台場兵、戎服、乱髪・惣髪勝手次第、
一楽隊
右常備隊之者は都て戎服、左片腕ニ赤地を以、輪印をいたし可申候、
但予備楽隊都て乱髪、戎服勝手次第、
一治事局之面々并御城下外城無役士以上
一医師之面々
右戎服、乱髪・惣髪之儀は可為勝手候、
一附士并足軽
一私領并寄合家来
右追々常備兵江被召加候節は、別段ニ候得共、右江関係無之者は、戎服、乱髪・惣髪屹と不相成候、中すりを弐寸位明ケ可申候、
但致実戦候兵士之儀は、惣髪・乱髪、印無之戎服相用候儀不苦候、
一大工其外諸職人
一諸向手伝
右脇差迄帯候様被仰付候、戎服、惣髪・乱髪屹と不相成候、尤諸職人之内衆中家来等身分之者も有之候得共、当職ニ付て右之通被仰付候、
但中すりを四寸位明け可申候、
一寄合并諸士之家来下人
但主人供いたし候節は、脇差帯候儀不苦候、中すり右同断、
一百姓　一町人
但町役脇差を帯候儀、是迄之通、中すり右同断、
一寺門前者
右戎服、惣髪・乱髪は勿論、帯刀いたし候儀屹と不相成候、中すり右同断、
右之通被定置候条、追々士分以上之儀、戎服を以常服と心得可申候、左候て朝廷御勤事ニ関係いたし候儀、当分之内是迄之通相心得候様被

仰達候旨、軍務局総裁江申渡、向々江早々可申渡候、
但支配頭・主人等より不洩様、厳敷可申渡候、若シ不守之者於有之は、支配頭・主人ニも落度たるへく候、

明治二年巳六月五日　　知政所

三二二　寺院ニ対シ粗暴ノ挙動ナキ様達ス

コノ日、又藩庁ニテハ、今回仏葬ヲ神葬ニ改メラレタルニ付、寺院ヲ廃セラレタル者ト誤認シ、粗暴ノ挙動ニ及ブモノアルヤニ聞ユ、寺院ニハ御先代ヨリノ墓所・位牌等モ存在スルコトナレバ、不敬ニ陥ラザル様、注意スベキヲ達ス、其ノ文左ノ如シ、

一今般　御前様御逝去ニ付、御神祭相成、其後　御城内護摩所御看経所等御取除相成候処、如何様寺院悉被廃候様相心得候哉、近比猥ニ寺地江踏入、粗暴之振舞いたし候者有之哉ニ相聞得候、抑寺院之儀は、御先代様御墓所・御位牌等も被建置、御崇敬被為在候儀ニ候得は、興廃ニおゐてハ不容易儀ニ候処、全軽卒之心得より、前文之次第ニも相及、御先霊ニ被為対屹と不相済訳候間、向後右体心得違之儀曽て無之様、向々江早々可申渡候、

明治二年巳六月五日　　知政所

三二三　寧姫近衛忠房養女ノ儀許可セラルヲ達ス

六日、寧姫君（斉彬公御息女）、近衛前左府忠房公養女ノ儀許可セラレ、之ヲ藩内ニ達シ、一門大身分并ニ任職ノ人々ハ、久光・忠義両公ニ祝詞ヲ述ブベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

三二三ノ一
一寧姫様御事、　近衛前左府様御養女被遊度御願相成候処、去ル六日御願之通被為済候付、御順之儀宰相様御次、諸書附等此様文字相用候様被　仰達候、此旨向々江致通達、地頭・領主江可申渡候、

明治二巳六月　　知政所

三二三ノ二
一寧姫様御事、　近衛前左府様御養女御願之通、被為済候付、御一門方并諸大身分其外任職之面々、明廿四日登城伝事江相付、　御両殿様江御祝儀可被申上候、外略

ス、

明治二年巳六月廿三日　　知政所

三二四　医院ノ改良ヲ計ル為メ従来ノ医院ヲ廃シ諸医官ヲ免スル旨ヲ達ス

七日、藩庁ニテハ、医院ノ改良ヲ計ル為メ、従来ノ医院ヲ廃シ、諸医官ヲ免スル旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一医院之儀、追々名実相当御手被召付候付、御吟味之訳有之、只今之医院被廃候、諸医官之面々被免候旨被仰達候条、向々江可致通達候、

明治二年巳六月七日　　知政所

三二五　函館出軍兵ノ内銃隊二小隊砲隊半小隊ハ東京ヘ着シ、他ハ国元ヘ帰帆セリ

八日、函館出軍兵ノ内銃隊二小隊・砲隊半小隊東京ニ着シ、他ハ直ニ国元ヘ帰帆セリ、其ノ関係書類左ノ如シ、

一銃隊二小隊
一砲隊半小隊
惣員三百九人
内隊長より兵士迄弐百弐拾五人
夫卒八拾四人

右は函館表より此節御当府迄凱陣之人数、右之通御座候間、此段御届申上候、以上、

御官名内
六月八日　　田中清之進
軍務官
御役所

右時任清左衛門より応接方加茂水穂へ差出候処、受取相成候事、

三二六　本藩ヨリ登用セラレタル人員中、都合ニヨリ免職願ノ者ノ許可ヲ求ム

九日、東京ニテハ、従来本藩ヨリ登用セラレタル人員中、別紙ノ者ハ都合有之免職相願度、国元ヨリ申来リタルニヨリ、許容下サレ度旨ノ願書差出シタリ、其ノ別紙并ニ願書、及ビ指令左ノ如シ、

三二六ノ一　是迄弊藩より被召出御登庸相成候内、別紙之人数差支

之儀御座候付、免職之上御暇被成下度奉願候、御撰用相成候上進退ニ相拘り候儀、容易難申上筋ニ候得共、今般公論を以　御国礎可被為建と之　御趣意ニて、御下問ニも預り、政之根本ハ其人を被為得候外、目的無御座趣、聊対答仕置候、乍恐是迄撰挙其当を不被為得候より、数弊相生し、御失体不少御儀ニ有之、自ら格別之　朝裁も可被為在事と奉存候得共、前途安危之決する処、只此際ニ止り候付、一藩之衆議を採り、再応加思慮候上言上仕候間、速ニ御許容被成下、普く賢材を被為求度、且願意之趣万一遅緩罷成候ては、大ニ人心ニ関係仕候儀ニ付、呉々も早急御許容被為在、免職御暇被下候様、遮て可奉願旨、国元より申越候、此段申上候、以上、

御官名内

田中清之進

六月九日

弁事

御役所

（朱書）御付紙

別紙附紙之通

御取捨相成候間、代リ人体早々可差出事、

別紙

（朱）「御用ニ付留置」

（朱）「取掛御用之儀有之ニ付凡五十日後被免候事」

（朱）「被免」

（朱）「被免」

（朱）「被免」

（朱）「被免候、代リ人体早々差出可申事」

（朱）「被免」

（朱）「被免」

（朱）「被免」

外国官判事　町田民部

右同　神奈川在勤　中井弘蔵

外国官御用掛試補　溝口吉左衛門

兵庫県権判事　喜多村慶二

越後府判事試補　東郷嘉一郎

東京府監察　安藤十郎

民部官出仕　有村壮一

制度取調御用掛　森金之丞

大隊司令　沖直次郎

右同

(朱)「代リ人体差出、其上被免候事」谷山武之輔
中隊司令
(朱)「被免」東郷六郎兵衛
右同
(朱)「被免」染川源之介
右同
(朱)「被免」東郷一介
小隊司令
(朱)「被免」梅北八郎右衛門
右同
(朱)「被免」朝稲宗右衛門
神奈川県出仕
(朱)「被免」有川矢九郎
右同
(朱)「代リ人体早々差出、其ノ上被免候事」佐々木次郎
武蔵艦
一等士官
(朱)「被免」伊東四郎左衛門
一等士官格
(朱)「被免」白尾采女

(朱)「被免」右同
松村孫一郎
二等士官
(朱)「被免」上野彦七
右同格
(朱)「被免」中村岩太郎
同
(朱)「被免」肝付伊右衛門
同
(朱)「被免」佐藤善之助
同
(朱)「被免」崎元計介
三等士官格
(朱)「被免」溝口太兵衛
越後府器械方
(朱)「被免」新納四郎右衛門
東京府臨時方試補
(朱)「被免候、代リ人体早々差出可申事」隈元仲介
外国官仕丁
(朱)「被免」橋口良助

右弁事伝達所へ田中清之進差出候処、官掌井上勝彌受取相成候事、

巳六月九日

弁事御役所より御呼出ニ付、時任清左衛門罷出候処、弁事坊城右大弁宰相様を以御渡相成候事、

巳六月廿一日

三二五ノ二　手扣

町田民部
中井弘蔵
谷山武之輔
佐々木次郎

弊藩より御登庸相成候人員免職之上、御暇被成下候様奉願上置候処、夫々以御付紙御達之趣、謹て拝承仕候、然処右人数之内、右通一応御差止等之者も有之、形行則国元江可申越筈御座候得共、此節之儀は、国論一定之上奉願候訳ニ御座候得は、左様ニも難仕、乍去直様押返奉願上候ては、　朝意遵奉不仕、不敬之筋ニ御汲取も難計、万々奉恐入候得共、全強願仕候趣意ニ無御座、元来千古未曽有之御時態、平ニ尋常之者勤職仕居、今日上之儀聊御用弁之一端を以、御差止被下候ては、実意人才御登庸とは乍恐難申上、

朝憲被為立候根元、兎角其職其器ニ当り不申候ては、従て

御政体挙申ましく、就中外国交際応接上ニ付ては、纔一言之行違より、

御国体之汚辱生候儀も可有之、左候得は関係する処甚大成訳ニて、不容易御失体罷成可申と、寡君父子日夜苦慮、一藩之衆許を採り、再応加思慮候上、確乎

御体裁被為立候様と之素心より、言上為仕儀ニ候得は、何卒国中公論を被為採、一統安堵仕候様奉願候、尤国論貫徹仕と不仕とは、乍恐私共之任ニ御座候間、今一往猶篤と事情御洞察御推愍被下置、仰願ハ断然御許容被成下度、左候て何方御用ニ付、人体取調差出候様、猶又

御沙汰被成下候ハヽ、則国元江至急申越候様可仕候、為国家不憚忌諱再応此旨歎願仕候事、

御官名内
内田仲之助
田中清之進

六月廿二日

右内田仲之助より木戸準一郎へ、猶又演説之上差出
置候事、

三二七　本藩凱旋ノ函館出軍兵ニ酒肴ヲ下賜セラル

コノ日、又東京ニテハ、本藩凱旋ノ函館出軍兵ニ酒肴ヲ下賜セラル、ソノ令達左ノ如シ、

薩州
兵隊

今般函館平定凱陣之趣被聞食、長々出張尽力之段、深感賞被為
在候、依之為
御慰撫不取敢目録之通、酒肴下賜候事、

六月　行政官

右之通被
仰出候間、申達候事、

六月　軍務官

一　目録
酒　三樽
肴　料金拾二両
以上

一　覚
酒　三樽
但四斗入
右之通薩州兵隊江渡方被仰付候事、

六月九日

三二八　内田政風所用ノ為帰国願出許可セラル

十日、東京ニテハ、公議人内田仲之助ヲ所用ノ為メ、一往帰国セシメタキ旨ヲ願出シタルニ、即日許可アリタリ、ソノ願書左ノ如シ、

内田仲之助

右は当分公議人申付、不容易職務中、甚以恐多奉存候得共、国事ニ付無拠至急不差下候て不叶儀御座候間、何卒速ニ一往御暇被成下度、左候ハヽ、用向早々相仕廻直ニ帰府為致候様可仕候、此段無余儀奉願候、以上、

御官名公用人
田中清之進

六月十日

公議所

右時任清左衛門より公議所書記へ差出候処、即日、

願之通可為事、

右之通御張紙ニて、被相下候事、

三二九　靖献霊社ヲ照國神社ノ傍ニ移転スヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、靖献霊社ヲ照國神社ノ傍ニ移転スベキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一靖献霊社

右御吟味之訳有之、

照國神社傍江御引直被仰付候旨被

仰達候条、神社奉行其外可承向江可申渡候、

明治二年巳六月十日　知政所

三三〇　本藩大砲隊ノ大砲打方叡覧ノ旨ヲ達セラル

十一日、東京ニテハ、明後十三日本丸跡ニテ、本藩大砲隊ノ大砲打方叡覧ノ旨ヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

薩州

大砲隊

来ル十三日、於本丸跡大砲打方

叡覧被

仰出候事、

朝七字号砲二声

御場所江出張、

八字号砲三声

出御、

但雨天御順延之事、

六月　軍務官

右御呼出之上、加茂水穂より相渡候事、

六月十一日

三三一　函館征討戦死者ノ招魂祭ヲ執行シ、出張兵ニ酒肴料ヲ賜ヒ帰国休兵ヲ命セラル

コノ日、東京田町邸ニ於テ、函館征討戦死者ノ招魂祭ヲ執行セシニ、出張兵隊ニハ酒肴料ヲ賜ヒ、帰国休兵ヲ命

セラル、其ノ書類左ノ如シ、
三三一ノ一 一明十一日朝七字三十分当御邸発、行軍ニテ於田町御屋敷招魂祭礼調練有之筈候間、各御承知可被成候、以上、
但大小砲砲発ニ不及候、
六月十日　本営
薩州
兵隊

三三一ノ二 今般函館平定凱陣之趣被聞召、長々出張尽力之段深感賞被為在、依之為御慰撫不取敢目録之通、酒肴下賜候事、
六月　行政官
右之通被仰出候条、申達候事、
六月　軍務官
目録
酒　三樽
肴　料金拾弐両
以上
一仝十一日、招魂祭礼相済、夫ヨリ長官以上酔月楼出張之事、

函館出張
薩州兵隊
三三一ノ三 北越出張以来、長々滞陣ニ相成候故、帰国休兵申付候事、
六月　軍務官
三三一ノ四 一金八百六拾九両壱朱
但東海道旅込料壱日壱人ニ三朱ツヽ、拾五日分、
一同弐百弐両弐歩
兵士三人間ニ壱人ツヽ之人足、六拾七人半、壱人賃金三両ツヽ、
一白米弐拾五石九斗五升六合
巳六月朔日より同十四日迄、壱日壱人ニ白米六合ツヽ、
一金弐百七拾両壱歩弐朱
日数同断、壱日壱人ニ壱朱ツヽ、
右弐行滞府中兵食料、
惣人員三百九人
内兵士弐百弐拾五人

夫卒八拾四人

合金千三百四拾弐両弐歩

右は今般凱陣之兵隊ニて御座候処、北越出張以来、長々滞陣ニ付、帰国休兵被仰付候旨、御達之趣奉承知候、就ては来ル十五日、出立為仕度御座候間、東海道旅込料并滞府中兵食料等、本行之通御下渡被下度、此段奉願候、以上、

御官名内

六月十三日　　時任清左衛門

軍務官

御役所

右応接方加茂水穂へ差出候処、米之儀は手形ニて金札共会計方より相受取候事、

三三二　従来ノ仏事供養ヲ改メ神祭トスル為メ、御魂移ノ祭礼ヲ行フヲ達ス

十二日、藩庁ニテハ、従来祖先ノ仏事供養ヲ改メテ、神祭トスル為メ、来ル十九日ヲ以テ、御魂移ノ祭礼ヲ行フベキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一御先霊様方是迄仏道を以、御祭相成来候処、此節より改て神道を以、御祭可被遊旨被　仰達候付、当月十九日　御城内　御神棚　御祖先御魂移之御祭被仰付候条、神社奉行江申渡、向々江も可申渡候、

明治二巳六月十二日　　知政所

三三三　請謁等ニテ職ヲ求ムルコトナキ様達ス

コノ日、又藩庁ニテハ、藩治職制御治定ニ付テハ、門地ニ拘ハラス、其ノ方器ニヨリ選用スベケレバ、請謁等ニテ職ヲ求ムルノ心得違ナキ様、注意スヘキヲ達セリ、其ノ達書左ノ如シ、

一職制御治定ニ付ては、諸官各其方器を以、門地等に不拘御撰用相成、御令条にも、官の為ニ人を求め、人の為に官を求めすと、被

仰出候処、間々内意等を以、任職願出候者有之哉に相聞得、甚不相済事ニ候、畢竟是迄請謁等を以、役儀被仰付候旧弊不相除、政綱不振様成立候処より、此節御一新ニも被及候処、間もなく右様心得違之儀有之候ては、御政体御変革之詮不相立、奉戻　御趣意、如何之

至候条、任職之面々は勿論、一統心得違不致様屹と可相心得旨、向々江可申渡候、

明治二巳六月十二日　　知政所

三三四　招魂祭執行ニ付、戦死者人数名前ヲ届出ツヘキ達ニヨリ、知政所ニ照会ス

十四日、東京ニテハ、去ル十一日近日招魂祭執行ニ付、昨春来追討ノ為メ、出兵セシ兵隊中ノ戦死者ヲ取調ベ、神祇官ニ届出ヅベキヲ達セラレタルニヨリ、コノ日知政所ニ照会セリ、其ノ書類左ノ如シ、

近々招魂祭被行候ニ付、昨春来為追討出兵之諸藩戦死届之儀、未相済向モ有之候ハヽ、急々取調神祇官ヘ可届出事、

六月〔十日〕　　行政官

弁事御役所ヨリ御呼出ニ付、時任清左衛門罷出候処、官掌南軍曹ヲ以御渡相成候、左候テ可成差急キ御届可申出旨、御口達承知イタシ候事、

巳六月十一日

近々招魂祭被行候付、昨春来戦死之名前神祇官ヘ可申出旨、別紙之通御達相成候付、今日ヨリ三日半届町便ヲ以大坂迄差越、夫ヨリ其御許ヘ至急相達候様申越候間、相達候ハヽ、御取調之上、早目ニ何分被仰越度、此段申上越候、以上、

巳六月十四日　　田中清之進

知政所

猶以昨年十二月十日、戦死人数名前被出候様、神祇官ヨリ御達相成、其節ハ京都知政所ヘ申上越候処、御国元ヘ被仰越候旨、御返答承知仕候、然処其後何共不被仰越、外藩々ハ最早御届為相済由ニ付、何分御取調之上、至急被仰越候様有御座度、此段モ申上越候、以上、

本文令承達、軍務局ヘ取調為致候処、別冊之通申出候付、今日三道中五日届仕立町便ヲ以差越候間、御届相成候儀共、何分ニモ都合能可取計候、此旨及返答候、以上、

但陣中病死之名前モ、別冊之通申出候間、相添差越候、

巳七月四日　　知政所

田中清之進殿

帳面ヘ仕立

一伏見戦死人数六拾弐人

内

五拾八人　士分

従卒ヨリ夫卒迄四人

一関東・奥州諸所戦死百五拾七人

一北越・出羽戦死弐百七拾四人

総合四百九拾三人

内

士分四百拾六人

従卒以下夫卒迄七拾七人

右同

一陣中病死四拾三人

内

士分弐拾八人

夫卒十五人

陣中病死名書ヲ失ス、

三三五　函館追討軍参謀黒田清隆并ニ同監軍岸良兼養賊徒平定ニ付職ヲ免セラル

コノ日、函館追討軍参謀黒田清隆了介并ニ同監軍岸良兼養彦七賊徒平定ニ付、其ノ職ヲ免セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

一　黒田了介

箱館賊徒平定致候付、参謀被免候事、

六月　軍務官

一　岸良彦七

箱館賊徒平定致候ニ付、監軍被免候事、

六月　軍務官

右応接方小國覺之助を以、御渡相成候付、即日当人共江相達候事、

六月十四日

三三六　昌平学校ヲ大学校ト称シ、開成・医学二校ヲ置キ、当時入学ヲ願出タル本藩士人名

十五日、東京昌平学校ヲ改メテ、大学校ト称シ、之ニ開成・医学二校ヲ属セシメラル、此ノ前後本藩士ニシテ、

入学ヲ願出セシモノ左ノ如シ、

三三六ノ一

弐拾歳　久保竹之助
弐拾壱歳　和田次郎左衛門
弐拾歳　澁江軍兵衛
拾九歳　左近允喜兵衛
弐拾壱歳　東條正右衛門

右は入学之志願御座候間、御免許被仰付被下度奉願候、以上、

御名内
田中清之進

六月六日
昌平学校
御役所

三三六ノ二

御名家来
廿三歳　肥後平八
廿三歳　最上孫左衛門
廿五歳　吉利吉之進
廿三歳　河島新之丞
十九歳　宮内雄蔵
十九歳　種子田清左衛門

右は昌平大学校江通稽古修業為仕度、此段奉願候、以上、

御名内
益山八右衛門

六月七日
昌平学校
御役所

三三六ノ三

十九歳　岩城少輔
廿五歳　南昭堅

右は入学之志願御座候間、御免被仰付被下度奉願候、以上、

御名内
隈元敬一郎

六月十八日
昌平学校
御役所

三三六ノ四

二十四歳　湯地藤次郎
十九歳　山本権兵衛
二十五歳　園田敬介

右は昌平学校へ通稽古修業為仕度御座候間、御免被仰

付被下度奉願候、以上、

六月廿三日　　御官名内
昌平学校　　益山八右衛門
御役所

【参照】

廿三歳　肥後平八
廿三歳　最上孫左衛門
廿五歳　吉利吉之進
廿三歳　河島新之丞
十九歳　宮内雄蔵
十九歳　種子田清左衛門

右は昌平学校江寄宿修業相願候処、此節満寮いたし候段承知仕、就ては御差支無之御場所有之候は、当分御考置被下、新寮御造営之上、順序を以寄宿被仰付度奉願候、以上、

六月七日　　御名内
昌平学校　　益山八右衛門
御役所

御官名家来

二十五歳　岩切喜次郎
二十一歳　有馬幹太郎
二十歳　有馬早右衛門
二十一歳　山本吉蔵
二十一歳　白石小次郎

右之者共、当分之内昌平大学校へ通稽古修業為仕度御座候間、御免被下度、尤新寮御成功之上、順序を以寄宿修行相成候様、此段奉願候、以上、

六月九日　　御官名公用人
昌平学校　　田中清之進
御役所

御官名家来

二十歳　久保竹之助
十九歳　左近允喜兵衛
二十一歳　東條正左衛門
二十歳　澁江軍兵衛
二十一歳　和田次郎左衛門

右は先達て入学之儀奉願置候、然処同家臣肥後平八外五人被召置候御場所、未明所有之趣承届申候、当分之内右江被召置被下度、左候て新寮御造営之上は、順序を以寄宿修業被仰付度、此段奉願候、以上、

六月十日　　御官名内　田中清之進

昌平学校
御役所

池田龍潜

右は医道為稽古方御当府へ罷出候処、医学校江入院修行致し度志願御座候付、御免被仰付被下度、別紙生国付相添、此段奉願候、以上、

鹿児島藩
公用人　田中清之進

巳六月廿一日

医学校
御役所

松田壮次郎

吉見佐一郎
松元美十
日高壮之丞
伊集院彦左衛門

右は医道為稽古医学校へ、通稽古修業為致度御座候間、御免被仰付被下度奉願候、以上、

鹿児島藩
公用人添役　益山八右衛門

七月五日

医学校
御役所

三三七　版籍奉還ノ請願聴許アリテ、島津忠義鹿児島藩知事ニ任セラル

十七日、版籍奉還ノ請願聴許アリテ、忠義公鹿児島藩知事ニ任セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

三三七ノ一　島津宰相

一今般版籍奉還之儀ニ付、深ク時勢ヲ被為察、広ク公議ヲ被為採、政令帰一之

思食ヲ以テ、言上之通被
聞食候事、
六月〔十七日〕　行政官
右大奉書半切、
右委細ハ往返之場ニ有之、

三三七ノ二　嶋津宰相
鹿兒島藩知事被
仰付候事、
明治一二年　御朱印　太政官印　己巳六月
右料紙大引合竪紙

三三七ノ三
一御折紙壱通
但藩知事被為蒙
仰候儀、
一御書附壱通
但版籍御返上之儀被
聞食候儀、
右は御用之儀有之候間、今日巳刻
御名代重臣差出候様、弁事御役所より御呼出ニ付、為
重臣代私被差出候処、於伝達所
輔相公御列席、弁事五辻弾正大弼様より被成御渡候付、
御国元江可申上旨申述置候、以上、
但今日は大方御大藩迄ニて、御在府之御方々ニは、
御参
朝之上、本文之趣御達、御在国之御方ニは、重臣
御呼出御達相成申候、
巳六月十七日　田中清之進
知政所
追て
御承知之上、御受被為在候ハヽ、私共御使者を以、
輔相公并五辻様江御受御礼被
仰達可然儀と奉存候間、何分被仰越度奉存候、此段
も申上越候、以上、

三三八　公卿・諸侯ノ称ヲ廃シ華族ト称セシム
コノ日、又公卿・諸侯ノ称ヲ廃シ、改メテ華族ト称セシ
メラル、ソノ達書左ノ如シ、
官武一途、上下協同之

思召ヲ以自今公卿・諸侯之称被廃、改テ華族ト可称旨被仰出候事、

但官位ハ可為是迄ノ通候事、

六月　　行政官

右之通先月十七日於東京被　仰渡候条、向々ヘ不洩様、諸縣郡并琉球其外諸島御管轄ノ儀、於東京公用人ヨリ奉伺候処、是迄之通可致管轄旨被　仰渡段、御到来候、此旨不洩様向々ヘ可申渡候、

七月　　知政所

三三九　政事施行上ノ諸件ヲ公用人ヨリ弁事役所ニ質問シ其ノ指令ヲ請フ

十八日、東京ニテハ、忠義公藩知事ヲ命セラレシニ付、公用人ヨリ政事施行上ノ諸件ヲ弁事役所ニ質問シテ、其ノ指令ヲ請ヘリ、其ノ事件及ヒ指令左ノ如シ、

今般宰相事、藩知事被仰付候付ては、自ら寡君承知之上奉伺趣も可有之候得共、取調之一端ニも可相成奉存候間、左之件々奉伺候、

一薩摩・大隅・日向国諸縣一郡之儀も管轄被仰付義ニ可有之哉、

〔朱〕「是迄之通可致管轄事」

一琉球其外諸島如何心得可申哉、

〔朱〕「同上」

一諸年貢税物金穀出入同断、

一諸産物同断、

一家柄之者夫々格式定置候処、今般公卿・諸侯被廃、華族と唱候様被　仰出候付ては、家格・給禄何様取計可然哉、

一執政以下諸役職筆者等、給禄且黜陟等同断、

一賞刑之儀、是迄一藩之規律立置候儀ニ御座候処、御政体一途帰候義ニ付ては、何様心得可申哉、

〔朱〕「先可為是迄之通事」

一士以上之者夫々高為取置候付ては、給禄宛行之儀、且会釈振等如何心得可申哉、

一居城并諸役所向、社寺修甫等如何取計可申哉、

〔朱〕「同上」

一京師并東京・大坂・長崎藩邸何様心得可申哉、

〔朱〕「同上」

一大坂其他国債同断、

〔朱〕
「同上」
一此近年臨時之費用追屯難行届処より、無拠領国限紙幣差出置申候、如何所置可仕哉、
一知家事以下家政向ニ付、陪臣之定何様心得可申哉、
一知家事以下自今役義差替等仕候節、士以上之者以人撰登庸仕候て可然哉、
一軍艦并蒸気運漕舟之義、何様心得可申哉、
〔朱〕
「同上」
右之通〔奉カ〕寺伺候間、何分早々御差図被下度此段申上候、
以上、

鹿児島藩
公用人　田中清之進

六月十八日
弁事
御役所

右官掌金谷敬二郎へ時任清左衛門差出候処、致落手候旨申聞候事、
〔朱〕
「六月廿八日御呼出ニ付、隈元敬一郎罷出候処、官掌金谷敬二郎を以、御張紙ニて御渡相成候事、
一御張紙無之件々ハ、左之御達取調申出候上、御沙汰可相成段も致承知候事」

三四〇　侍直助ヲ置キ八等官トスヘキ旨ヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、侍直助ヲ置キ八等官トスベキ旨ヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一侍直助
右八等官ニ被召建候旨、被仰達候条、知家事江申渡、向々江可申渡候、
明治二巳六月十八日　知政所

三四一　長崎府ヲ県ト為シ野村盛秀ヲ知事トナス

二十日、長崎府ヲ改メテ県ト為シ、長崎府判事野村盛秀ヲ以テ知事トナス、
七宗
六月二十日庚申
御沙汰書写　長崎府

其府自今長崎県ト被改候事、

三四二　東京・大坂府及ヒ神奈川県ニ通商司ヲ設ケラル

二十一日、東京・大坂ノ両府及ヒ神奈川県ニ、通商司ヲ設ケラレ、五代友厚(才助)ヲ神奈川県ニ出張セシメ、知事同様ノ取扱ヲナサシメラル、ソノ辞令書類左ノ如シ、

御沙汰書写

大坂府

今般通商司被設、山口五位・井上聞多等当官ヲ以テ、其府出張被　仰付候ニ付、判事同様取扱可致事、

六月二十一日

東京府

今般通商司被設、伊藤俊介当官ヲ以テ、其府在勤被仰付候ニ付、判事同様取扱可致事、

六月二十一日

神奈川県

今般通商司被設、五代才助当官ヲ以テ、其県出張被仰付候ニ付、知事同様取扱可致事、

六月二十一日

三都府諸開港場其他処々ヘ、府藩県ヨリ産物売捌ト唱ヘ、商会所取立、役人出張、米穀其外買シメ致シ、諸品追々不融通ニ相成、商民一般之難渋不少候、是迄一定之商律不相立候ヨリ、威権ヲ以テ、銘々勝手之商業取開、甚以不都合之事ニ付、此度会計官中通商司ヲ被建、追々商律御取設相成候間、右様之儀一切廃絶被仰付候、此旨相達候事、

〔六月二十二日〕

通商司

今般会計官中通商司ヲ置キ、追々商律ヲ可被為立タメ左之条件御委任候事、

一、物価平均流通ヲ計ルノ権

一、両替屋ヲ建ルノ権

一、金銀貨幣ノ流通ヲ計リ、相場ヲ制スルノ権

一、開港地貿易輸出入ヲ計リ、諸物品売買ヲ指揮スルノ権

一、廻漕ヲ司ルノ権

一、諸商職株ヲ進退改正スルノ権
一、諸商社ヲ建ルノ権
一、商税ヲ監督スルノ権
一、諸請負ノ法ヲ建ルノ権
右之件々御委任候間、三都府始メ諸開港場ヘ出張、地方官ヘ談合之上、施行可致事、
〔六月二十四日〕

三四三 西郷従道・山縣有朋英国留学ニ付中村博愛ニ通弁官トシテ同行ヲ命セラル

二十二日、西郷従道(真吾)・山縣有朋(狂介)英国留学ニ付、中村博愛(宗見)ニ通弁官トシテ、同行ヲ命セラル、ソノ辞令左ノ如シ、

中村宗見

西郷真吾・山縣狂介英国龍動府ヘ留学被　仰付候間、通弁官トシテ同行被　仰付候事、

六月二十二日

三四四 薩・長・土三藩精兵召集ノ議ヲ決セラル

二十三日、朝廷ニテハ、薩・長・土三藩精兵召集ノ議ヲ決セラル、

大久保利通日記

廿一日

無休日、十字参　朝、

一今日兵制一条ニ付、大村被召、段々御評議有之候、且長・土・薩三藩精兵被召候義、及大議論候、

一今夕副島ヘ参碁会也〔廿二日省略カ〕

廿三日

十字参　朝、大村(天)・井出(吉井)仕、種々及議論、三藩兵隊御召ハ御決定ニ候、兵制ノ義御治定甚六ケ敷候、

一今夜松方ヘ訪、小河（一敏）等集会ス、

三四五 伊東四郎左衛門・谷山武之輔等ノ役儀ヲ免スル旨ヲ達セラル

コノ日、海軍ニ於ケル伊東四郎左衛門并ニ陸軍ニ於ケル四・五大隊司令谷山武之輔・沖直次郎以下拾数名ノ役儀ヲ免スル旨ヲ達セラル、其ノ辞令左ノ如シ、

一　伊藤(東)四郎左衛門

是迄之役儀差免候事、

六月

軍務官

中村岩太郎
佐藤善之助
肝付伊右衛門
白尾采女
上野彦七
崎元計介
松村孫一郎
溝口太兵衛

右同断

一

沖直次郎

第五大隊司令申付置候処、差免候事、

六月

軍務官

第四大隊司令
谷山武之輔
第四大隊中隊司令
東郷六郎兵衛
第五大隊小隊司令
朝稲宗右衛門
第五大隊小隊司令
梅北八郎右衛門
第五大隊中隊司令
染川源之助

右同断

薩州藩

別紙之通役儀差免候条、夫々於其藩可相達候事、

六月

軍務官

右応接方加茂水穂を以御達相成候事、

六月廿三日

三四六　官職改定ニ付達書及ヒ下問ノ原案

二十四日、朝廷官職ヲ改定セラル、ニ付、衆議ヲ採用セラル、趣意ヲ以テ、御下問アリタリ、ソノ達書及ヒ下問ノ原案等左ノ如シ、

一大寶以降官名沿襲ノ久シキ、有名無実ノモノ不少、昨春更始之際、専ラ実用ニ被為基、職制ヲ被為設候得共、未タ其名ヲ被正候ニ暇無之、依テ今般旧官ノ名ニ拠テ、更始ノ実ヲ取リ、斟酌潤飾、別紙之通被相定、更ニ衆

議ヲモ被
聞食、職制一定、名実相適候様被為遊度
思食ニ付、銘々熟考、意見無忌憚可申出事、
六月〔二十三日〕

三四六ノ二 職員令

○神祇官
伯一人
掌神祇、祭祀、宣教、祝部、神戸、惣判官事、
大副一人 少副一人
掌同伯、余次官准此、
大祐一人 少祐一人
掌審署文案、勾稽失、糺判官内、余判官准此、
大史 少史
掌受事上抄、勘署文案、検出稽失、余主典准此、
史生
掌繕写公文、余史生准此、
官掌
掌通伝訴人、検校使部、
使部

○宣教使
宣教使有数等、従人材定之、
掌宣布教法、

○太政官
左大臣一人 右大臣一人
掌輔佐
天皇、統理大政、惣判官事、
大納言〔三カ〕二人
掌参議太政、敷奏、宣旨、
参議三人
掌同大納言、
大弁三人 少弁六人
掌受付内外庶事、糺判官内、
大史 少史
掌勘 詔奏、造日誌、勘署文案、検出稽失、
〔主記カ〕史生
官掌
使部

○式部省
卿一人

掌　法制、礼式、惣判学校、医、卜、暦算、散位、
図書、雅楽、諸陵、僧尼等事、
大輔(クイフ)一人　少輔一人
掌同卿、
大丞二人　少丞三人
掌糺判省事、
大録(サクワン)　少録(サクワン)
史生
省掌
使部
○大蔵省
卿一人
掌納租税貢献、支度国用、知地図、戸籍、惣判鉱
山、水利、開墾、物産、駅逓、橋道、金銀貨幣、
倉庫、営繕等事、
大輔一人　少輔一人
大丞二人　少丞三人
大録　少録
史生
省掌
使部
○外務省
卿一人
掌総判外国交際、督監貿易、
大輔一人　少輔一人
大丞二人　少丞三人
大録　少録
史生
省掌
使部
○刑部省
卿一人
掌総判聴訟、鞫獄捕亡等、
大輔一人　少輔一人
大丞二人　少丞二人(三カ)
大録　少録
大判事二人　中判事三人　少判事四人
掌鞫問訟獄、断定刑名、
史生
省掌

使部
○集議院
上局
長官一人　次官一人
掌納議事判局務、
議員
掌商議法典、
大主典　少主典
史生
局掌
使部
下局　官員同上局
○待詔局〔院カ〕
長官一人　次官一人
掌受納待詔議書、
○弾正台
尹一人
掌執法守律、糺弾内外非違、
弼一人
大忠三人　少忠三人
掌巡察宮中府中、糺弾非違、
大疏　少疏
大巡察　少巡察
掌巡察府藩県、糺弾非違、
史生
台掌
使部
○寮
頭一人
助
〔ジョウ〕
允
大属（サクワン）　少属
使部
○司
〔カミ〕
正一人
佑（ジョウ）
令史（サクワン）
使部
京都・東京・摂津
○職〔皇太皇后宮職・皇后宮職〕

大夫一人
亮
進
属
史生
○藩　分為大中小三藩
守一人
介
掾
目
史生
○県　分為大小二県
守一人
介
掾
目
史生
○宮内省
卿一人
掌総判宮内庶務、
大輔一人　少輔一人
大丞二人　少丞三人
大録　少録
史生
省掌
使部
○海軍
大将　中将　少将
○陸軍
大将　中将　少将

右巳六月廿四日重役御呼出ニて、大原中納言様より
御渡相成候事、
(朱書)
今般旧官之名ニ拠、御斟酌之上
御定被成、更ニ衆議をも被
聞食度、御別紙を以御下向之趣、謹て奉承知、何等存
付候義も無御座、御尤之御儀奉存候、猶宰相江申聞意
見も候ハヽ、可申上と奉存候、以上、

六月廿七日　　鹿児島藩重役
内田仲之助

右六月廿七日時任清左衛門より、官掌井上勝彌へ差

出候事、

三四七 九段坂上招魂場ニ於テ招魂祭執行ノ旨ヲ回達セラル

コノ日、東京ニテハ、来ル廿九日ヨリ五日間、九段坂上招魂場ニ於テ、招魂祭執行ノ旨ヲ回達セラル、ソノ達書左ノ如シ、

一別紙三通為心得相達申候、下ケ札刻付ヲ以、至急回達、留リ藩より当官江可被相戻候事、

軍務官

招魂場

御用掛

六月廿四日

巳上刻出

薩州藩

外ニ二拾七藩

来廿九日ヨリ五日之間、於九段坂上招魂場、昨年来戦死候者右祭典被為行ニ付、此段申達候也、

但右招魂祠へ供物等奉納致度者、御許容ニ相成候間、来ル廿七日迄ニ当官へ可申出事、

六月〔二十四日〕　軍務官

一今般招魂祭被為行候ニ付テハ、初日祝砲奉納相成候処、諸藩滞京之兵隊、祝砲並花火献納致度者ハ、来ル廿六日迄ニ当官へ可申出事、

六月〔二十四日〕　軍務官

一祭事順序初日祝砲

勅使御差立相成候事、

第二日・三日・四日之間、相撲奉納之事、

但雨天之節ハ日送之事、

第五日昼夜華火奉納之事、

但右同断、

右為心得申達置候事、

右巳六月廿四日軍務官ヨリ廻状ヲ以、御達相成候事、

三四八 島津久光・忠義父子昇叙ノ位記并ニ賞典禄ヲ奉還ス

二十五日、久光公・忠義公、去ル二日附昇叙ノ位記并ニ、十万石下賜ノ賞典禄ヲ奉還シ、ソノ辞表ヲ奉呈セラル、ソノ書左ノ如シ、

島津少将

一高拾万石
依勲功永世下賜候事、
明治二年巳六月
右之通
朝廷被為在
御褒賞候得共、
思召ノ訳有之、別紙之通
御辞表御差出相成候付、此旨承知候諸向へ可申渡候、
六月　知政所

臣久光・臣忠義頓首謹白、前日
宣旨ヲ蒙リ、積年勤
王出兵奏捷ノ勲功ニ依リ、臣久光ヲ以テ権大納言ニ任シ、従二位ニ叙シ、臣忠義ヲ参議ニ任シ、従三位ニ叙シ、御高拾万石永世下賜、家臣西郷某等数人、又各勲功軍労ヲ被録、御高及ヒ御金ヲ賜フ有差、皇恩隆渥、臣久光・臣忠義感戴罔極、惶伏無他、恭惟ルニ、将家窃権七百年ノ久シキ、一朝反正、実ニ陛下ノ神威ト、列聖在天ノ霊トニ之由ル、加之兵興以来天戈ノ所指風靡セサル無ク、僅々周歳ニシテ率土恭順、是ミナ
天意豈ニ人力ノ所致ナラン、臣父子其レ敢テ
天功ヲ貪リ、以テ顕寵ヲ辱フス可ケンヤ、況ンヤ不次ノ重賞万々非所敢当、謹テ
宣旨・位記ヲ封シ
闕下ニ奉還ス、其西郷某等ノ情又臣父子ニ同シ、因テ併セテ其賞典ヲ封還ス、夫レ
王家ノ為ニ微力ヲ致ス、臣子ノ分所当為賞ヲ徼メ、恩ヲ叨ニスル、臣等雖汗下義不敢為、但天威ヲ褻瀆ス、実ニ不堪悚懼、伏冀クハ
聖明臣等ノ衷情ヲ照臨シ賜ヘ、臣久光・臣忠義昧死以聞、

六月二十五日　島津大隅守　久光
島津修理大夫　忠義

明治二巳六月廿九日承知

御附紙

辞表之趣尤ニ被思食候得共、功労　叡感之余被賞賜候ニ付、返上之儀ハ不被及　御沙汰候事、

三四九　中元盂蘭盆会ヲ禁止シ祖先ノ祭祀ハ仲春仲冬両度ニ執行スヘキヲ達ス

コノ日、藩庁ニテハ、中元盂蘭盆会ヲ禁止シ、祖先ノ祭祀ハ仲春・仲冬両度ニ執行スベキヲ達ス、ソノ達書左ノ如シ、

一中元盂蘭盆会之儀、御吟味之訳有之、御領国中一同御禁止被仰付候、左候て祖先祭祀之儀、仲春・仲冬両度ニ執行いたし候様被仰付候条、此旨神社奉行江申渡、向々江も不洩様可申渡候、

但仲春之祭二月四日巳後、仲冬之祭十一月中ノ卯ノ日以後、於其家々祭日相撰可致執行候、尤祭式不案内之者は神社方江可致尋問候、左候て人々おのつから心得之事ニ候得共、墳墓取始末等は愈行届候様可致候、

明治二年巳六月廿五日　　知政所

三五〇　藩庁会計局ヨリ織物所ヘ雇入レタル上州人ヲ帰国セシムヘキヲ報ス

コノ日、又藩庁会計局ヨリ、先般織物所ヘ雇入レタル上州人ニ、糸挽指南人雇入方并ニ養蚕器類買入方トシテ、一応帰国セシムベキニヨリ、宜敷取計方相成ルベキ旨ヲ、東京公用人ニ報セリ、其ノ報知書并ニ返書左ノ如シ、

三五〇ノ一

上州沼田産之　　徳蔵

右は、先般御当地御織物所へ養蚕并白糸製法向ニ付、御雇下相成、此節一往国元へ罷帰、糸挽指南人別段雇入、且養蚕器類買入差越度申出、其通御免相成、三邦丸・豊瑞丸便より其許迄致便船、前文通国元江差越、彼是都合向可取計候間、形行申出候ハヽ、旁都合能可被取計候、尤最初雇下方吉井幸輔取扱ニて差下相成者候間、同人へも被申談、何篇急場早目ニ差越候様可被取計候、以上、

会計局　　市來六左衛門

六月廿五日

東京

公用人

三五〇ノ二

上州沼田産之
徳蔵

右は、養蚕并白糸製法器械取入方、且糸挽指南人雇入方として出府相成候付、委細御掛合之趣致承知候、則上州辺へ出立ニ付、御蔵金之内より弐百両相渡置候処、別紙弐通之通、器械取入指南人雇入来候付、都て横濱より夷艦へ便船、今日差立候付てハ、船中旅込料として、壱人ニ正金拾五両壱歩三朱ツヽ、洋銀十四弗見当銘々江相渡、器械運用等之用心金正金弐拾両、札弐拾五両、徳蔵へ相渡置候付、着之上ハ差引等、御法之通可被申渡候、左候て前文弐百両之儀は差引相済候、尤滞府中旅込料壱日壱人ニ拾五匁、小仕用一朱ツヽ相渡置、且寒冷之砌付、壱人ニ蒲団弐枚ツヽ御蔵払切を以相渡置候、別紙三通壱封相添、此段申越候、以上、

但外ニ糸取車道具五箱、川島十郎左衛門より税所竹兵衛・伊地知清蔵へ書状相添差出候得共、内壱ツ徳蔵へ才領申渡差越候、残リ四ツハ蒸気便船より可差越候、以上、

十月廿五日　　田中清之進

会計奉行衆

別紙留略ス、

三五〇ノ三

上州沼田産之
徳兵衛
外ニ男女
拾四人

右徳兵衛儀、此内白糸挽指南人并器械取入方として、御国元より被差出置候処、都て取入方等相済、今日横濱より夷艦便船差立候付てハ、船中旅込料壱人正金拾五両壱歩三朱ツヽ、銘々へ相渡、器械運賃見当用心金正二十両、札二十五両、同人江相渡置候間、其許より御国元迄之道中御賄料用心金等、御見計を以御渡可給候、此通申越候、以上、

巳十一月　　田中清之進
長崎

三五一　英国公子来京ニ付、本藩兵弐百人ヲ差出スヘキヲ達セラル

二十六日、東京ニテハ、英国公子来京ニ付、本藩兵弐百人ヲシテ大森ニ迎ヘ、前衛タラシムベキヲ達セラル、其ノ達書左ノ如シ、

薩州藩

今般英国公子来京候ニ付、右迎トシテ大森迄其藩兵隊弐百人可差出候事、

但長州藩江後衛申付候間、於其藩ハ前衛可致候、尤日限之儀ハ追テ可相達候事、

六月　軍務官

御呼出之上、小國覺之助を以、村山源七江御渡相成候事、

六月廿六日

一英国公子近々来京ニ付、為迎大森迄兵隊差出前衛可致、日限之義ハ追テ可被仰渡旨、御達被置候処、兵隊之儀奉願候趣有之候付、御暇被下候ハヽ、直様御当府出立為致候積御座候間、前衛等之儀何卒余藩江被仰付被下度、此段申上候、以上、

鹿児島藩
公用人　田中清之進

六月晦日
軍務官

御役所

右村山源七ヨリ、権判事船越洋之助へ差出候事、

御張紙（朱書）

此度之儀ハ未曽有ノ大事件ニテ、深ク被為悩宸襟候ニ付、願之趣無余儀次第ニハ候得共、推テ被仰付候間、精々可被勉励事、

七月十五日御呼出ニ付、山本十次郎罷出候処、岡元啓之輔ヨリ被相渡候事、

三五二　城下士以上ノ者尓後角入・前髪取願出ニ及ハサル旨ヲ達ス

二十七日、藩庁ニテハ、従来城下士以上ノ者、成年ニ達スレバ、願出ノ上角入（スマイ）及ヒ前髪取ヲ行ヒシモ、尓後ハ単ニ成年ノ届出ヲナスコトニ改メタリ、其ノ達書左ノ如シ、

一従前御小姓与以上初て之御目見等相済候上、夫々年輩を以、角入又は前髪取之願申出来候得共、尓後角入れ前髪取之儀は不及願候条、御奉公方相勤、年輩罷成候者は、其段伝事方江可申出候、此旨向々江可申渡候、

明治二年巳六月廿七日　　知政所

三五三　元大隊司令沖直次郎帰藩ノ旨ヲ報ス

コノ日、東京ニテハ、御雇ニテ元大隊司令タリシ沖直次郎ヲ、明日帰藩ノ途ニ就カシムル旨ヲ知政所ヘ報セリ、其ノ書左ノ如シ、

沖　直次郎

右は御雇を以、大隊長被仰付置候処、今般被免候付、明廿八日静ニて爰元差立申候、此段申上越候、以上、

東京　　田中清之進

巳六月廿七日

知政所

三五四　諸士持高ハ従来通軍役高ト称スヘキ旨達ス

コノ月、藩庁ニテハ、従来諸士持高ヲ御軍役高ト称シ来リシニ、近年ハ給地高トノミ唱フレトモ、猶軍役高ト称スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

名義不正は諸事相紊リ、従て心得違之者到来候儀、古今之通弊ニて、諸士持高之儀は、先々より　御当家御軍備之御基本被定置、御軍役高共唱来候処、近年給地高と計唱相成候付、此節より御軍役高と被召替候条、不洩様向々江可申渡候、

明治二年巳六月　　知政所

三五五　常備兵設置ニ付施行法ヲ規定ス

又藩庁ニテハ、常備兵設置ニ付、軍務局・監察局・糺明局ハ、互ニ相照合シテ、軍備厳重ニ施行スベク、其ノ施行法ヲ規定セリ、其ノ規定左ノ如シ、

常備兵被召立候上は、今日取締も軍律ニ被行候条左之通、

一軍務局吟味之上、禁足申付候者有之節は、他之御役場江掛合ニ不及候事、

但伝事江形行可申出事、

一右同兵士被差免候節、跡以姓名伝事方江相付届可申出事、

一軍務局ニて事実難明白事件は、監察局・糺明局江談越

候儀、可為勿論事、

一監察・糺明局ニて兵士犯罪之事件見聞、外出被差留候以上之儀は、必明其事実頭官ニ可掛合、頭官尤と存候ハヽ、直ニ当人江可相達事、

一軍務局ニて罪状之品ニ依ては、兵士差免候上、明事実て糺明方江次渡候儀も可有之事、

一凡兵士犯罪之次第糺明局より確実承及候ハヽ、頭官尽衆議、一同満足する処ニて可処決事、

一凡罪科ニ依て兵士被差免候者、再度兵士被仰付迄之間、他之御役人不相成候事、

右之通被相定候条、軍務局総裁江申渡、監察局并糺明局総裁江も可申渡候、

明治二巳六月　　知政所

三五六　死牛馬ノ取扱ニ付無関係ノ者多数集合シ猥リナル取扱ナキ様注意スヘキヲ達ス

又死牛馬ノ取扱ニ付、無関係ノ者多数集合シテ、猥リナル取扱ナキ様、注意スベキヲ達ス、其ノ達書左ノ如シ、

一死牛馬取扱ニ付てハ、夫々御法も有之事候処、近比右江関係無之者共、多人数相集、猥ケ間敷取扱いたし候段相聞得、決て下輩之者共ニも可有之、如何之至候条、向後右体之儀無之様、支配頭・主人等より屹と申聞置候様、早々可申渡候、

明治二巳六月　　知政所